

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(113)

中小河川改修事業(万之瀬川)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(I)

上水流遺跡 1

縄文時代中期後半から弥生時代編

(南さつま市金峰町)

2007年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



三叉文 (C6類) と南島系壺形土器 (D2類)

序 文

この報告書は、万之瀬川の河川改修事業に伴って、平成12年度及び15年度から17年度にかけて実施した南さつま市金峰町（旧日置郡金峰町）に所在する上水流遺跡の発掘調査の記録（縄文時代中期後半から弥生時代編）です。

上水流遺跡では、縄文時代前期の遺構・遺物をはじめ、複数の時代にわたる生活跡が発見されました。特に、縄文時代前期から中期の深浦式土器・春日式土器などは全国的にも注目を集めています。

また、本改修事業に伴う一連の発掘調査では、中世の遺構・遺物が大量に発見され全国的に注目を集めている持鉢松遺跡や、縄文時代後期の足形を呈する土製品及び弥生時代の鏡、銅鏃などが出土した芝原遺跡など、多くの成果が上がっています。さらに、本遺跡の周辺には、国指定史跡である縄文時代草創期の柵ノ原遺跡をはじめ、「阿多」のへら書土器が出土した小中原遺跡などがあり、この地域は考古学的にも注目を集めている地域でもあります。

本報告書が、県民の皆様はじめ多くの方々にも活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたりご協力をいただいた伊集院土木事務所、南さつま市教育委員会並びに発掘調査に従事された地域の方々にも厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 宮原景信

報告書抄録

ふりがな	かみづる いせき							
書名	上水流通跡1							
副書名	中小河川改修工事(万之瀬川)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	1							
シリーズ名	鹿兒島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	113							
編著者名	東郷克利・抜木茂樹・廣栄次・高山孝一・黒川忠広・上床真・野間口勇							
編集機関	鹿兒島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿兒島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL.0995-48-5811							
発行年月日	2007年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	面積㎡	調査起因
上水流通跡	南さつま市 金峰町花瀬 上水流・森山	462209	35-98	31° 25' 02"	130° 20' 22"	2000.04.24 — 2001.03.29 2003.08.09 — 2004.03.19 — 2004.05.14 — 2005.02.04 2005.05.09 — 2005.09.28	15,500	中小河川改修 (万之瀬川)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上水流通跡	散布地	縄文時代中期後半～後期	集石8基 土坑3基 焼土44基 ビット92基	阿高式土器 南福寺式土器 指宿式土器 磨消縄文土器 松山式土器 土製品 石鏃・石匙・石斧 磨石・石皿		晩期精製土器に塗布された赤色顔料には、同一個体内外面で水銀朱とベンガラとを使い分けている例がある。		
		縄文時代晩期	集石1基 土坑11基 焼土16基 ビット111基	入佐式土器 黒川式土器 干河原段階 三叉文施文の土器 孔列土器 刻目突帯文土器 南島系壺形土器 石鏃・石匙・石斧 磨石・石皿 石製品				
		弥生時代	検出されず	高橋式土器 入来Ⅱ式土器 黒髪Ⅰ式土器 磨製石鏃 磨製穿孔具 扁平片刃石斧				
遺跡の概要	<p>上水流通跡では、縄文時代前期から近世にかけての遺構・遺物が発見されている。今回の報告は、縄文時代中期後半から弥生時代編である。</p> <p>縄文時代中期後半から後期にかけては、阿高式系土器と指宿式土器が、縄文時代晩期では、黒川式土器及び後続する干河原段階の土器がまとまって出土した。中でも、三叉文を有する資料が出土するなど、これまで不明瞭であった時期について良好な検討資料が出土している。また、整穴住居跡こそ発見されなかったが、各時期ともに、集石や土坑、ビットや焼土跡などが多数検出され、一定期間人々が生活していた様子が窺える。弥生時代では、磨製穿孔具などの特徴的な石器が出土し、周辺遺跡との関係が目される。</p> <p>また、本報告書では縄文時代後期の編物圧痕のある底部片や縄文時代晩期の組織痕土器について、積極的にモデリング画像を採り紹介を行っている。</p>							



上水流遺跡位置図 (1/25,000)

例 言

- 1 本書は、中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う上水流遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県南さつま市金峰町（旧日置郡金峰町）花瀬・森山に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、県土木部河川課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は、平成12年4月24日～平成13年3月29日、平成15年8月7日～平成16年3月19日、平成16年5月14日～平成17年2月4日、平成17年5月9日～9月28日にかけて実施し、整理作業・報告書作成は平成17年度・平成18年度に実施した。
- 5 遺物番号は、各章ごとに土器、石器でそれぞれ通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、県土木部が提示した工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 8 本書には、京都大学総合博物館の御厚意により、同館所蔵の関連資料も併せて収載した。
- 9 発掘調査における図面の作成、写真の撮影は、各年度の調査担当者が行った。空中写真撮影は、有限会社ふじた、有限会社スカイサーベイ九州に委託した。
- 10 遺構実測図のトレースは、整理作業員の協力を得て黒川忠広が行った。
- 11 土器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て黒川が行った。
- 12 石器の実測・トレースの一部は、整理作業員の協力を得て東郷克利・廣栄次が行い、一部は、株式会社埋蔵文化財サポートシステム、株式会社九州文化財研究所、株式会社アイシン精機に委託し、監修は東郷・廣が行った。
- 13 自然科学分析は、株式会社バリノ・サーヴェイ、株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 14 遺物の写真撮影は、黒川が行った。
- 15 本書の編集は、黒川が担当し、執筆の分担は次のとおりである。

第1章	上床 真
第2章	上床 真
第3章 第1・2節	抜木 茂樹
第3節	黒川 忠広
第4節	東郷 克利，廣 栄次
第4章 第1節～第3節（1）	黒川 忠広
（2）	東郷 克利，廣 栄次
第5章 第1節～第3節（1）	黒川 忠広
（2）	東郷 克利，廣 栄次
第6章	上床 真
第7章	各文頭に記載
第8章	各節末に記載
付 編	黒川 忠広
- 16 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。なお、上水流遺跡の遺物注記の略号は「KMZ」、「KZ」である。

本文目次

巻頭版

序文

報告書抄録

例言

目次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査の概要	12
第1節 発掘調査の方法	12
第2節 層位	12
第3節 整理事業の経過	12

第4節 遺物の分類概要	12
第4章 縄文時代中期後半から後期の調査	23
第1節 概要	23
第2節 遺構	23
第3節 遺物	37
第5章 縄文時代晩期の調査	89
第1節 概要	89
第2節 遺構	89
第3節 遺物	89
第6章 弥生時代の調査	265
第1節 概要	265
第2節 土器	265
第3節 石器	265
第7章 科学分析	270
第8章 縄文時代中期後半から弥生時代編のまとめ	286
付 編	311

挿図目次

第1図 遺跡周辺地形の変遷図	7
第2図 周辺遺跡位置図	10
第3図 調査対象集団図	13
第4図 西側土層断面図(1)	14
第5図 西側土層断面図(2)	15
第6図 北側土層断面図(1)	16
第7図 北側土層断面図(2)	17
第8図 遺構配置図(1)	24
第9図 遺構配置図(2)	25
第10図 遺構配置図(3)	26
第11図 遺構配置図(4)	27
第12図 遺構配置図(5)	28
第13図 遺構配置図(6)	29
第14図 集石実測図(1)	30
第15図 集石実測図(2)	31
第16図 土坑実測図	33
第17図 焼土実測図	34
第18図 焼土内出土遺物(1)	34
第19図 焼土3及び焼土内出土遺物(2)	36
第20図 掲載遺物の出土状況図(1)	38
第21図 掲載遺物の出土状況図(2)	39
第22図 掲載遺物の出土状況図(3)	40
第23図 掲載遺物の出土状況図(4)	41
第24図 掲載遺物の出土状況図(5)	42
第25図 掲載遺物の出土状況図(6)	43
第26図 分類別出土状況図(1)	44
第27図 分類別出土状況図(2)	45
第28図 遺物実測図(1) 1類土器①	46
第29図 遺物実測図(2) 1類土器②	47
第30図 遺物実測図(3) 1類土器③	48
第31図 遺物実測図(4) 1類土器④	49
第32図 遺物実測図(5) 2類土器①	50
第33図 遺物実測図(6) 2類土器②	51
第34図 遺物実測図(7) 2類土器③	52
第35図 遺物実測図(8) 2類土器④	53
第36図 遺物実測図(9) 2類土器⑤	54
第37図 遺物実測図(10) 2類土器⑥	55
第38図 遺物実測図(11) 2類土器⑦	56
第39図 遺物実測図(12) 2類土器⑧	57
第40図 遺物実測図(13) 2類土器⑨	58
第41図 遺物実測図(14) 2類土器⑩	59

第42図 遺物実測図(15) 3類土器	60
第43図 遺物実測図(16) 4類土器①	61
第44図 遺物実測図(17) 4類土器②	62
第45図 遺物実測図(18) 5類土器①	63
第46図 遺物実測図(19) 5類土器②	64
第47図 遺物実測図(20) 6類土器①	65
第48図 遺物実測図(21) 6類土器②	66
第49図 遺物実測図(22) 6類土器③	67
第50図 遺物実測図(23) 6類土器④・7類土器	68
第51図 遺物実測図(24) 8類土器①	69
第52図 遺物実測図(25) 8類土器②・9類土器①	70
第53図 遺物実測図(26) 9類土器②	71
第54図 遺物実測図(27) 9類土器③・10類土器	72
第55図 石材別出土状況図(1)	76
第56図 石材別出土状況図(2)	77
第57図 石材別出土状況図(3)	78
第58図 石材別出土状況図(4)	79
第59図 石材別出土状況図(5)	80
第60図 石器実測図(1)	81
第61図 石器実測図(2)	82
第62図 石器実測図(3)	83
第63図 石器実測図(4)	84
第64図 石器実測図(5)	85
第65図 石器実測図(6)	86
第66図 石器実測図(7)	87
第67図 石器実測図(8)	88
第68図 遺構配置図(1)	90
第69図 遺構配置図(2)	91
第70図 遺構配置図(3)	92
第71図 遺構配置図(4)	93
第72図 遺構配置図(5)	94
第73図 遺構配置図(6)	95
第74図 遺構配置図(7)	96
第75図 集石・土坑実測図及び集石内出土遺物	97
第76図 土坑内遺物出土状況図	98
第77図 土坑実測図	99
第78図 土坑内遺物実測図(1)	100
第79図 土坑内遺物実測図(2)	101
第80図 土坑内遺物実測図(3)	102
第81図 土坑内遺物実測図(4)	103
第82図 土坑内遺物実測図(5)	104

第83回	分類別出土状況図 (1)	106
第84回	分類別出土状況図 (2)	107
第85回	分類別出土状況図 (3)	108
第86回	分類別出土状況図 (4)	109
第87回	分類別出土状況図 (5)	110
第88回	分類別出土状況図 (6)	111
第89回	分類別出土状況図 (7)	112
第90回	分類別出土状況図 (8)	113
第91回	掲載遺物の出土状況図 (1)	114
第92回	掲載遺物の出土状況図 (2)	115
第93回	掲載遺物の出土状況図 (3)	116
第94回	掲載遺物の出土状況図 (4)	117
第95回	掲載遺物の出土状況図 (5)	118
第96回	掲載遺物の出土状況図 (6)	119
第97回	掲載遺物の出土状況図 (7)	120
第98回	掲載遺物の出土状況図 (8)	121
第99回	掲載遺物の出土状況図 (9)	122
第100回	掲載遺物の出土状況図 (10)	123
第101回	掲載遺物の出土状況図 (11)	124
第102回	掲載遺物の出土状況図 (12)	125
第103回	掲載遺物の出土状況図 (13)	126
第104回	掲載遺物の出土状況図 (14)	127
第105回	掲載遺物の出土状況図 (15)	128
第106回	掲載遺物の出土状況図 (16)	129
第107回	掲載遺物の出土状況図 (17)	130
第108回	遺物実測図 (1) A 1 類土器①	131
第109回	遺物実測図 (2) A 1 類土器②	132
第110回	遺物実測図 (3) A 1 類土器③	133
第111回	遺物実測図 (4) A 1 類土器④・A 2 類土器①	134
第112回	遺物実測図 (5) A 2 類土器②	135
第113回	遺物実測図 (6) A 3 類土器①	136
第114回	遺物実測図 (7) A 3 類土器②	137
第115回	遺物実測図 (8) A 3 類土器③	138
第116回	遺物実測図 (9) A 3 類土器④	139
第117回	遺物実測図 (10) A 3 類土器⑤	140
第118回	遺物実測図 (11) A 3 類土器⑥	141
第119回	遺物実測図 (12) A 4 類土器①	142
第120回	遺物実測図 (13) A 4 類土器②	143
第121回	遺物実測図 (14) A 4 類土器③	144
第122回	遺物実測図 (15) A 4 類土器④	145
第123回	遺物実測図 (16) A 5 類土器①	146
第124回	遺物実測図 (17) A 5 類土器②・A 6 類土器①	147
第125回	遺物実測図 (18) A 6 類土器②	148
第126回	遺物実測図 (19) A 6 類土器③	149
第127回	遺物実測図 (20) A 6 類土器④・A 7 類土器①	150
第128回	遺物実測図 (21) A 7 類土器②	151
第129回	遺物実測図 (22) A 7 類土器③	152
第130回	遺物実測図 (23) A 7 類土器④・A 8 類土器	153
第131回	遺物実測図 (24) A 9 類土器①	154
第132回	遺物実測図 (25) A 9 類土器②	155
第133回	遺物実測図 (26) A 9 類土器③	156
第134回	遺物実測図 (27) A 9 類土器④・A 10 類土器①	157
第135回	遺物実測図 (28) A 10 類土器②	158
第136回	遺物実測図 (29) A 10 類土器③	159
第137回	遺物実測図 (30) A 10 類土器④	160
第138回	遺物実測図 (31) A 10 類土器⑤	161
第139回	遺物実測図 (32) A 10 類土器⑥	162
第140回	遺物実測図 (33) A 11 類土器①	163
第141回	遺物実測図 (34) A 11 類土器②・A 12 類土器①	164
第142回	遺物実測図 (35) A 12 類土器②	165
第143回	遺物実測図 (36) A 12 類土器③	166
第144回	遺物実測図 (37) A 13 類土器①	167
第145回	遺物実測図 (38) A 13 類土器②	168
第146回	遺物実測図 (39) A 13 類土器③	169

第147回	遺物実測図 (40) A 13 類土器④	170
第148回	遺物実測図 (41) A 13 類土器⑤・A 14 類土器①	171
第149回	遺物実測図 (42) A 14 類土器②・A 15 類土器①・A 16 類土器①	172
第150回	遺物実測図 (43) A 16 類土器②	173
第151回	遺物実測図 (44) A 17 類土器①	174
第152回	遺物実測図 (45) A 17 類土器②・B 類土器①	175
第153回	遺物実測図 (46) B 類土器②	176
第154回	遺物実測図 (47) B 類土器③	177
第155回	遺物実測図 (48) B 類土器④	178
第156回	遺物実測図 (49) B 類土器⑤	179
第157回	遺物実測図 (50) B 類土器⑥	180
第158回	遺物実測図 (51) B 類土器⑦	181
第159回	遺物実測図 (52) B 類土器⑧	182
第160回	遺物実測図 (53) B 類土器⑨	183
第161回	遺物実測図 (54) B 類土器⑩	184
第162回	遺物実測図 (55) B 類土器⑪	185
第163回	遺物実測図 (56) C 1 類土器	187
第164回	遺物実測図 (57) C 2 類土器①	188
第165回	遺物実測図 (58) C 2 類土器②	189
第166回	遺物実測図 (59) C 2 類土器③・C 3 類土器①	190
第167回	遺物実測図 (60) C 3 類土器②・C 4 類土器①	191
第168回	遺物実測図 (61) C 4 類土器②	192
第169回	遺物実測図 (62) C 4 類土器③	193
第170回	遺物実測図 (63) C 5 類土器①	194
第171回	遺物実測図 (64) C 5 類土器②	195
第172回	遺物実測図 (65) C 5 類土器③	196
第173回	遺物実測図 (66) C 5 類土器④	197
第174回	遺物実測図 (67) C 5 類土器⑤・C 6 類土器	198
第175回	遺物実測図 (68) C 7 類土器①	199
第176回	遺物実測図 (69) C 7 類土器②	200
第177回	遺物実測図 (70) C 8 類土器①	201
第178回	遺物実測図 (71) C 8 類土器②・C 9 類土器①	202
第179回	遺物実測図 (72) C 9 類土器②	203
第180回	遺物実測図 (73) C 9 類土器③	204
第181回	遺物実測図 (74) C 9 類土器④	205
第182回	遺物実測図 (75) D 1 類土器①	206
第183回	遺物実測図 (76) D 1 類土器②	207
第184回	遺物実測図 (77) D 1 類土器③・D 2 類土器	208
第185回	遺物実測図 (78) E 類土器	209
第186回	石材別出土状況図 (1)	217
第187回	石材別出土状況図 (2)	218
第188回	石材別出土状況図 (3)	219
第189回	石材別出土状況図 (4)	220
第190回	石材別出土状況図 (5)	221
第191回	石材別出土状況図 (6)・器種別出土状況図 (1)	222
第192回	器種別出土状況図 (2)	223
第193回	器種別出土状況図 (3)	224
第194回	器種別出土状況図 (4)	225
第195回	器種別出土状況図 (5)	226
第196回	器種別出土状況図 (6)	227
第197回	石器実測図 (1)	228
第198回	石器実測図 (2)	229
第199回	石器実測図 (3)	230
第200回	石器実測図 (4)	231
第201回	石器実測図 (5)	232
第202回	石器実測図 (6)	233
第203回	石器実測図 (7)	234
第204回	石器実測図 (8)	235
第205回	石器実測図 (9)	236
第206回	石器実測図 (10)	237
第207回	石器実測図 (11)	238
第208回	石器実測図 (12)	239
第209回	石器実測図 (13)	240
第210回	石器実測図 (14)	241

第211図 石器実測図 (15)	242
第212図 石器実測図 (16)	243
第213図 石器実測図 (17)	244
第214図 石器実測図 (18)	245
第215図 石器実測図 (19)	246
第216図 石器実測図 (20)	247
第217図 石器実測図 (21)	248
第218図 石器実測図 (22)	249
第219図 石器実測図 (23)	250
第220図 石器実測図 (24)	251
第221図 石器実測図 (25)	252
第222図 石器実測図 (26)	253
第223図 石器実測図 (27)	254
第224図 石器実測図 (28)	255
第225図 石器実測図 (29)	256
第226図 石器実測図 (30)	257
第227図 石器実測図 (31)	258
第228図 石器実測図 (32)	259
第229図 石器実測図 (33)	260
第230図 石器実測図 (34)	261
第231図 石器実測図 (35)	262
第232図 石器実測図 (36)	263
第233図 石器実測図 (37)	264
第234図 遺物の出土状況図	266
第235図 遺物実測図 (1)	267
第236図 遺物実測図 (2)	268
第237図 遺物実測図 (3)	269
第238図 横軸曲線型土器分布図	274
第239図 植物珪酸体分析試料	276
第240図 蛍光X線分析試料	277

第241図 分析試料データ	278
第242図 分析試料データ	280
第243図 分析試料データ	282
第244図 測定データ	284
第245図 土器の出土割合	286
第246図 石器組成	286
第247図 底部編物圧痕類別	288
第248図 土器の出土割合	293
第249図 石器組成	293
第250図 千河原段階組み合せ図	295
第251図 県下の主な三叉文土器	296
第252図 石材別出土率	299
第253図 五角形鏃新旧関係図	300
第254図 打製石斧の最大長と最大幅の分布状況図	301
第255図 両袂り部間の長さ別個体数	302
第256図 有肩石斧外形投影図	301
第257図 再利用・再加工による変遷	302
第258図 有肩石斧の欠損部位別割合	302
第259図 欠損品と完形品の袂部刃縁端部の長さ	303
第260図 遺跡ごとの刃縁部形態	305
第261図 横刃形石器の長軸・短軸の長さ刃縁部形態	305
第262図 遺跡ごとの刃縁部調整	306
第263図 横刃形石器の刃部上面積と厚減範囲	306
第264図 刃縁部上面積A・Bを有する器形②③の厚減範囲	306
第265図 横刃形石器の厚減の範囲(1)	307
第266図 横刃形石器の厚減の範囲(2)	308
第267図 横刃形石器の分類概念図	309
第268図 使用法と使用痕の範囲・程度	310
第269図 指宿遺跡出土資料(1)	311
第270図 指宿遺跡出土資料(2)	312

表目次

表1 周辺遺跡一覧	11
表2 石材分類表	18
表3 石器分類表(1)	19
表4 石器分類表(2)	20
表5 焼土観察表	31
表6 柱穴観察表(1)	31
表7 柱穴観察表(2)	33
表8 焼土観察表	105
表9 柱穴観察表(1)	105
表10 柱穴観察表(2)	105
表11 採取試料一覧	270
表12 花粉一覧表	271
表13 珪酸化土産出表と分布	273
表14 植物珪酸体一覧表	274
表15 試料の名称	276
表16 土器胎土中の植物珪酸体一覧表	276
表17 蛍光X線分析結果(化学組成)	279
表18 放射性炭素年代測定結果(1)	279
表19 放射性炭素年代測定結果(2)	279
表20 暦年校正結果	279
表21 放射性炭素年代測定結果	280
表22 暦年校正結果	280
表23 測定試料及び処理	281
表24 放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果	281
表25 樹輪測定結果	281
表26 測定試料及び処理	282
表27 放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果	282
表28 顔料分析一覧	283
表29 底部編物圧痕土器観察表	287
表30 上木流遺跡出土の編物圧痕土器一覧	288

表31 千河原段階出土遺跡一覧	295
表32 県内の三叉文出土遺跡一覧	296
表33 県内出土の五角形鏃一覧	299
表34 類別点数	301
表35 器形と使用法の相関関係	305
表36 縄文時代中期後半～後期土器観察表(1)	313
表37 縄文時代中期後半～後期土器観察表(2)	314
表38 縄文時代中期後半～後期土器観察表(3)	315
表39 縄文時代中期後半～後期土器観察表(4)	316
表40 縄文時代晩期土器観察表(1)	317
表41 縄文時代晩期土器観察表(2)	318
表42 縄文時代晩期土器観察表(3)	319
表43 縄文時代晩期土器観察表(4)	320
表44 縄文時代晩期土器観察表(5)	321
表45 縄文時代晩期土器観察表(6)	322
表46 縄文時代晩期土器観察表(7)	323
表47 縄文時代晩期土器観察表(8)	324
表48 縄文時代晩期土器観察表(9)	325
表49 縄文時代晩期土器観察表(10)	326
表50 縄文時代晩期土器観察表(11)	327
表51 遺構内出土土器観察表	328
表52 弥生時代の土器観察表	328
表53 縄文時代中期後半～後期土器一覧	329
表54 縄文時代晩期土器一覧(1)	330
表55 縄文時代晩期土器一覧(2)	331
表56 縄文時代晩期土器一覧(3)	332
表57 縄文時代晩期土器一覧(4)	333
表58 縄文時代晩期土器一覧(5)	334
表59 弥生時代土器一覧	334

図版目次

図版1	三文文（C 6 期）と南島系垂形土器（D 2 期）	図版38	400の黒色化した断面の状況	175
図版2	平成12年度の発掘作業員	図版39	442の黒色化した断面の状況	182
図版3	現地説明会の様子	図版40	445の黒色化した断面の状況	183
図版4	平成15年度の発掘作業員	図版41	450のX線写真	184
図版5	作業の様子	図版42	467の黒色化した断面の状況	185
図版6	現地説明会の様子	図版43	組織痕土器-モデリング画像	186
図版7	地層観察のためのボーリング作業	図版44	花粉化石	271
図版8	現地指導の様子	図版45	珪酸化石写真	272
図版9	平成16年度の発掘作業員	図版46	植物珪酸体写真	275
図版10	作業の様子	図版47	灰ゴラ写真	275
図版11	人骨取り上げ指導の様子	図版48	植物珪酸体写真	277
図版12	平成17年度の発掘作業員	図版49	樹種検出の状況①・②	281
図版13	上空から見た上水流通路周辺	図版50	出土木材組織光学顕微鏡写真	282
図版14	遺跡遠景（榎ノ原遺跡より）	図版51	赤色顔料電子顕微鏡写真	285
図版15	万之瀬川上流より見た上水流通路	図版52	底部編物瓦痕土器類別写真	289
図版16	万之瀬川下流より見た上水流通路	図版53	上水流通路出土の底部編物瓦痕土器（1）	290
図版17	土層断面写真（F-3・4区境）	図版54	上水流通路出土の底部編物瓦痕土器（2）	291
図版18	土層断面写真（V-W-7区境）	図版55	縄文時代中期後半～後期の遺物①	335
図版19	土層断面写真（K-L-8区）	図版56	縄文時代中期後半～後期の遺物②	336
図版20	石材分類写真（1）	図版57	縄文時代中期後半～後期の遺物③	337
図版21	石材分類写真（2）	図版58	縄文時代中期後半～後期の遺物④	338
図版22	遺物出土状況写真	図版59	縄文時代中期後半～後期の遺物⑤	339
図版23	築石検出状況	図版60	縄文時代晩期遺構内遺物	340
図版24	遺構内遺物	図版61	縄文時代晩期の遺物①	341
図版25	焼土3及び2類土器出土状況	図版62	縄文時代晩期の遺物②	342
図版26	2群2類25出土状況	図版63	縄文時代晩期の遺物③	343
図版27	底面の様子	図版64	縄文時代晩期の遺物④	344
図版28	2群8類169の出土状況	図版65	縄文時代晩期の遺物⑤	345
図版29	169写真	図版66	縄文時代晩期の遺物⑥	346
図版30	169の接合痕	図版67	縄文時代晩期の遺物⑦	347
図版31	遺物の出土状況	図版68	縄文時代晩期の遺物⑧	348
図版32	築石検出状況	図版69	縄文時代晩期の遺物⑨	349
図版33	土坑11の調査状況	図版70	縄文時代晩期の遺物⑩	350
図版34	239・240の内面付着の炭化物	図版71	縄文時代晩期の遺物⑪	351
図版35	294の内面	図版72	縄文時代晩期の遺物⑫	352
図版36	299の内面	図版73	縄文時代晩期の遺物⑬	353
図版37	392の接合痕	図版74	弥生時代の遺物	354

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護と活用を図るため、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて各開発関係機関との間で協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部河川課（以下「県土木部」）は、中小河川改修事業（万之瀬川）の日置郡金峰町内（現南さつま市）における事業計画実施に先立って、対象地内における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会文化課（現文化財課、以下「県文化財課」）に照会した。これを受けて県文化財課、金峰町教育委員会が平成5年度に分布調査を実施したところ、事業区域内に万之瀬川底遺跡、松ヶ鼻遺跡、持林松遺跡、渡畑遺跡、芝原遺跡、上水流遺跡の6遺跡の所在が判明した。この結果を受けて、県土木部・県文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「県立埋蔵文化財センター」）の3者で協議した結果、対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することとし、上水流遺跡の調査は金峰町教育委員会が担当した。

確認調査は、平成7年8月1日から12月15日の期間に実施し、その結果、予定地において約13,000㎡の範囲に遺跡が残存していることが確認された（この分についての報告書は、既に金峰町教育委員会が刊行されている）。

これを受けて、平成12年度（新築堤防部分）・平成15年度（旧堤防と新築堤防の間）・平成16～17年度（新築堤防部分以外の部分・旧堤防部分）の本調査を実施した。

なお、平成16年度には調査対象範囲についての協議を県土木部・県文化財課・県立埋蔵文化財センターの3者で行った。その結果、調査範囲の拡大が判明し、調査期間を平成17年度の上半期までとした。

整理作業は、平成17年度の発掘調査終了後に着手し、平成18年度まで実施した。なお、平成19年度以降も継続して作業を実施する計画である。

第2節 調査の組織

(1) 平成12年度

起回事業主体者	鹿児島県土木部河川課 (伊集院土木事務所)
調査主体者	鹿児島県教育委員会
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長 井上 明文
調査企画者	次長兼総務課長 黒木 友幸 調査課長 新東 晃一 調査課長補佐 立神 次郎 主任文化財主事 兼第一調査係長 青嶋 和憲 主任文化財主事 中村 耕治
調査担当者	文化財主事 寺師 孝則 文化財研究員 宗岡 克英

文化財研究員	今村 敏照
文化財研究員	上床 真
総務係長	有村 貴
主 事	溜池 佳子
調査指導者	鹿児島大学法文学部 助 教 授 本田 道輝 たたら研究会 六澤 義功

(2) 平成15年度

起回事業主体者	鹿児島県土木部河川課 (伊集院土木事務所)
調査主体者	鹿児島県教育委員会
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長 木原 俊孝 次長兼総務課長 田中 文雄 調査課長 新東 晃一 調査課長補佐 立神 次郎 主任文化財主事 兼第一調査係長 池畑 耕一 主任文化財主事 中村 耕治
調査企画者	文化財主事 中村 和美 文化財主事 最上 優子
調査担当者	文化財主事 平野 浩二 総務係長 長野 治二

(3) 平成16年度

起回事業主体者	鹿児島県土木部河川課 (伊集院土木事務所)
調査主体者	鹿児島県教育委員会
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長 木原 俊孝 次長兼総務課長 貫雅 彰 調査課長 新東 晃一 調査課長補佐 立神 次郎 主任文化財主事 兼第二調査係長 彌榮 久志 主任文化財主事 長野 眞一
調査企画者	文化財主事 抜木 茂樹 文化財主事 富山 孝一 文化財研究員 黒川 忠広 文化財研究員 上床 真
調査担当者	文化財主事 平野 浩二 文化財研究員 中村 直子 文化財研究員 黒川 忠広 文化財研究員 上床 真
調査指導者	鹿児島大学法文学部 助 教 授 本田 道輝 鹿児島大学法文学部 助 教 授 中村 直子 鹿児島大学総合研究博物館 助 教 授 橋本 達也 鹿児島大学法文学部 教 授 渡辺 芳郎 鹿児島大学法文学部 教 授 森島 広

(4) 平成17年度

起因事業主体者 鹿兒島県土木部河川課
(伊集院土木事務所)

調査主体者 鹿兒島県教育委員会

調査責任者 鹿兒島県立埋蔵文化財センター
所 長 上今 常雄

調査企画者 次長兼総務課長 有川 昭人
次長兼調査第一課長
新東 晃一
主任文化財主事兼
調査第一課第二調査係長
長野 慎一

調査担当者 文化財主事 野間口 勇
文化財主事 抜木 茂樹
文化財主事 黒川 忠広
文化財研究員 上床 真

調査事務担当者 主幹兼総務係長 平野 浩二

調査指導者 都城市教育委員会
主 査 桑畑 光博
鹿兒島大学法文学部
教 授 森脇 広
鹿兒島女子短期大学
助 教 堀 竹中 正巳

(5) 平成18年度

起因事業主体者 鹿兒島県土木部河川課
(伊集院土木事務所)

調査主体者 鹿兒島県教育委員会

調査責任者 鹿兒島県立埋蔵文化財センター
所 長 上今 常雄
(7月まで)
宮原 景信
(8月から)

調査企画者 次長兼総務課長 有川 昭人
次 長 新東 晃一
主任文化財主事兼
調査第一課長 池畑 耕一
主任文化財主事兼
調査第一課第二調査係長
中村 耕治

調査担当者 主任文化財主事 繁昌 正幸
文化財主事 東郷 克利
文化財主事 抜木 茂樹
文化財主事 富山 孝一
文化財主事 廣 栄次
文化財主事 黒川 忠広
文化財研究員 上床 真

調査事務担当者 総務係長 寄井田正秀

調査指導者 大阪大谷大学
非常勤講師 三辻 利一
鹿兒島女子短期大学
助 教 堀 竹中 正巳

企画担当者 文化財主事 中村 和美
文化財主事 三垣 恵一

報告書作成検討委員会
平成18年12月15日 所長ほか12名

報告書作成指導委員会
平成18年12月13日 新東次長ほか7名

第3節 調査の経過

調査の経過については、調査日誌をもとに主な出来事を月単位で記していきたい。

平成12年度
(平成12年4月24日～平成13年3月29日・実働194日間)

<4月>
機材搬入・オリエンテーション実施(24日)。D～I-2～4区のI～Ⅲa層掘り下げ。

<5月>
B～K-1～4区のI～Ⅲa層掘り下げ。中近世のビット群検出。I-3区で、2条の並行する溝状遺構検出。土坑(木箱墓か)検出。カマド状遺構(H-5区)検出。溝状遺構内に列石状石組み検出。有脚底部土器(晩期)出土。晩期勾玉出土(E-4区)。朝隈兼典氏(瀬柱町教育委員会)長期研修の現地実習開始(15日～30日)。井上所長視察(17日)。倉元埋蔵文化財係長、加世田市文化財保護審議委員が来跡(23日)。青崎係長・中村主任現地視察(24日)。山本文雄文化財課長現地視察(25日)。長期研修生5名が現地実習(30日)。

<6月>
B～L-2～5区のⅢb層まで掘り下げ。M-4・5・6区I～Ⅲb層掘り下げ。E・F-3区で晩期土坑検出。溝状遺構(大溝及び溝S-D-1～5)検出。航空写真撮影(2日)。宮下貴浩氏(金峰町教育委員会、以下「金峰町教委」)来跡(5日)。前迫亮一氏・濱崎一高氏(県立埋蔵文化センター・所内安全衛生パトロール)来跡(12日)。永山修一氏(準人文化研究会・ラ・サール学園)来跡(14日)。

<7月>
C～E-3・4区、G～I-3～5区、K～U-5～7区のI～Ⅲb層まで掘り下げ。掘立建物跡検出。竪穴建物跡(K-4区)検出。D～F-2～4区、重機によりⅣ層(V層相当・縄文時代中期)まで掘り下げ。

<8月>
H・I-1～2～5区、J～P-4～7区のⅡ～Ⅲb層まで掘り下げ。B～F-1～3区Ⅱ～Ⅳ層(V層相当・縄文時代中期)掘り下げ。D～F-2～4区から縄文時代中期の春日式土器出土。竪穴建物跡(K-4区)調査。集石検出(J・K-5区)。円形土坑墓(桶墓・座棺)検出。帯状硬化面(道路状遺構)検出(S・T-5・6区)。大保秀樹氏・溜池佳子氏(県立埋蔵文化センター・所内安全衛生パトロール)来跡(9日)。西田茂氏(北海道埋蔵文化センター)来跡(10日)。立神補佐、中村主任現地調査(11日)。立神勇志氏(県立埋蔵文化センター)、前田奈緒氏(別府大学3年生)来跡(16日)。永山氏(ラ・サール学園)来跡(25日)。

<9月>
D～I-3～5区Ⅳ層(V層相当・縄文時代中期相当)掘り下げ。L・M・N-3・4区Ⅲa層掘り下げ。P～V-5～7区のⅡ～Ⅲb層まで掘り下げ。近世土坑(鉄炉A-G)検出。大型溝状遺構・帯状硬化面(古道か)検出。J～R区にかけて中・近世のビ

ット群を検出。S-6区で中近世の掘立柱建物跡を検出。縄文時代後期の包含層から円盤形多穿孔土製品出土。穴澤義功氏（たたら研究会委員）現地指導（20～22日）。桑波田武志氏・切通雅子氏（県立埋文センター）来跡（22日）。長野眞一氏（県立埋文センター）来跡（26日）。

<10月>

D-H-3～5区Ⅳ層（Ⅴ層相当・縄文時代中期相当）掘り下げ。J-M-4・5区、O-U-4～7区Ⅰ～Ⅳ層掘り下げ。V-6・7・8区のⅤ層掘り下げ。古墳時代土器埋納土坑（K-4区）・カマド状遺構検出（Q-6区）・環状焼土城をもつ大型集石（縄文時代中期【春日式土器を伴う】）検出（E・F-4区）・焼土群検出（後晩期）・近世大型土坑敷基検出。児玉健一郎氏（県文化財課）来跡（10日）。徳田有希乃氏（県立埋文センター）来跡（17日）。

<11月>

B-D-2区Ⅴ層掘り下げ。N-P-4・5区Ⅱ層～Ⅲa層掘り下げ。P-W-4～8区のⅡ～Ⅳ層掘り下げ。カマド状遺構検出（P・Q-6区）・近世土坑敷基検出・環状焼土城をもつ大型集石（縄文時代中期【春日式土器を伴う】）検出（E・F-4区）・焼土群検出（後晩期）。

<12月>

N-P-5～7区Ⅲa～Ⅲb層掘り下げ。O-V-5～7区Ⅲ～Ⅴ層掘り下げ。U-5～8区でトレンチ内Ⅳ層から曾畑式土器出土。T-5区でトレンチ内Ⅴ層下部から深浦式土器出土。古墳時代土器集積遺構（R-6区）・近世土坑（鉄がH・1）検出・カマド状遺構検出（Q-6区）・大型溝状遺構（J-M-4・5区）・焼土群検出（後晩期）。井上所長・牛ノ濱係長視察（15日）。本田道輝氏（鹿角大学助教授、以下鹿大）現地指導（19日）。宮下氏・相美伊久雄氏（金峰町教委）来跡（21日）。

<1月>

B-F-2～4区Ⅳ層掘り下げ。I・J-4・5区Ⅲb層掘り下げ。N-V-4～7区Ⅳ～Ⅴ層掘り下げ。重機によりH・I区に東西に走る農道を削平して別の場所に付け替え（5日）。降雪のため、交通に支障あり（15日）。健康診断（24日）。29日にプレハブが渡畑遺跡に移動。上水流通路には、仮設建物を建てて対応。近世土坑（鉄がJ）・カマド状遺構検出（Q-6区）・大型溝状遺構（J-M-4・5区）・焼土群検出（後晩期）・近世小溝群（K・L・M-5・6区）。中村直子氏・新里貴之氏（鹿大埋文文化財調査室）来跡（26日）。

<2月>

一部作業員が渡畑遺跡へ移動（5日）。I-M-3～5区Ⅲb～Ⅳ層（後期～晩期）掘り下げ。N-V-5～7区Ⅴ～Ⅵ層掘り下げ。焼土群検出（中期～後期）・近世土坑検出（O-5区）・カマド状遺構検出・縄文中期集石・土坑敷基検出（E・F-3・4区）。

<3月>

I-M-3～5区、N-U-5～7区Ⅲb～Ⅳ層掘り下げ。縄文中期集石敷基検出（E・F-3・4区・P-6区）・縄文時代前期末～中期初頭（深浦式土器



図版2 平成12年度の発掘作業員

期)の集石群・瓦器群多数検出。調査終了（29日）。平成15年度

(平成15年8月7日～平成16年3月19日・実働122日間)

<8月>

芝原遺跡から現場移動（7日）。A'・A-E-3～6区Ⅰ～Ⅲb層まで掘り下げ。集石検出（A'・5・6区）・石列検出（C-4区）。栗林文夫氏（黎明館）来跡（12日）。『新任教職員考古学講座』実施。発掘体験などを行う（20日）。下田平氏（伊集院土木）来跡（28日）。

<9月>

A'・A-H-3～6区Ⅰ～Ⅲb層まで掘り下げ。集石検出（A'・5・6区）・石列検出（C-4区）・畝状遺構検出（A-4区）。吉永文化財課長現地視察（8日）。新東課長・野邊盛雅氏（県立埋文センター・所内安全パトロール）来跡（16日）。下田平氏（伊集院土木）来跡（8日）。

<10月>

A-G-3～7区Ⅰ～Ⅲ層掘り下げ。大溝・掘立柱建物1（B-4区）・カマド状遺構（D-6区）・土坑検出。下田平氏（伊集院土木）来跡（8日）。加世田氏（笠沙町教育長）来跡（16日）。現地説明会開催。187名が見学（25日）。下田平氏（伊集院土木）来跡（24日）。



図版3 現地説明会の様子

<11月>

A-G-4～7区Ⅰ～Ⅲ層掘り下げ。土坑・古道・溝状遺構検出。

<12月>

A'・A'・A-G-3~7区Ⅱ~Ⅲ層掘り下げ。周溝状遺構・焼土群・五輪塔集積検出。下田平氏（伊集院土木）来跡（15日）。辻本崇夫氏（パリオ・サーヴェイ）来跡（17日）。

<1月>

B'・A'・A-G-3~7区Ⅱ~Ⅳ層掘り下げ。22日降雪。26日まで積雪。28日河瀬正利氏（広島大学教授）来跡。周溝状遺構（B・C-4・5区）・道路状遺構・カマド跡・焼土群検出。

<2月>

B'・A'・A-H-3~7区Ⅱ~Ⅳ層掘り下げ。3日成川式土器甕完形品（B-5区）出土。鍛冶遺構（C-6区）・カマド遺構（D-6区）・焼土検出・礎積遺構検出（A'-4・5区）・陽石（D-6区）。木原所長・池畑係長現地視察（20日）。

<3月>

B'・A'・A-I-3~7区Ⅱ~Ⅳ層掘り下げ。大溝・道路状遺構・焼土遺構・カマド遺構（C・D-6区）検出。高倉洋彰氏（西南学院大学教授）来跡（1・2日）。農業センター遺跡群より作業員18名が合流（1日）。木原所長・池畑係長現地視察（17日）。下田平氏（伊集院土木）来跡（18日）。19日調査終了。



図版4 平成15年度の発掘作業員



図版5 作業の様子

平成16年度

（平成16年5月14日～平成17年2月4日・実働118日）

<5月>

機材搬入。オリエンテーション実施（芝原・渡辺道跡と合同）・環境整備・掘り下げ開始（14日）。P～

U-7・8区表層～Ⅲa'層掘り下げ。B・C-6区Ⅱ～Ⅲa'層掘り下げ。焼土・溝状遺構・ピット群（掘立柱建物1軒）検出。鷲東重明文化財課長、神田忠男課長補佐、青崎隆蔵文化財係長、彌栄係長現地視察（14日）。實雅次長・東和幸氏（県立埋文センター・所内安全パトロール）来跡（18日）。池畑氏・岩屋高広氏（県立埋文センター）来跡（19日）。中村耕治氏・松下建生氏・日高正人氏・森雄二氏（県立埋文センター）来跡。

<6月>

O～U-7・8区Ⅲa'～V層掘り下げ。B・C-6区Ⅱ～Ⅲa'層掘り下げ。G・H・I-4～7区V層掘り下げ。トータルステーションによる遺物の取り上げ開始（17日）。V層検出集石内から炭化種子出土（V-8区）。V層面で集石検出（H・I-6・7区）。所長視察。新東課長、彌栄係長来跡（7日）。栗林氏（黎明館）来跡（9日）。森脇広氏（鹿大教授）・和田のみ子氏（親和技術コンサルタント）・長野主任（県立埋文センター）来跡（16日）。南日本新聞取材村（芝原遺跡出土の銅鏡及び足形土製品）。所長・新東課長、福永修一氏来跡（23日）。伊集院土木との現地協議（26日）。

<7月>

N～S-7・8区Ⅲa'～V層掘り下げ。G～I-4～7区V層掘り下げ。S～U-8・9区Ⅲa'～Ⅲa層掘り下げ。旧堤防の掘削開始（7日）。川畑眞一氏・本村幹夫氏（伊集院土木事務所）来跡（6日）。中近世ピット群検出。木棺墓（人骨を伴う）検出。溝状遺構検出。巨大集石（縄文時代中期）検出。八木淳一郎氏（県立埋文センター）来跡（15日）。岩永勇亮氏・白和隆一氏（鹿大4年生）・真邊彰・榊原えりこ（鹿大2年生）来跡（16日）。長野主任・岩戸孝夫氏（県立埋文センター）来跡（23日）。

<8月>

C'・B'・A'・A-F-5～9区表～Ⅱ層・R～U-8・9区Ⅲa'～Ⅵ層・P～U-7・8区V層・M～R-7・8区Ⅲa'～Ⅲb層掘り下げ。溝状遺構・ピット・土坑検出。竪穴住居（古墳時代）1号検出。住居内から初期須恵器（把手付鉢形）出土（23日）。修学館高校3年生視察作業体験（3～6日）。上東克彦氏・福永裕暎氏（加世田市教育委員会）来跡（6日）。栗林氏（黎明館）・久保智康氏（京都国立博物館）来跡（20日）。県立埋文センター整理作業員親子7名発掘体験（25日）。

<9月>

C～F-7～9区表～Ⅱ層・H～U-7～9区Ⅱ・Ⅲa'層掘り下げ。溝状遺構・大型溝状遺構・ピット・土坑・カマド状遺構検出。伊集院土木河川課（橋本課長・川畑係長・本村主査）との現地打ち合わせ（14日）。加藤武司氏（鹿大4年生）来跡（15日）。松田朝由氏（香川県さぬき市大川広域行政組合）来跡（16日）。元田順子氏（県立埋文センター）来跡（17日）。関慎太郎氏・三好栄太郎氏（鹿大4年生）来跡（21日）。福永氏・竹ノ内有里氏（県立埋文センター・所内安全パトロール）来跡（22日）。

<10月>

F-U-7~9区Ⅲa'~Ⅵ層掘り下げ。S-U-10・11区重機による試掘トレンチ掘り下げ。昭和9年頃の護岸石積を確認(4・5日)。C'・B'・A'・A~F-5~9区表~Ⅱ層掘り下げ。C'・B'・A'・6~9区は重機による試掘の結果、遺構・遺物が発見されなかったため、埋め戻しを開始(6日)。県庁文化財課にて河川課と協議(18日)。竪穴住居跡(古墳時代)2号・3号検出。溝状遺構・大型溝状遺構・ピット・土坑・カマド状遺構検出。本村氏(伊集院土木河川課)来跡(22日)。甲斐康大氏(県立埋文センター)・藤川真樹氏(鹿大4年)来跡(28日)。



図版6 現地説明会の様子

<11月>

F-P-7~9区Ⅲa'~Ⅴa層・P-R-8・9区Ⅴa・Ⅴb層掘り下げ。溝状遺構・大型溝状遺構・ピット・土坑・大型土坑・カマド状・集石遺構検出。現地説明会実施。172名が見学(13日)。橋本達也氏(鹿大博物館助教授)来跡(4日)。森脇氏(鹿大教授)来跡(5日)。宮下氏(金峰町教委)来跡(12日)。宗岡克英氏・日高勝博氏(県立埋文センター)来跡(26日)。



図版7 地層観察の為のボーリング作業

<12月>

J-P-7~9区Ⅲa'~Ⅴa層・P-R-8・9区Ⅴa・Ⅴb層掘り下げ。S-U-7~9区Ⅵ層掘り下げ。K・L-7区重機による掘り下げ。溝状遺構・大型溝状遺構・ピット・土坑・大型土坑・カマド状・



図版8 現地指導の様子

集石遺構検出。韓国全羅北道語学研修員(韓乗三氏)実務体験研修。文化財課青峰係来跡(1日)。森脇氏(鹿大教授)来跡。Ⅵ層以下のボーリング実施。-1.6mで裸層確認(2日)。中村氏(鹿大助教授)来跡(8日)。石田和哉氏(金峰町教委)・熊倉陽一氏(丹青社)来跡(21・22日)。

<1月>

I-O-7~9区Ⅳ~Ⅴa層・V・W-8・9区Ⅱ~Ⅲa'層掘り下げ。巨大集石(縄文時代中期)3基調査。本田氏(鹿大助教授)現地指導(18日)。栗林氏来跡(18日)来跡。中村氏(鹿大助教授)現地指導(19日)。橋本氏(鹿大博物館助教授)現地指導(21日)。立神課長補佐・永濱功治氏(県立埋文センター・所内安全パトロール)来跡(21日)。渡辺芳郎氏(鹿大教授)現地指導(27日)。森脇氏(鹿大教授)現地指導(28日)。

<2月>

V・W-8・9区Ⅱ~Ⅲa'層掘り下げ。巨大集石(縄文時代中期)3基調査。I-7区近世土坑調査。調査終了(4日)。航空写真撮影(22日)。彌榮係長・竹ノ内氏(県立埋文センター)現地視察(3日)。



図版9 平成16年度の発掘作業員

<3月>

竪穴住居内出土の初期須恵器(把手付鉢形須恵器)が、読売新聞鹿兒島県版朝刊に掲載される(3日)。

平成17年度

(平成17年5月9日~9月28日・実働88日)

<5月>

機材搬入。オリエンテーション実施・環境整備・掘り下げ開始（9日）。R~W-7~9区Ⅱ・Ⅲa'層・S~U-9・10区Ⅱ・Ⅲa'層掘り下げ。竪穴住居跡（古墳時代）5基（6号~10号）検出。竪穴住居4・5号調査。三日月状勾玉（古墳時代）出土（11日）。長野係長（県立埋文センター）現地視察（12日・20日）金峰中3年生2名（鶴西大作・有木靖裕）職場体験学習（25~27日）。宮下氏・石田氏（金峰町教委）来跡（26日）。湯之前高氏・長崎慎太郎氏（県立埋文センター・所内安全パトロール）来跡（26日）。

<6月>

R~W-7~9区Ⅲa'~Ⅳ層・S~U-9・10区Ⅱ・Ⅲa'層掘り下げ。竪穴住居跡（古墳時代）11号検出。竪穴住居跡4~10号調査。11号住居内埋土のフルイがけ開始（14日）。8号住居内から須恵器製器台（古墳時代）出土（1日）。11号住居内から滑石製管玉出土（8日）。航空写真撮影（24日）。中村氏（鹿大助教）来跡（3日）。所長視察。中村主任来跡（7日）。岩永氏（鹿大院1年）・真邊氏（鹿大3年）・福園美由紀（鹿大2年）来跡（10日）。松田氏（香川県さぬき市大川広域行政組合）来跡（17日）。

<7月>

R~W-7~9区Ⅲa'~Ⅳ層掘り下げ。竪穴住居跡4~11号調査。横手浩二郎氏（文化財課）来跡（5日）。池畑係長現地視察（19日）。西郷吉郎氏（坂元小教諭）来跡（26日）。



図版10 作業の様子

<8月>

R~X-7~9区Ⅲa'~Ⅳ層掘り下げ。竪穴住居跡6・9~11号調査。帛状耳飾（縄文時代前期末~中期相当）出土（26日）。西郷氏ほか10名（坂元小教諭）職員研修で見学・体験発掘（3日）。橋本氏（鹿大博物館助教）来跡（11日）。高倉氏（西南学院大学教授）・中村主任来跡（17日）。岩永氏（鹿大院1年）来跡（17日・23日・26日）。桑畑光博氏（宮崎県都市教育委員会）現地指導（23日）。堀内明博氏（古代学研究所）・加納敬二（財）京都市埋蔵文化財研究所）・電子正彦（財）京都市埋蔵文化財研究所）・間憲司（自治労京都府本部）来跡（24日）。長野係長現地視察（23日）。

<9月>

U~X-8・9区Ⅳ層・Y-8・9区Ⅲa'・Ⅳ層掘り下げ。台風14号による大雨で、調査区が水没（6日）。5日~9日まで調査不能。竹中正巳氏（鹿女短大助教）来跡（9日）。森脇広氏（鹿大教授）現地指導（16日）。新東次長・有川次長・平野主幹現地視察（14日）。長野係長現地調査（15日）。高岡和也氏・福永氏（県立埋文センター・安全パトロール）来跡（20日）。岩永氏（鹿大院1年）・後東宏延氏・本白水勇作氏（鹿大4年）来跡（26日）。調査終了（28日）。

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで多くの方々の御指導・御教示を頂いた。

石田和哉 泉拓良 岩永勇亮 池畑雅史 上東克彦
尾関清子 甲斐康大 加藤武司 河瀬正利 切通雅子
久保智康 栗林文夫 桑波田武志 倉元良文
児玉健一郎 阪口英敏 相美伊久雄 新里貴之
高倉洋彰 立神勇志 鶴田静彦 堂込秀人 徳田有希乃
永濱功治 永山修一 西田茂 西園勝彦 林潤也
東和幸 日高勝博 日高正人 福永修一 深澤芳樹
福永裕暎 藤尾慎一郎 前迫亮一 松田朝由 真邊彩
宮下貴浩 宮地聡一郎 森雄二 八木澤一郎 山中一郎
横手浩二郎 吉岡康弘 和田のみ子



図版11 人骨取り上げ指導の様子



図版12 平成17年度の発掘作業員

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

上本流遺跡は、万之瀬川中流の右岸、標高約6mの自然堤防上に立地する遺跡で、南さつま市金峰町花瀬字上本流に位置する。本遺跡の所在する金峰町は、薩摩半島西海岸のほぼ中央部に位置する。金峰町の地形は、大きく山地・シラス台地・沖積平野・砂丘に分けられる。山地は町の東半分を占め、標高200mを超える山系が南北に縦断する形で進んでおり、金峰山や中岳などがある。シラス台地は、錦江湾奥部の始良カルデラ噴出起源のシラスが堆積したものである。沖積平野は、万之瀬川の下流域に広がっており、当遺跡も含まれる。この万之瀬川は、錫山に源を発し、南西流して加世田万世に至る延長36km、流域面積372km²の二級河川である。途中、川辺町で麓川・水里川が、遺跡に隣接する場所で大谷川・加世田川が、金峰町で堀川が合流して蛇行しながら加世田万世で日本三大砂丘の1つである吹上砂丘のある東シナ海に注いでいる。沖積平野は、これらの河川が長年にわた

って運んできた土砂から形成されている。なお、この万之瀬川の河口は享和3年(1803)の洪水により変更されて現在の位置となっているが、以前は現在の万世中を抜け相星川河口にあったことが分かっている。また、昭和10年の国土地理院発行の地図では、村原において河川改修が行われ低地において蛇行する部分を直線づなっていることがわかる。これは、昭和の恐慌時に失業対策事業として実施された河川改修事業であったと、加世田在住の古老より話を伺った。

第2節 歴史的環境

南さつま市では、旧石器時代から歴史時代に至るまでの遺跡が数多く発見されている。これらの中には、学史上極めて重要な遺跡も含まれており、当地域が考古学研究の良好なフィールドであることを改めて示唆している。ここでは、旧石器時代から近世に至るまでを概観していきたい。



① 明治35年測量



② 昭和44年測量

第1図 遺跡周辺地形の変遷図



図版13 上空から見た上水流遺跡周辺

国土画像情報 国土交通省より

旧石器時代では、金峰町小中原遺跡・加世田祝原遺跡からナイフ形石器が、金峰町山野原遺跡・加世田平田尻遺跡から細石器が発見されている。特に平田尻遺跡では礫群も発見されている。

縄文時代草創期の遺跡としては、上水流遺跡の対岸に榑ノ原遺跡がある。ここでは、煙道付きが穴・集石等の遺構が発見され、隆帯文土器・磨製石斧などの遺物が出土している。ここから出土した丸ノミ状の磨製石斧は榑ノ原型とさえ称されるほど特徴的である。平成9年には国指定遺跡となっている。また、加世田内山田にある志風頭遺跡では、煙道付きが穴から完形の隆帯文土器が出土している。放射性年代測定の結果、11,860±50年BPと得られている。

早期の遺跡としては、草創期でも紹介した榑ノ原遺跡が著名である。昭和52年の発掘調査で出土した土器の中で6類として分類された資料は、この報告書刊行の後に前平式土器と古田式土器の型式設定をめぐる一連の論争へと発展していく。金峰町小中原遺跡では、前平式土器の円筒形・角筒形がまとめて出土している。特に、角筒形に関しては上角下円筒形であり角筒形の発生から展開を考える上で重要な資料となっている。

前期の遺跡としては、金峰町阿多貝塚や上焼田遺跡がある。阿多貝塚から出土した資料の一部は、「阿多V型」と称される。前期研究に欠かすことのできない遺跡である。上焼田遺跡では、塊状耳飾が出土している。周辺からは、溝式土器が出土しているが、報告書では、溝式土

器ではなく管燵式土器ないしは春日式土器に伴うとまとめている。

中期の遺跡としては、芝原遺跡で春日式土器に伴うとされる竪穴住居跡が検出されている。石室遺跡や上焼田遺跡では並木式土器・阿高式土器が出土している。

後期の遺跡としては、金峰町芝原遺跡がある。この遺跡からは、後期前半の指筒式土器や南福寺式土器が大量に出土している。銀歯状尖頭器や石籠などの特徴的な石器も多数出土しており、該期の拠点的な集落が周辺に存在していたのであろう。また、足形を呈する土製品は、本県でも例がなく、加えて隣接する渡畑遺跡出土資料と接合関係にあることが判明している。

晩期の遺跡としては、上加世田式土器の標識遺跡であ上加世田遺跡では、大型土器などの遺物が検出されている。土器や石器の他に、土偶や軽石製岩筒・石棒などの祭祀をうかがわせる資料や勾玉・管玉・小玉などの垂飾品など様々な遺物が出土している。なお、この上加世田式土器は、近年の広域編年研究により縄文時代後期に位置づけられることも多くなっている。下原遺跡では、縄文晩期終末～弥生早期の刻日夾文土器に伴って朝鮮半島系無文土器・初痕土器・石塚などが出土している。

弥生時代から古墳時代にかけては、数多くの遺跡で遺物の散布が見られる。発掘調査された遺跡も県内では比較的多い。高橋貝塚は、弥生時代前期を主体とする貝塚で、万之瀬川の支流堀川の右岸、標高11mの洪積世砂丘上にある。昭和37・38年に河口貞徳氏によって発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代晩期の夜白土器と高橋Ⅰ式土器が共存したことや、南海産の貝を素材とした貝輪や南海産貝が出土したことなど、学史上に残る遺跡となった。2006年3月には、鹿児島国際大学により隣接する高橋遺跡が発掘調査され、弥生時代のものと考えられる遺構が確認されている。下小路遺跡は、弥生時代中後期の須玖式土器を用いた甕棺が検出された埋葬遺跡で、棺内の人骨にはゴホウラ製の貝輪が装着されていた。松木園遺跡では弥生時代中後期の環濠の可能性のある大溝が松木園式土器に伴って発見されている。中津野遺跡からは、床面が3段構造になる竪穴住居跡が発見され、最下段である3段目からは完形品が40個出土しているという。また、ここは中津野式土器の標識遺跡でもある。この中津野式土器に関しては、弥生時代終末とする考えの他に、一部は古墳時代に入るものがあるとして、明確には位置付けがなされていない。現状としては、弥生時代終末から古墳時代初期の土器として認識されている。

古墳時代の遺跡としては加世田小湊にある奥山古墳(六堂会古墳)が特筆される。この遺跡は、昭和6年に発見され、石棺の内部には赤色顔料が塗られていた。この内部から、ガラス玉や長さ180cmの鉄剣、刀子が副葬されていた。平成17年3月には、鹿児島大学博物館助教授の橋本達也氏が再調査を行っている。その結果、周溝の一部と考えられる遺構が発見され、17年8月からの調査で4世紀代の古墳である可能性が高いことが示された。白糸原遺跡では、竪穴住居跡19基が検出されている。遺構内遺物から、辻原式土器から笹貫式土器にかけての遺物であるとされる。

古代にも多くの注目される遺跡が発見されている。特にこの地域の遺跡では、古代の集落が発見される場合が多く、広域的なあり方について検討する場合について重要な資料となるであろうことは間違いないと考えられ

る。中岳山麓古室跡群は別名「荒平窯」とも呼ばれるもので、9世紀から10世紀にかけて使用されたとみられる須恵器窯である。発掘調査が行われておらず表面採集による調査しか行われていないが、荒尾窯(熊本県荒尾市)の製品との類似性が高いため、人的・物的な交流があったと考えられている。だが、その全体像は明らかではなく、詳細な調査等を行う必要がある。小中原遺跡からは、多くの掘立柱建物と「阿多」という字がへら書きされた土器などが発見されている。これらのことから阿多郡面の可能性が考えられている。山野原遺跡でも多くの掘立柱建物と土師器・須恵器などが発見されている。祭祀に関わると思われる遺構や、土師器焼成遺構の可能性が考えられるものなども発見されており、豪族にかかわる施設であった可能性が考えられている。

加治屋遺跡では、土師甕を用いた埋設遺構と竪穴住居跡とされる遺構が確認されている。

中世には、金峰町が属する阿多郡は阿多氏・飯高氏などによって、加世田が属する加世田別荘は別府氏・堀田氏などによって統治され、城館・山城もいくつか知られている。これらのいくつかは発掘調査が行われ、主に上ノ城跡・別府城跡・牟礼ヶ城跡・貝笠崎城跡などが知られる。発掘調査は行われていないが、加世田益山の寺園民宅には、二重の堀があったと伝えられ、現在もその痕跡が残るとい(上東2004)。中世のものであるか明らかでないが、館であった可能性も考えられる。白糸原遺跡では、中世末から近世にかけての土坑墓が24基検出されている。の中には、南海産の夜白貝が入っているものも検出されている。加えて、竪穴建物跡や双魚文青磁なども出土している。

また、万之瀬川流域の遺跡群も近年特に注目されており、万之瀬川河床遺跡(加世田村・金峰町宮窪)・特峠松遺跡・芝原遺跡・渡畑遺跡(金峰町宮窪)などとともに中流の古市遺跡・南田代遺跡(田辺町)などがあり、中世を中心とした縄文時代から近世、近代にわたる複合遺跡として今後の成果が期待される。

近世においては調査事例が少なく、明らかでない部分が多い。その中では、いわゆる外城制度(天明4年[1784]に郷に改められる)に関連するものが特に挙げられる。列挙すると、地頭仮屋(旧加世田市は麓、旧金峰町は阿多と田布施の2か所)・庄屋役所・浦役所・別当役所・会所・宿場・御蔵・常平倉・津口御番所・遠見御番所・射場・御牧などがあった。

また、野町と呼ばれる商人の居住区も存在した。加世田では、川畑に現在所在する聖徳寺付近に、金峰町内では、阿多郷野町と田布施郷池辺野町の2つの野町(商人の居住区)があった。

交通に目を向けると、現在万之瀬橋の架けられている渡所(金峰町側は渡畑遺跡・芝原遺跡である)は、村原遺跡と呼ばれる場跡であり、昭和56年以前は船で渡っていた。

これらの他にも近世遺跡があるが、以上のものも含め、個々については詳細な調査事例(特に発掘調査)は少なく様相は明らかでない。ただし、本遺跡の調査で発見された塚形の遺構・遺物はこれらに関連する可能性があるのでは注意が必要であろう。



第2図 周辺遺跡位置図 (1/25,000)

表1 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	時代					備考
			旧石器	縄文	古墳	中世	近世	
1	上川原遺跡	南さつま市	金峰町油崎上川原		●			
2	古畑跡	南さつま市	金峰町油崎西				●	
3	上比久遺跡	南さつま市	金峰町					
4	小中塚遺跡	南さつま市	金峰町南小中塚	●	●	●	●	遺・町発掘
5	2号塚遺跡	南さつま市	金峰町黒山				●	
6	友田遺跡	南さつま市	金峰町黒山			●		
7	鶴山遺跡	南さつま市	金峰町鶴山			●		
8	白糸原遺跡	南さつま市	金峰町油崎		●	●	●	普及版
9	赤園遺跡	南さつま市	金峰町油崎		●			普及版
10	高多城跡	南さつま市	金峰町高多				●	
11	鶴之城跡	南さつま市	金峰町北瀬				●	
12	大沼田遺跡	南さつま市	金峰町花瀬				●	
13	今城跡	南さつま市	金峰町花瀬新屋		●	●	●	
14	花瀬遺跡	南さつま市	金峰町花瀬					●
15	中倉山麓古宮跡群	南さつま市	金峰町花瀬				●	
16	宇治野遺跡	南さつま市	金峰町三田西	●	●	●	●	金峰町発掘
17	赤園遺跡	南さつま市	金峰町油崎		●	●	●	普及版
17	2号塚遺跡	南さつま市	金峰町黒山		●	●	●	普及版
17	持林松遺跡	南さつま市	金峰町油崎		●	●	●	遺・町発掘
18	上水流D遺跡	南さつま市	金峰町花瀬				●	金峰町発掘
19	上水流遺跡	南さつま市	金峰町上水流・轟山	●	●	●	●	本郷古宮
20	上水流C遺跡	南さつま市	金峰町花瀬				●	金峰町発掘
21	新屋山遺跡	南さつま市	金峰町花瀬				●	金峰町発掘
22	鶴山遺跡	南さつま市	金峰町北瀬				●	金峰町発掘
23	知世遺跡	南さつま市	金峰町北瀬				●	金峰町発掘
24	知世原遺跡	南さつま市	知世原町知世原・知世原				●	普及版
25	新ノ原遺跡	南さつま市	知世原町新ノ原	●	●	●	●	知世原市発掘
26	掛ノ上遺跡	南さつま市	知世原町掛ノ上	●	●	●	●	知世原市発掘
27	内ノ田遺跡	南さつま市	知世原町内ノ田		●		●	
28	神橋	南さつま市	知世原町神橋				●	
29	小ヶ島遺跡	南さつま市	知世原町小ヶ島・知世原				●	知世原市発掘
30	本郷原遺跡	南さつま市	知世原町本郷原				●	
31	松ヶ島遺跡	南さつま市	知世原町松ヶ島				●	普及版
32	日本寺跡	南さつま市	知世原町日本寺				●	
33	上加世田遺跡	南さつま市	知世原町上加世田	●	●	●	●	知世原市発掘
34	本田遺跡	南さつま市	知世原町本田				●	
35	三田遺跡	南さつま市	知世原町三田				●	知世原市発掘
36	知世遺跡	南さつま市	知世原町知世原				●	
37	遠見ノ岡遺跡	南さつま市	知世原町遠見ノ岡		●	●		
38	竜崎城跡	南さつま市	知世原町竜崎上				●	
39	みかきの遺跡	南さつま市	知世原町見崎野				●	
40	窪田遺跡	南さつま市	知世原町窪田	●	●	●	●	知世原市発掘
41	鶴山遺跡	南さつま市	知世原町鶴山				●	
42	三田遺跡	南さつま市	知世原町三田				●	知世原市発掘
43	上比久遺跡	南さつま市	知世原町上比久				●	
44	窪田ノ岩倉遺跡	南さつま市	知世原町窪田ノ岩倉				●	
45	上松野遺跡	川辺郡	川辺町 11 田上松野				●	
46	水ヶ元遺跡	川辺郡	川辺町 11 田水ヶ元				●	
47	津ノ江遺跡	川辺郡	川辺町 11 田津ノ江				●	
48	西之平遺跡	川辺郡	川辺町 11 田西之平				●	
49	熊倉遺跡	川辺郡	川辺町 11 田熊倉				●	
50	西原倉遺跡	川辺郡	川辺町 11 田西原倉				●	

参考文献

- 田畑智子 2002 「鹿児島県万之瀬川流域の地形発達」
「大分地理」15, 9-14 大分大学教育福祉科学部地理学教室
- 上東克彦 2004 「鹿児島県薩摩半島に伝世された華南三彩—クンディと果実彩水注—」『貿易陶磁研究』24号 日本貿易陶磁学会
- 加世田市教委 1985 「上加世田遺跡1」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(3)
- 1987 「上加世田遺跡2」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(4)
- 1995 「干河原遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(12)
- 1999 「志風頭遺跡・奥名野遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(16)

- 金峰町教委 1998 「上水流遺跡—第1次調査—」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(9)
- 1998 「持林松遺跡 第1次調査」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(10)
- 2000 「小園遺跡」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(11)
- 鹿児島県教委 1991 「小中原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (57)
- 河口貞徳 1988 「日本の古代遺跡38鹿児島」保育社
- 加世田市史編さん委員会 1986 「加世田市史」
- 金峰町郷土史編さん委員会 1987 「金峰町埋蔵文化史(上)」
- 1989 「金峰町郷土史(下)」

第3章 調査の概要

第1節 発掘調査の方法

平成7年8月1日から12月15日、平成11年2月12日から3月8日、平成11年12月14日から平成12年1月20日にかけて行われた金峰町（現南さつま市金峰町）の確認調査を受けて、平成12・15～17年度に本調査を行った。

調査区は対象区域に10mグリッドを設定して実施した。南北方向にB'、A'、A、B、・・・としてZまでを付け、東西方向に1、2、3、・・・～10までを付け、B-6区などと呼称することとした。まず万之瀬川の新築堤防部分の調査を平成12年度に行い、15年度に旧堤防と新築堤防の間の部分、16・17年度に主に旧堤防部分を行った。発掘調査は、重機で1層を除去した後、遺物包含層であるⅡ層からⅥ層までを人力で掘り下げた。また、場所によりⅡ層以下に無遺物層が認められる場合も重機で除去した。また、最終的には重機で下層確認のためのトレンチを設定して掘り下げた。

これらの調査の結果、Ⅱ層からⅥ層に至るまで、縄文時代前期から中近世にかけて多量の遺構・遺物が発見されている。なお、層位は確認調査時とは異なっており、対応については各章中で述べている。

遺物は当初平板により実測を行うとともに、レベルを測定して遺物台帳に記載して取り上げたが16年度途中からは、トータルステーションを使って行った。遺構は検出状況を写真で撮影し、位置を記録してから個別に実測を行った。必要に応じて実測途中と実測後の状況も写真撮影した。その際に、図化作業に関して業者委託を実施している。

作業面は、標高4mから-1mという低地であったため、作業面が下がるにつれて次第に湧水が多く見られるようになった。また台風や降雨で調査区が冠水した後も、水位がなかなか下がらなかつたり、調査区の壁面が崩落して調査機材にまで損傷が及んだ。このため、降水量や台風が多い季節はたびたび調査の進行が妨げられた。大型排水ポンプを一日中稼働させても、翌朝には調査区が再び池のようになっているという状況もあった。当時は県内で海面下のレベルまで掘り下げる遺跡の調査が少なかったこともあり、効果的な水対策や安全確保に関して担当者は、伊集院土木事務所や重機のオペレーターと何回も検討を重ねながら調査を行った。

第2節 層位

上水流遺跡は万之瀬川の中流の川岸近くの自然堤防に立地する遺跡である。本遺跡で見られる地層は、河川堆積物及びそれらの上に堆積する腐植土である。砂質の土壌については、「砂質土」と「砂」に分類した。河川による氾濫堆積層などを含んでいるので、遺跡内において必ずしも安定している状況ではなかった。例えば、Va層では同一包含層の中で黄褐色砂質土層と灰白色砂層とが何層にもわたって互い違いに堆積している様子が観察される地点も見られた。また、他の堆積土（砂）につい

ても、ほとんどが数回にわたるとみられる沖積土（砂）であるので、下に示す層位と若干異なる様相を呈する地点もある。火山灰に関しては、Ⅲも層中に間断岳起源とされる「灰ゴラ」（須崎町水成川での¹⁴C年代分析結果では3620±140年BP）が見られる他には、明確な火山灰層は見られない。なお、この灰ゴラに関しては晩新石器時代の編年に関わる重要な鍵層となる。しかし、安定的には堆積しておらず、土器型式を上下で区分するだけの様相ではなかった。いずれにせよ、灰ゴラが万之瀬川下流域まで降灰していたことが判明した点は今後の調査を考えると重要な事項となる。

- I 層 水田耕作土及び近世・近代の盛土
(旧堤防の造成盛土も含む)
- II 層 暗褐色腐植土 中世～近世
- IIIa 層 明黄褐色土 弥生時代～古墳時代
- IIIa 層 黄褐色土 縄文時代晩期
- IIIb 層 暗茶褐色土 縄文時代晩期
(ブロック状の灰ゴラを含む)
- IV 層 赤(黄)褐色土 縄文時代中期後半～後期
- Va 層 黄褐色砂質土 縄文時代前期前半
(灰～灰白色砂との互層となる地点多し)
- Vb 層 黄白色砂質土 縄文時代前期後半～
縄文時代中期初頭
- VI 層 淡白色砂質土 縄文時代前期

第3節 整理作業の概要

上水流遺跡の発掘調査報告書作成に伴う整理作業については、平成12年度から平成17年度にかけての発掘調査中に、遺物の水洗・注記作業を並行して行い、本格的な整理作業を平成17年度より実施した。作業は、県立埋文センターで、他の万之瀬川流域の遺跡群と同時進行の形で行った。刊行については、縄文時代前期から中期前半、縄文時代中期後半から弥生時代後期、弥生時代終末から近世の3分冊で計画をし、平成18年度には縄文時代中期後半から弥生時代後期編を刊行することとした。

第4節 遺物の分類について

(1) 土器

土器は、縄文時代前期から幅広い時代のものが出土している。報告書作成では、これらを複数年計画で刊行することとしたため、本来は全体を通して類別作業を行うべきところが分断される形となってしまっている。そこで、便宜上類別の上に「群」を設定した。1群は、縄文時代前期から中期前半までの土器、2群は、縄文時代中期後半から後期終末までの土器、3群は、縄文時代晩期から弥生時代後期までの土器、4群は、弥生時代終末から古墳時代までの土器とした。よって、今回報告する分は2群と3群ということになる。各群内の土器の特徴に関しては、各々の章で紹介していきたい。

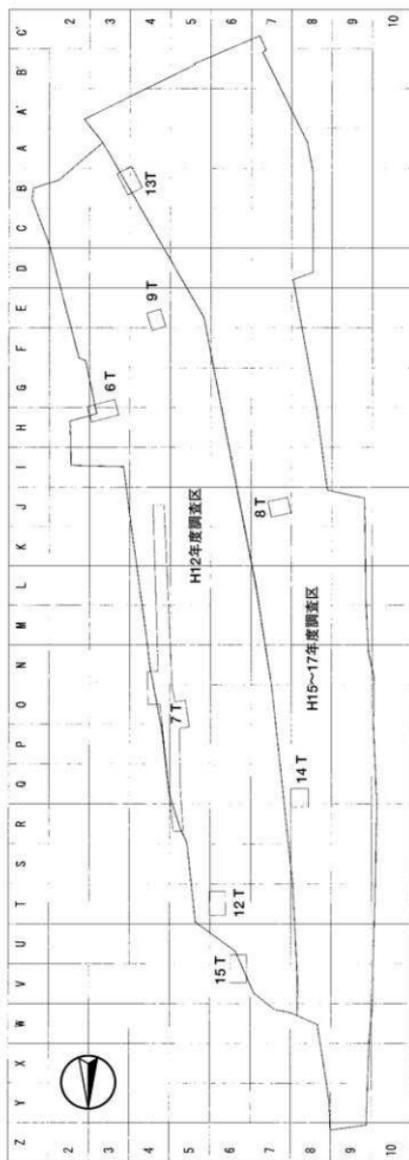


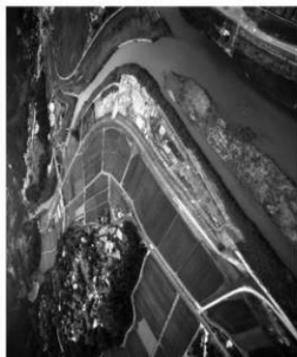
図3 調査対象範囲



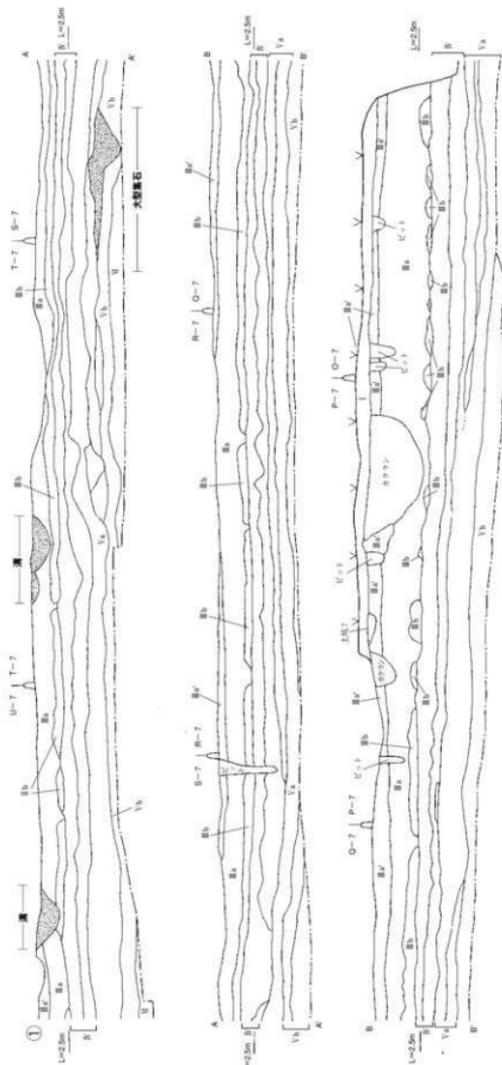
図版14 遊歩流量 (格ノ原遊歩路より)



図版15 万之瀬川上流より見た上水流遊歩



図版16 万之瀬川下流より見た上水流遊歩



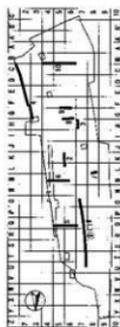
第4图 西侧土層断面图 (1)

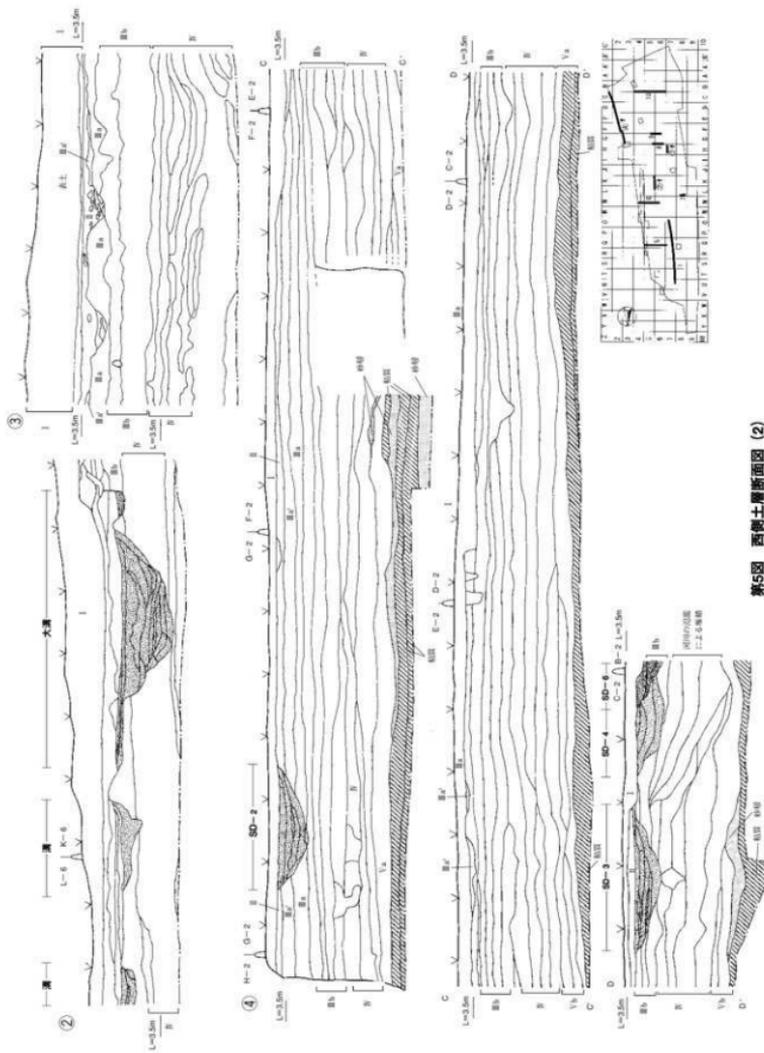


图版17 土層断面写真 (F-3·4区域)

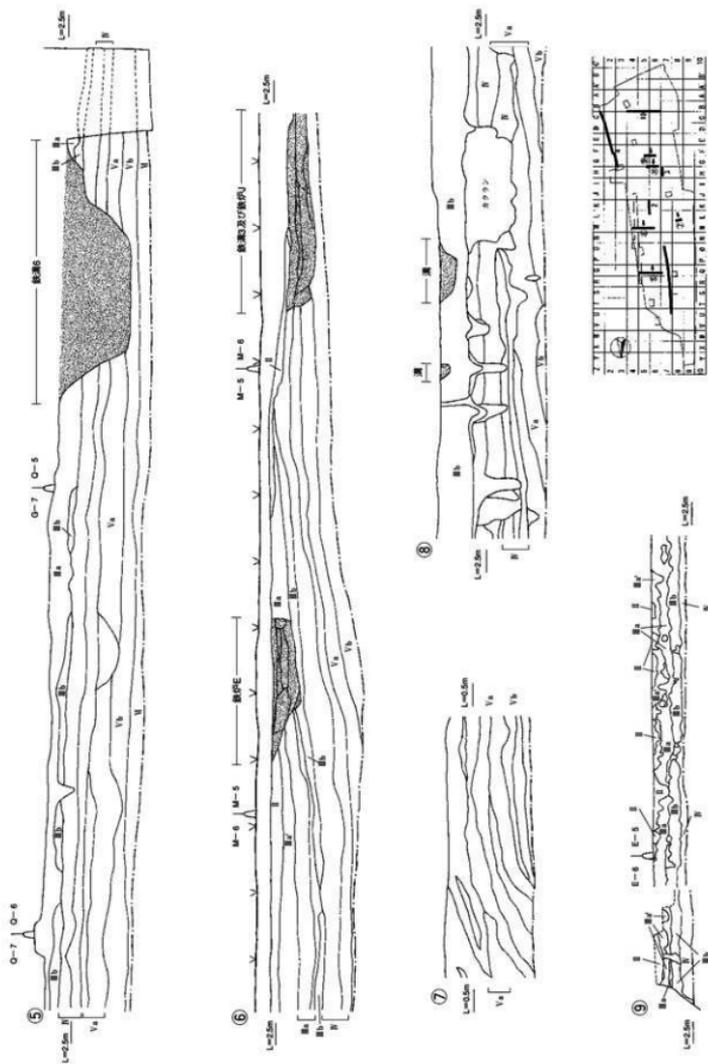


图版18 土層断面写真 (V·W-7区域)

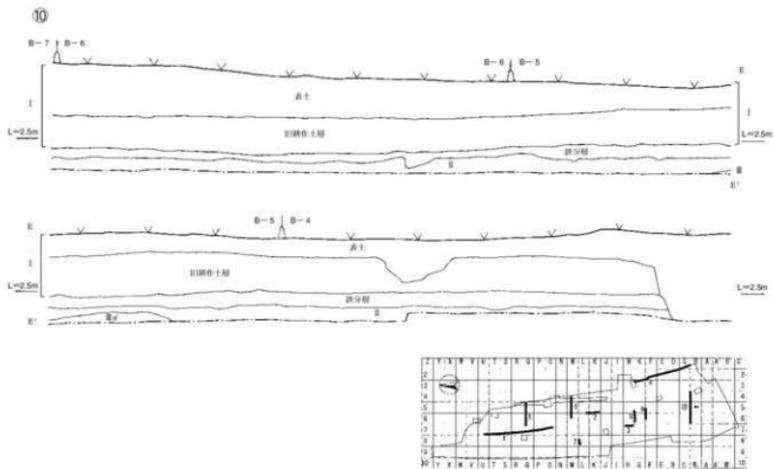




第5图 西麓土層断面图 (2)



第6图 北带土層断面图 (1)



第7図 北側土層断面図 (2)



図版19 土層断面写真 (K・L-8区)

(2) 石器

本遺跡では、縄文時代中期後半相当期に比定されるⅣ層～縄文時代晩期該当層のⅢb・Ⅲa・Ⅲa'層の包含層において、土器同様石器類が多数出土した。なお、Ⅲa・Ⅲa'層出土遺物中、磨製石器類等弥生時代に比定される遺物については、縄文時代晩期出土遺物項目から外したことを付記しておきたい。

各包含層における石器の出土点数は、Ⅳ層が1,359点、Ⅲb・Ⅲa・Ⅲa'層が5182点にぼる。主な器種は、石鏃、石鏃未製品、石匙、スクレイパー、二次加工剥片、剥片、横刃形石器、機形石器、石錐、石核、擦切状石器、磨製石斧、打製石斧、礫器類、磨石・蔽石類、石皿類、砥石、軽石製品、石錐、石製品・玉類などで、器種的にも多岐にわたっている。

石器について分析していくにあたり、石材及び器種において分類を試み、その表を以下に示した。石器に関する

分析等は、以下の表を参照し述べていくこととする。

石材分類表

石材に関しては、石材産地を推定させる黒曜石及び安山岩、石材中に圧倒的な量を示し質感や風化の程度等個体差が顕著な頁岩については、石材の細分化を試み、以下のように分類した。他に、頁岩や砂岩等にホルンフェルス化した石材も散見されたが、変性が顕著であるものについてはホルンフェルスに含めた。頁岩については、珪質化が顕著な石材は、頁岩中に含めている。

石器分類表

石器は、同一器種内で属性による相違が明瞭で、一定量以上出土するものについて、グループ化し、以下のように分類した。使用による折損や、欠損等により他器種への転用が見られる場合は、最終用途をその石器の器種と捉えて分類した。

表2 石材分類表

器種	分類	概 要
黒曜石 (一色)	I	不純物を多く含む。遺跡で光を通さないものを分類した。龍野川内が黒曜阿土山、いちきぎ野山平本湖、いちきぎ野山平本湖等の原始地質資料に類する。
	II	光を通し、不純物を大量に含む物を分類した。龍見岳山の三郎、入杉の目屋、五友米、龍江町の長谷等の原始地質資料に類するが、細分を行うことはできなかった。
	III	黒色一色色を呈出し、不純物をほとんど含まない高質のものを分類した。スビの赤の寺ノ木津宮、入杉の赤の寺ノ木津宮、入杉の赤の寺ノ木津宮等の原始地質資料や自然産が取りオラス状を呈する霞島流の資料に類するが黒曜石と区別することはできなかった。
	IV	黒色で不純物を全く含まない高質のものを分類した。佐賀野原が原始地質資料に類するが、一部長崎県佐賀県佐賀郡佐賀町で産出する黒色色物も含まれる。
	V	黒色色で不純物の少ない物を分類した。鉾田町や長崎県佐賀県佐賀市、定楽等西九州の原始地質資料に類するが、原始地質資料の一部分も含まれる。
	VI	不純物をあまり含まない灰色の物を分類した。龍野川周辺の物を原始地質資料とするが原始地質資料の一部分も含まれている。
Ⅶ	原始地帯不明な物を分類した。	
安山岩	Ia	黒色を呈し、砂質感が強い。鉾石が殆ど含まれない。西九州産であると考えられる。
	Ib	Iaが風化したもの。
	II	西九州産か？鉾石がほとんど含まれず、結實の光沢がある。
	III	上平産物と考えられる。鉾石が混じり込まれる。黒色もしくは青灰色を呈し、光沢感が強い。風化していない。もしくは、強風化が認められる。
	IV	IIIに類似するが、風化が強い。
Ⅴ	上記以外の一般的な安山岩。龍野川との区別においては、磨損率を基準とし20×10 ⁻³ 以上を本型に含めた。	
流紋岩		六山6号や六山8号などが確認し、確認したもの。龍野川産の物を含む疑わしい物を含む。
花崗岩		鉾石とも呼称。石高・ホリ長石・黒母・内四石・輝石などを主成分鉱物として含む。安山岩との区別には、磨損率において20×10 ⁻³ を境線の石材を本型に含めた。
蛇紋岩		蛇紋岩はゆめつとした質勝りを有し、光沢がある。石材不明資料中、蛇紋岩に類似した資料を含めた。
頁岩	I	風化が顕著で、頁岩もしくは頁岩化を呈する。
	II	風化が認められる。結実や断面が認められるものが多い。
	III	IIIに類似するが、風化が強い。もしくは強い。
	IV	風化が少なくない。光沢があり、珪質化を呈する。
	V	風化が少なくない。光沢があり、黒色や青灰色、白鉄、頁岩、頁岩などを呈する。結實の頁岩。
	VI	結実が強い。珪質化を呈し、珪質が強い。(シルト質)の頁岩。
Ⅶ	まがけ付岩。黒色を呈し、珪質が強い。	
Ⅷ	結実が強い。珪質化を呈し、珪質が強い。	
砂岩		砂粒・石屑粒が集合して固まった層構造の一種。磨ると結実が強いものを本型に含めた。
粘板岩		黒曜石・砂岩(流紋)が集合して固まった層構造の一種。頁岩に類似するが、珪質化一色色を呈し、磨ると断面が粗く見えるものを本型に含めた。
ホルンフェルス		珪質化が著しく、鉱物が凝縮なって硬質もしくは珪質を成すもの。ただし、珪質化(もしくは、珪質化)した頁岩も本型に含めず、頁岩に分類した。
珪質化の 頁岩		めうら・玉蘭・石高・タンバク石・鉄石高・水島・石高砂岩などを総称して、本型に含めた。
オース ト		頁岩を含む光沢物を有する。頁岩化を呈する。

表3 石器分類表(1)

	器種	分類	概 要
剥片石器	石鏃		剥片を素材として両側縁部に両面から押圧剥離を施してある小型から中型の三角形の石器群を石鏃とした。
		I	全体の形状が正三角形を呈するもの。
		II	全体の形状が二等辺三角形を呈するもの。
		III	先端が尖り側縁が緩やかに曲線を描くもの。 全体の形状が五角形を呈するもの。
		IV	挟りの状況により I：浅い、II：深い、III：平坦
			肩部の位置により A：上位、B：中位、C：下位 肩部から基部への広がり具合により a：広がる、b：同じ幅、c：狭まる
	V	剥離が大きく厚みのあるもの。	
	VI	未製品や欠損品。	
	石匙		剥片を素材とし刃部及びつまみ部を作成し、つまみ部に着縁して携帯する石器群を石匙とした。
		I	縦型で、両側縁・両面に調整を施すもの。
スクレイパー	IIa	横型で両面に調整を施すもの。刃部とつまみ部が左右対称である。	
		IIb	横型で両面に調整を施すもの。刃部とつまみ部が、左右非対象である。
	I	玉髄系石材を使用した資料中、剥片の縁部などに二次調整を行い、刃部整形を施してあるものをスクレイパーとした。頁岩製でも小素材を利用して刃部調整が丁寧なものは、本類に含めた。	
	II	素材剥片の両側縁部を中心に刃部調整が施され、柳葉状の器形を呈する。	
	III	素材剥片の下縁部を中心に刃部調整が施され、横長長楕円状の器形を呈する。	
	IV	素材剥片の一端に刃部調整が施され、器形は三角形を呈する。刃部整形は直線的である。	
二次加工剥片	V	長方形の素材剥片の接しのない2側縁部に刃部調整が施される。	
	VI	上記以外のスクレイパーである。	
横刃形石器		玉髄系石材を使用した資料中、剥片の縁部などに二次調整を行い、刃部整形が認められないものを二次加工剥片とし、刃部整形が認められるもので一定の大きさを有する頁岩製資料は硬器類に含めた。なお、後・晩期相当層出土中、頁岩製で横長剥片を素材とする刃部整形剥片を横刃形石器として分類した。	
石核		原石から石器製品作出のための剥片を採種した残存石材を本類に分類した。なお、剥離痕に顕著な使用痕等確認できる資料については、硬器類に含めた。	
	Ia	小礫を素材とする。分割により平坦な打面を形成した後、同一打面から表裏2面を剥いだもの。	
		Ib	周辺から中心に向かって剥ぐもの。
	Ic	前の作業面を打面とする打面転移が見られる。	
		IIa	小礫を素材とする。分割により平坦な打面を形成した後、同一打面から1面のみを剥いだもの。
	IIb	周辺から中心に向かって剥ぐもの。	
		IIc	前の作業面を打面とする打面転移が見られる。
	IIIa	礫を素材とする。分割により平坦な打面を形成した後、同一打面から表裏2面を剥いだもの。	
		IIIb	周辺から中心に向かって剥ぐもの。
	IIIc	前の作業面を打面とする打面転移が見られる。	
		IVa	礫を素材とする。分割により平坦な打面を形成した後、同一打面から1面のみを剥いだもの。
	IVb	周辺から中心に向かって剥ぐもの。	
		IVc	前の作業面を打面とする打面転移が見られる。
	剥片石器	石鏃	I
IIa			錐部のみで構成され、つまみ部を有しない。確皮面等の平坦面が、基部端部に残される。
III			基部端部も丁寧に整形され、平坦な面を有しない。
IV			大きなつまみ部に対し、小振りな先端部を作成整形し、錐部とする。
楔形石器		大きな欠損を有し、つまみ部の有無等確認ができない。	
		つまみ部を有するIa及びIbは、つまみ部が指でつまめる大きさを有しており、直接手に持って使用した可能性が高いと考えられる。	
棒切状石器		ビス・エスキューユとも称される。表面は方形で、上縁端部及び下縁端部は直線的で平行に位置する。刃部断面が凸レンズ状に鋭角をなし、基部には鋭打面を有する。本石器を木の葉や骨などにて、鋭石等で鋭いて割るために使用したと想定される。	
		砥石と同様、砂岩質の礫素材を使用する。刃縁部の片面側もしくは両面側に削痕を有する。礫製石片等の素材を抽出するために、礫素材を棒切り、分割するための道具と考えられる。	

表4 石器分類表(2)

器種	分類	概要
硬石器	磨製石斧	I 器厚が厚く、重量感がある。刃部が鉤の形態を有するのが多い。鉤刀型石斧が多い。
		II より小型で、器厚が薄手。長方形状を呈する。定格式石斧が多い。
		III 細長で刃部が片刃である。壺形石器と呼称されるタイプである。
	打製石斧	I 明確な袢りを持たず、短冊形(長方形)の器形を呈する。器厚は比較的厚い。短冊形石斧と呼称。
		II 明確な袢りを持たず、短冊形(長方形)の器形を呈する。I類に類似するが、器厚が極薄く、より細に近似する。扁平石斧と呼称。
		III 基部と刃部を境界作る袢り部を持ち、ラケット状を呈する。有肩石斧と呼称。
		IV 他機種からの転用品。
		V 分類不可資料及び未製品
	礫器類	I 素材剥片の両側縁部を中心的に刃部調整が施され、柳葉状の器形を呈する。
		II 素材剥片の下縁部を中心的に刃部調整が施され、横長長楕円(長方形)状の器形を呈する。
		III 素材剥片の一边に刃部調整が施され、器形は三角形状を呈する。刃部整形は直線的である。
		IV 長方形状の素材剥片の接しない2側縁部に刃部調整が施される。
		V 上面縁が円形を呈しており、周縁部に調整を施し、基部及び刃部を作出する。ラウンドスクレイパーとも呼称される。
		VI 上記以外の礫器類である。
	磨石・敲石類	Ia 比較的小礫を素材とする。全面的もしくは部分的に磨面のみを有し、敲打痕は不明瞭である。
Ib 全面的もしくは部分的に磨面を有し、平坦面や側縁に明確な敲打痕が見られる。		
IIa 大きめの礫を素材とする。全面的もしくは部分的に磨面のみを有し、敲打痕は不明瞭である。		
IIb 全面的もしくは部分的に磨面を有し、平坦面や側縁に明確な敲打痕が見られる。		
III 上記I及びII類以外の資料である。上面縁が長楕円形状もしくは不定形状を呈し、用途が敲石と考えられる資料群である。		
石皿類	石皿は大礫を利用し、磨面・凹面を有する。磨石とセット関係にあり、木の実を磨り潰したりするためと考えられる。	
	台石も大礫を利用し、敲打痕を有する。敲石とセット関係にあり、石器製作時に石材を据え付けるためと考えられる。	
砥石	砂岩質の礫素材を利用し、主として長軸方向に削痕が縦走り、深い凹面を有することが多い。	
軽石製品	軽石を素材とする。穿孔や凹み等加工痕が残される。	
石錘	Ia 左右1対の袢り部を有する。袢り部以外の側面に敲打痕等は確認できない。	
	Ib 上下側面に敲打痕を有する。磨石を二次利用した可能性がある。	
	II 左右及び上下2対の袢り部を有する。	
玉類	管玉	細長い竹管状を呈する。穿孔部に紐類を通して用いた装飾品と思われる。
	勾玉	半月・半楕円形・コ字形状などをなし、着紐のための一孔が施される。
硬石器	磨製扁平石斧	扁平片刃で側面断面縁が(隅丸)方形を呈する。大乗系とみなされ、工具の機能を有したと想定される。
	磨製穿孔具	砥石と同様な砂岩質の素材を利用する。基部と円柱状の穿孔部からなる。穿孔部には回転糸痕等が残される。石包丁の穿孔用としての機能が想定される。



ob I

ob II



ob III

ob IV



ob V

ob VI



安山岩 I a



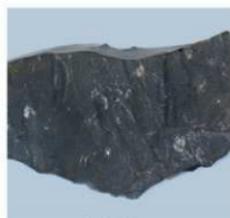
安山岩 I b



安山岩 II



安山岩 III a



安山岩 III b

图版20 石材分類写真(1)



頁岩 I



頁岩 II



頁岩 III



頁岩 IV



頁岩 V



頁岩 VI



頁岩 VII



頁岩 VIII

圖版21 石材分類写真 (2)

第4章 縄文時代中期後半から後期（Ⅳ層）の調査

第1節 概要

縄文時代中期後半から後期の調査は、Ⅳ層がこれに該当する。このⅣ層は、確認調査14TM・Ⅳ層に対応し、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけてのテフラとされる開閉岳噴出起源の灰ゴラに該当するⅢb層を掘り下げ、粘質が強くなった部分からⅣ層として認識し、遺物取り上げ及び遺構検出を行った。基本的には人力で掘り下げていったが、無遺物層が上下に厚く堆積している部分もあり、ここでは重機を用いてⅣ層を検出した。また、地形測量は遺物の濃淡などから調査区全域では行っておらず、Ⅳ層の遺構配置図等で使用している地形は、Ⅲb層段階のものである。

遺構は、集石を中心に焼土やピットなどが主体を占め、竪穴住居跡などの遺構は検出されなかった。なお、S-7区の焼土（焼土3）に関しては、炭を多量に含むかつ完形土器（第19図3）が隣接していること等から、放射性年代測定を実施した。その結果、材質は広葉樹で、3,670±49年Bp（補正3,669±45年Bp）という結果が示されている。



図版22 遺物出土状況写真

該期の遺物出土状況は、第20図～第27図・第55図～第59図に示したとおりである。中期前半や晩期のような遺物量は見られず、比較的小規模な分布を呈する。これらは、土器と石器、土製品と石製品に大別できた。土器は、総点数3,802点を数え、このうち、器形と文様などの属性が判明するものを抽出し、1類から4類に分けた。なお、これに分類できなかったものを5類とした。その後、胴部、底部、台付皿形土器の順に通し番号で類を付け、これらに後続すると思われる一群を8類、9類とした。土製品は便宜上10類として報告した。石器は、総点数236点を数え、剥片石器と礫石器とに分け、各器種ごとに報告を行う。なお、剥片は1,123点が出土している。

第2節 遺構

(1) 集石（第14・15図）

Ⅳ層該当の集石は8基が確認され、調査区北側から番号を付けていった。掘り込みの有無で2つのタイプがある。集石1はP-8区で検出された。総数51個の石で構成され、総重量は17.95kgであった。明確な掘り込みは検出されなかったが、礫の集積状況から掘り込みがあった可能性がある。集石2はM-8区で検出された。総数16個の石で構成され、総重量は2.69kgであった。明確な掘り込みは確認されなかった。集石3はK-7区で検出された。総数39個の石で構成され、総重量は14.29kgであった。50cm×50cmの土坑を伴う。集石4はK-7区で集石3に隣接して検出された。総数41個の石で構成され、総重量は9.88kgであった。集石3と同様に、50cm×45cmの土坑が伴う。集石5はH-8区で検出された。総数50個の石で構成され、総重量は16.95kgであった。60cm×55cmの土坑を伴う。集石6はI-6区で検出された。総数20個の石で構成され、総重量は4.47kgであった。明確な掘り込みは確認されなかった。集石7は、65cm×60cmの土坑が伴う。集石8は38個の石で構成される。礫はやや広がって検出され、明確な掘り込みは見られなかった。

(2) 土坑（第16図）

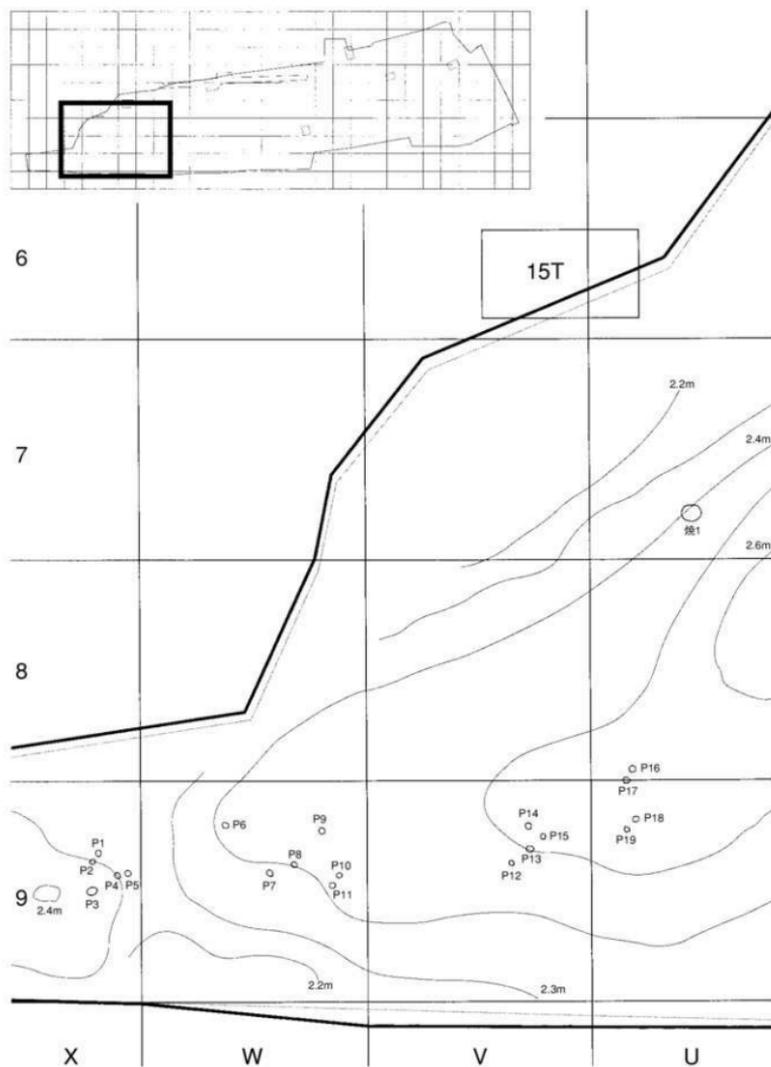
Ⅳ層該当の土坑は、3基が確認され、調査区北側から番号を付けていった。各々遺物の出土は見られなかった。

(3) ピット（第8図～第13図）

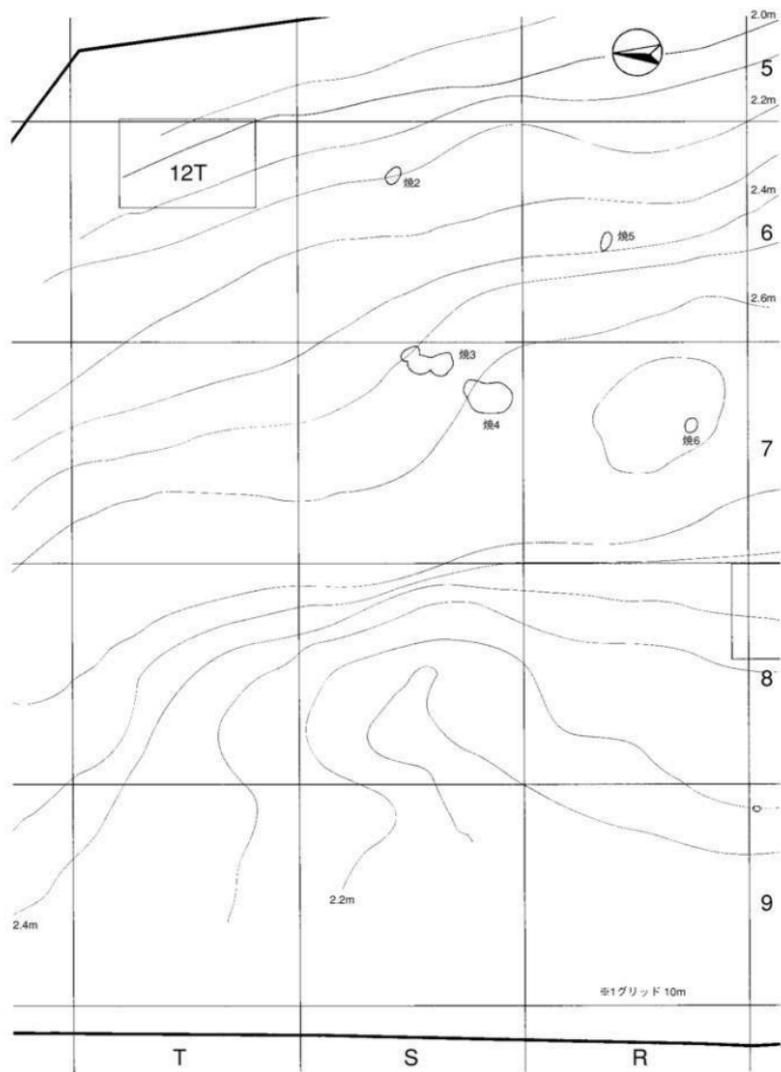
Ⅳ層該当のピットは、92基が確認され、調査区北側から番号を付けていった。埋土の状況などから該期に位置付けを行ったが、上層で検出できなかったものも含まれている可能性も考えられる。加えて、明確なまとまりをつかむには至らず、平地式住居などの可能性を指摘することはできなかった。

(4) 焼土・炭化物集中（第8図～第13図）

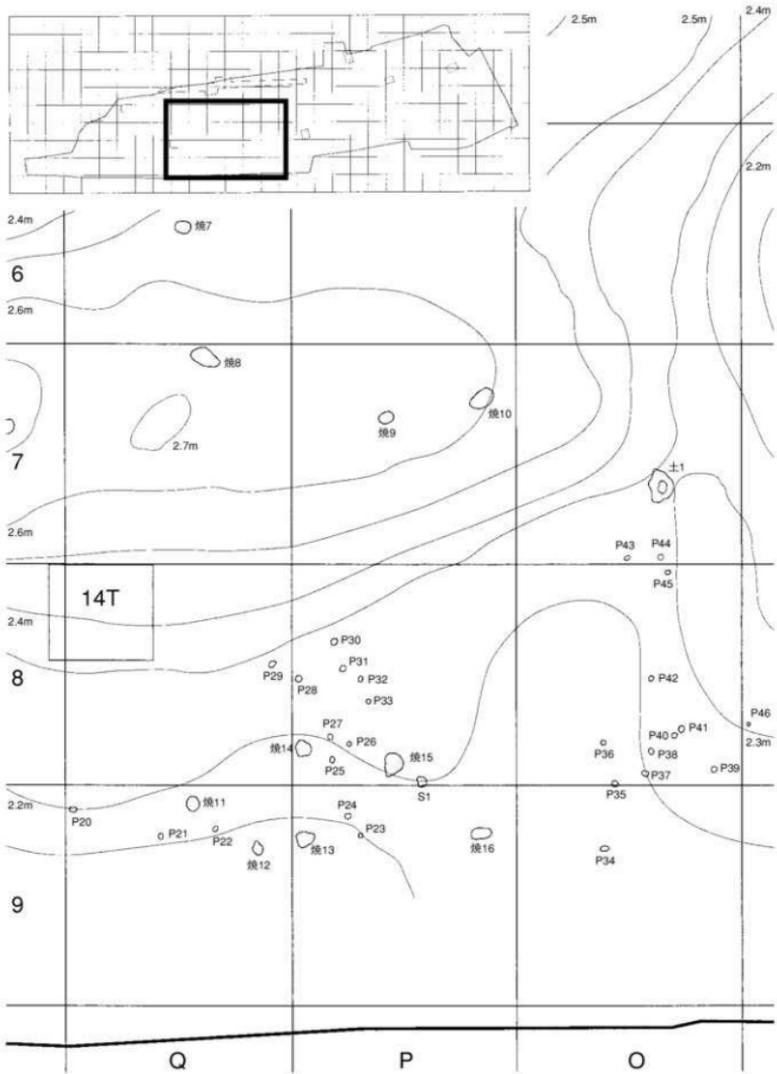
焼土及び炭化物集中は、44基が確認された。特に、G～H-6区に集中して検出されている。これらの周辺からは、1類土器が出土し、焼土27内からは1が出土していることから、これらの多くは1類土器段階に位置づけられる。焼土32は、底部片が出土している。胎土色調などの特徴から1類土器であろう。焼土27は、2m×1m程度の楕円形状に赤化が見られた。検出段階では、周辺に焼けた礫が認められたが、集石を構成する状況ではなかった。焼土部分を掘り下げると、2が割れた状態で出土しほぼ完形に復元できた。2は、丁寧なナデ後に幅8mmの太めの凹線文を器面全体に施す。この時の施文の深さは4mmあり、深く施文されることで、内面はその部分が盛り上がっている。このため、内面の起伏が激しい。



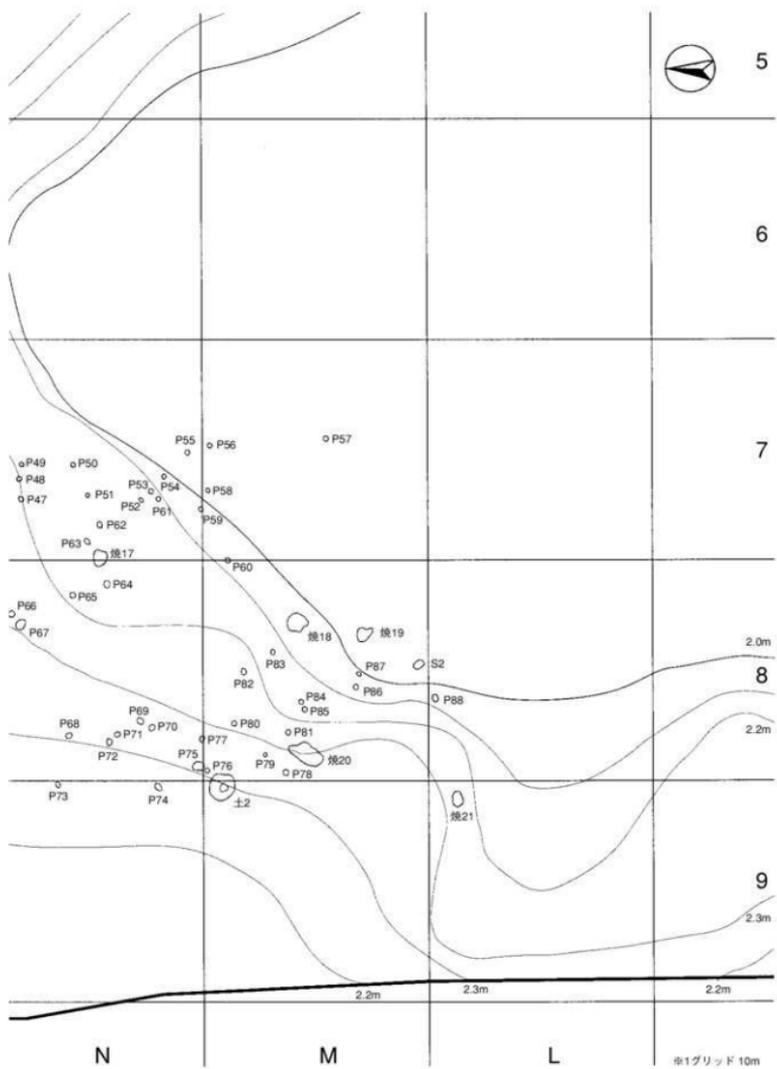
第8図 遺構配置図(1)



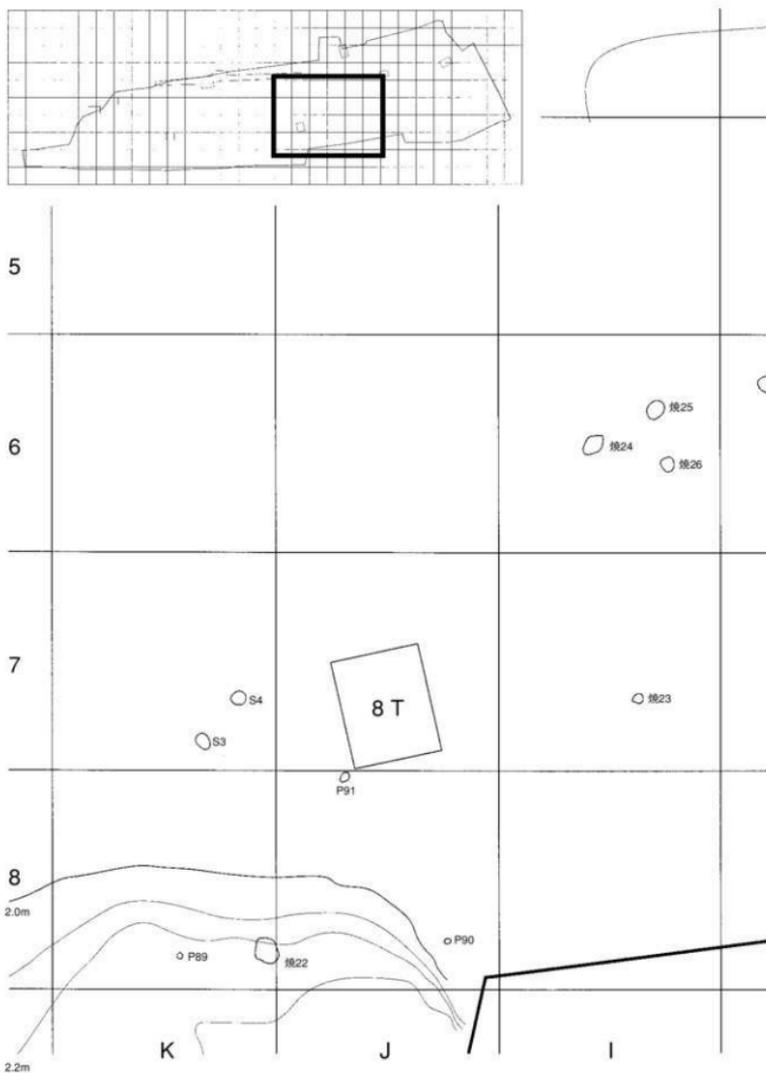
第9図 遺構配置図(2)



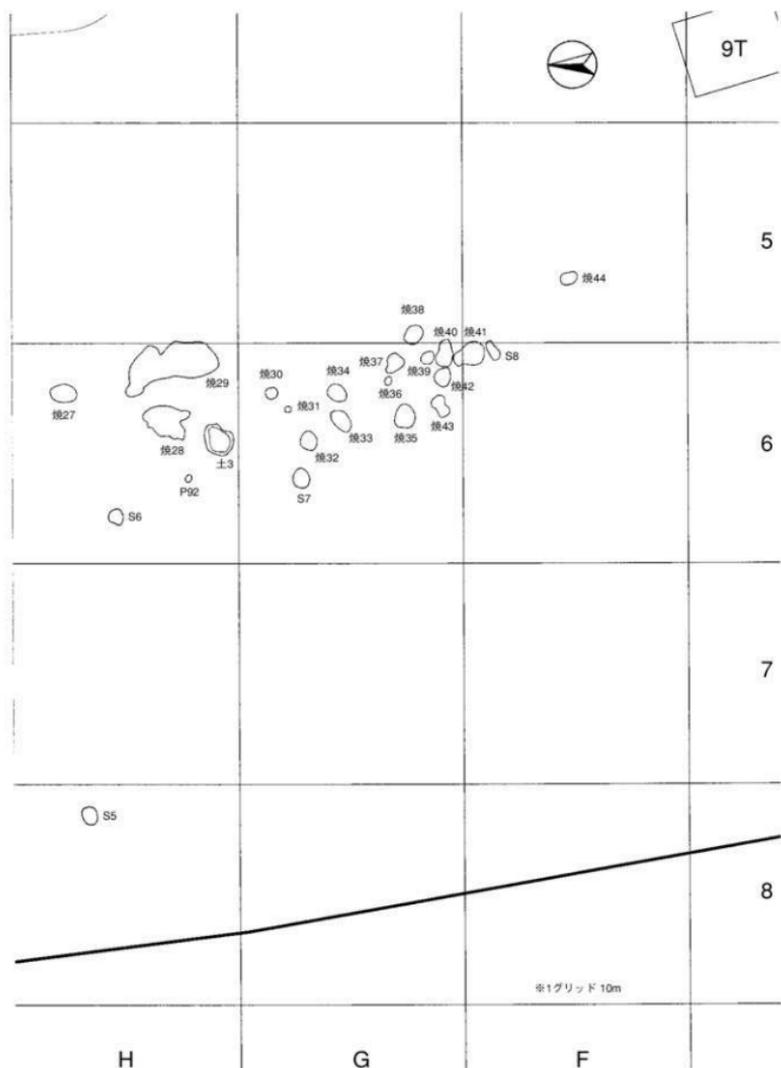
第10図 遺構配置図(3)



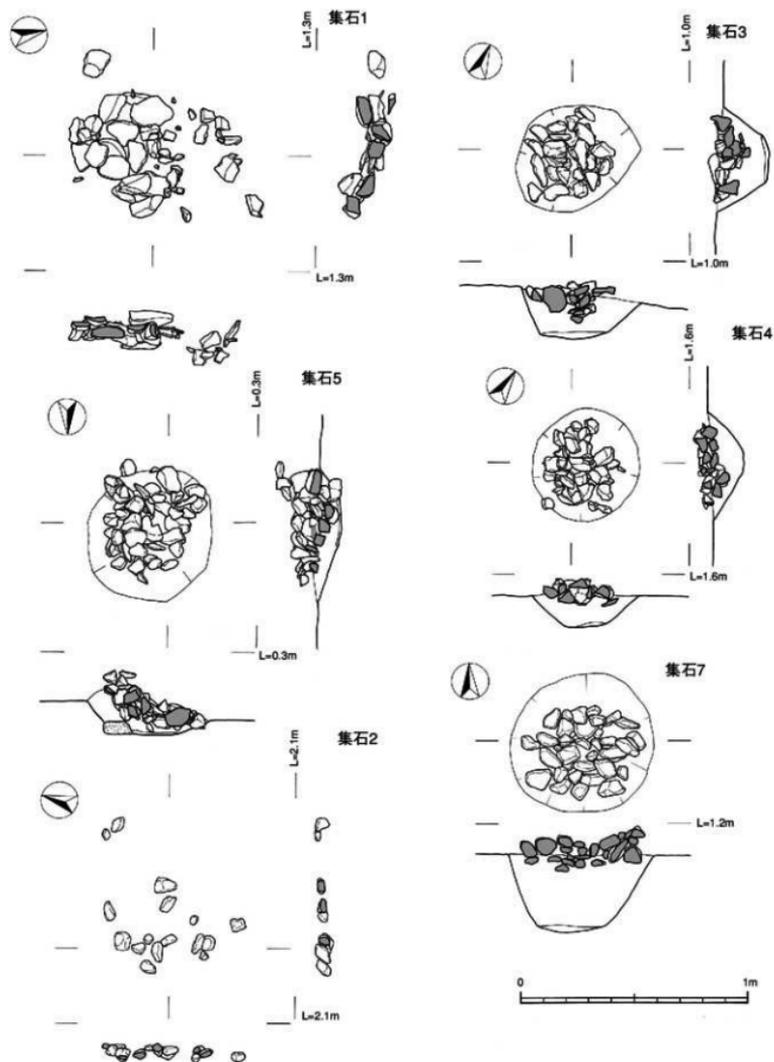
第11図 遺構配置図(4)



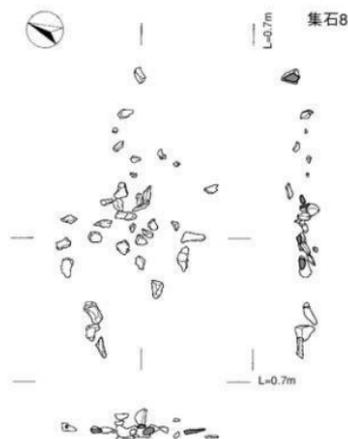
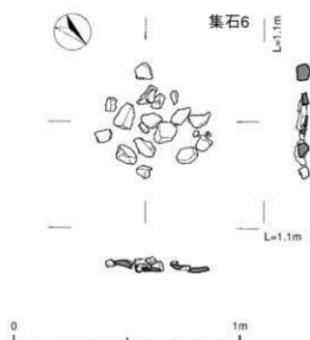
第12図 遺構配置図(5)



第13図 遺構配置図(6)



第14図 集石実測図(1)



第16図 集石実測図(2)

表5 焼土観察表

レイアウト 番号	遺構番号	計測値 (cm)		
		長さ	幅	高さ
1	00-6	90.0	81.0	13.5
2	00-4	80.0	60.0	12.0
3	A	240.0	110.0	9.0
4	00-5	251.0	187.0	14.0
5	00-3	82.0	46.0	10.0
6	00-2	78.0	56.0	22.0
7	00-1	53.0	53.0	—
8	B	138.0	80.0	—
9	a	78.0	74.5	0.8
10	β	134.0	96.5	9.1
11	2173	70.0	60.0	1.0
12	2172	62.0	42.0	1.0
13	2170	87.0	66.0	3.0
14	2169	78.0	70.0	1.5
15	2168	115.0	83.0	1.0
16	2167	95.0	58.0	0.5
17	2496	73.0	64.0	15.5
18	2657	(64.0)	(29.0)	(7.2)
19	2653	71.0	50.0	21.0
20	2630	163.0	82.0	—
21	2497	67.0	47.0	23.5
22	1583	117.0	98.0	36.4
23	2645	45.0	42.0	10.0
24	53	110.0	80.0	0.5
25	54	82.0	68.0	4.0
26	32	72.0	66.0	4.5
27	51	127.0	79.0	18.0
28	57	212.0	150.0	6.5
29	58	80.0	70.0	3.0
30	40	113.0	88.0	22.0
31	31	19.0	11.0	9.0
32	39	130.0	106.0	24.0
33	37	165.0	75.0	17.0
34	38	77.0	60.0	11.0
35	35	122.0	118.0	34.0
36	29	66.0	40.0	19.5
37	36	117.0	96.0	18.0
38	32	106.0	97.0	17.5
39	45	81.0	66.5	10.5
40	33	150.0	88.5	11.0
41	49	185.0	121.0	17.5
42	48	126.5	124.5	17.0
43	34	123.5	102.0	38.0
44	47	92.5	73.0	14.0

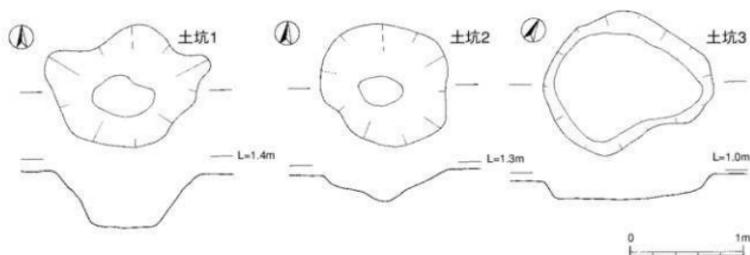
表6 柱穴観察表(1)

レイアウト 番号	遺構番号	計測値 (cm)		
		長さ	幅	高さ
1	2987	31.5	18.0	20.0
2	2966	21.5	20.0	16.5
3	2989	41.0	27.5	140.6
4	2985	27.0	14.5	92.2
5	2984	22.0	20.5	9.7
6	2988	23.0	21.0	21.5
7	2973	22.5	20.0	21.1
8	2974	21.5	20.0	11.4
9	2975	30.5	28.5	63.3
10	2976	18.0	16.5	26.0
11	2977	26.0	24.0	30.1
12	2958	21.5	18.0	11.7
13	2959	41.5	36.5	19.9
14	2960	20.5	19.0	10.8
15	2961	24.5	22.5	15.2
16	3010	25.5	25.5	29.4
17	3009	28.0	25.0	14.3
18	2963	28.0	24.0	17.2
19	2962	22.5	20.0	10.8
20	1962	25.5	21.0	35.1
21	1963	27.0	23.0	9.5
22	2176	21.5	19.0	14.1
23	2184	20.0	18.0	33.4
24	2177	22.0	20.0	20.0
25	1964	24.0	21.5	47.2
26	1966	24.0	23.0	21.4
27	1965	22.5	21.0	41.0
28	1968	27.5	24.5	37.1
29	1967	27.5	23.0	35.0
30	1969	30.0	24.5	6.6
31	1970	25.5	22.5	23.7
32	2174	26.5	21.5	10.2
33	2175	15.0	14.0	10.4
34	1992	31.5	22.5	21.9
35	2541	29.0	23.5	26.5
36	2385	18.0	16.5	16.5
37	2542	20.0	17.0	21.5
38	2386	26.5	23.5	34.4
39	2390	24.0	11.0	33.0



- ① 集石1
- ② 集石3
- ③ 集石4
- ④ 集石5
- ⑤ 集石7
- ⑥ 集石6
- ⑦ 集石8

図版23 集石検出状況



第16図 土坑実測図

表7 柱穴観測表(2)

レイアウト 番号	遺構番号	計測値 (cm)		
		長径	短径	深さ
40	2389	21.0	19.5	34.2
41	2388	29.0	24.0	19.1
42	2387	22.0	18.0	32.0
43	2570	20.0	19.0	18.4
44	2464	27.0	22.0	13.5
45	2571	21.0	16.0	19.8
46	2543	20.0	19.0	24.9
47	2466	27.5	27.0	20.9
48	2467	26.5	22.0	39.0
49	2468	19.0	18.0	21.5
50	2469	23.0	20.0	18.9
51	2417	28.0	26.5	46.3
52	2418	20.0	15.0	46.4
53	2419	32.0	24.5	15.3
54	2421	24.5	22.0	31.9
55	2470	29.5	24.5	27.5
56	2471	40.5	25.0	17.2
57	2472	23.0	22.5	36.8
58	2422	28.0	20.0	43.2
59	2423	19.0	18.0	30.1
60	2473	22.5	19.0	11.7
61	2420	15.5	15.5	12.8
62	2527	27.0	26.5	43.8
63	2526	34.0	29.0	29.3
64	2555	17.0	17.0	18.0
65	2568	21.0	18.0	20.9
66	2584	26.0	24.0	18.2
67	2585	45.0	40.0	37.4
68	2398	30.5	29.0	24.1
69	2402	(34.0)	(30.0)	(76.2)
70	2403	26.0	25.0	38.4
71	2400	21.5	20.5	36.2
72	2399	24.5	21.5	44.2
73	2396	18.0	16.0	26.3
74	2397	25.0	22.5	54.2
75	2544	57.5	44.0	21.8
76	2404	24.5	22.0	56.1
77	2545	28.0	23.5	14.8
78	2405	30.0	27.0	21.9
79	2548	13.0	11.5	11.8
80	2547	26.5	24.0	66.1
81	2549	23.0	22.0	80.5
82	2587	22.5	22.0	25.3
83	2588	23.0	21.5	45.2
84	2661	(23.0)	(16.5)	(20.1)
85	2652	28.5	19.5	18.0
86	2639	21.5	20.5	13.5
87	2638	26.5	21.5	18.8
88	2656	38.0	24.5	76.8
89	2596	20.0	20.0	48.6
90	2575	23.0	19.0	21.8
91	2644	47.0	37.0	8.7
92	1041	35.0	30.0	-

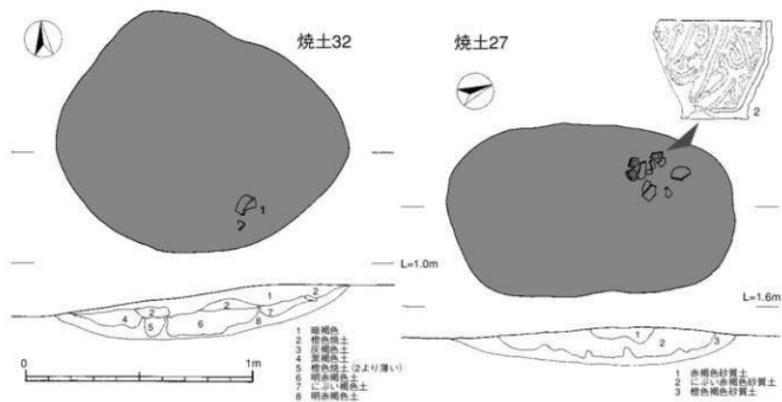


① 2

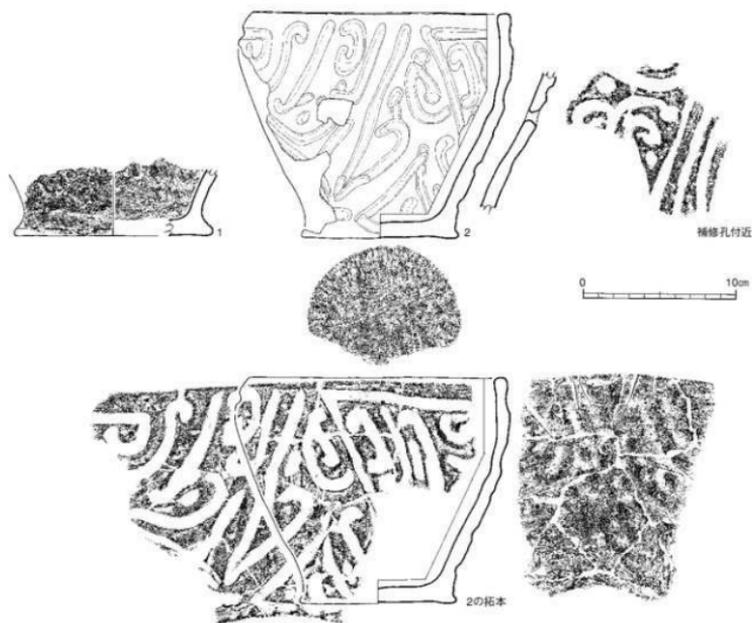


② 3

図版24 遺構内遺物



第17図 焼土実測図



第18図 焼土内出土遺物(1)

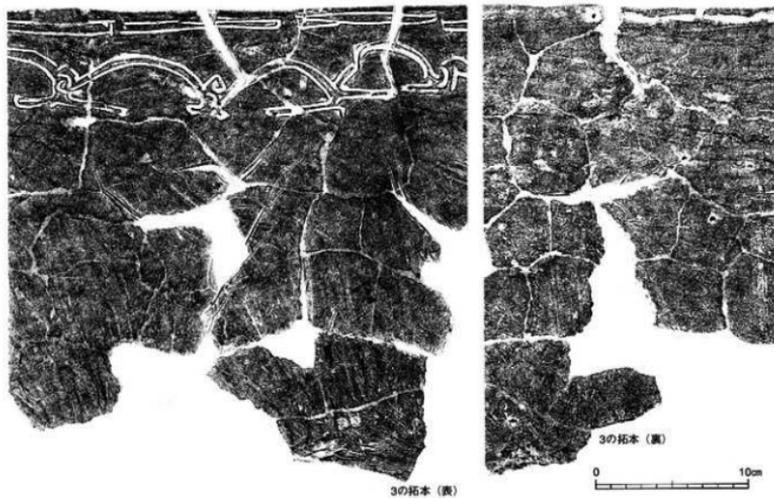
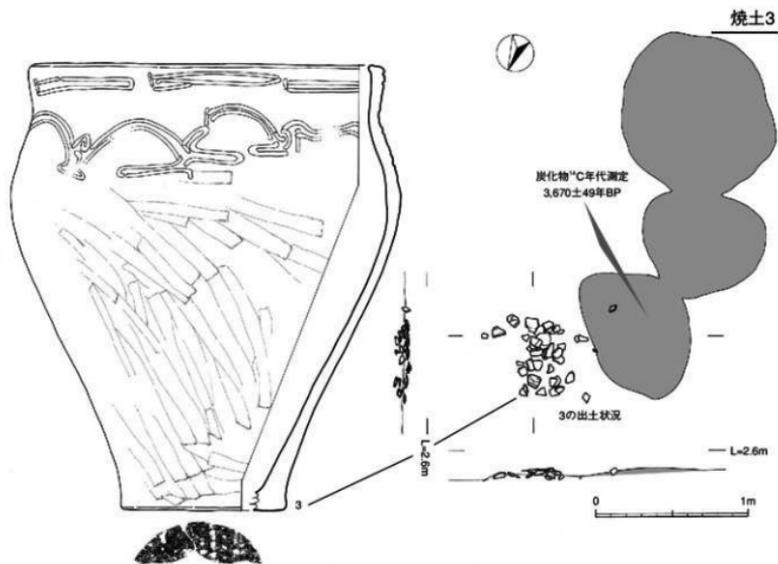


①焼土の状況



②遺物出土状況

図版25 焼土3及び2類土器出土状況



第19図 焼土3及び焼土内出土遺物(2)

また、特筆すべきは、概要の中でも紹介した焼土3である。焼土と炭化物物が3つの中心部を形成して検出され、隣接して2類土器が出土している。この土器は、破片の状態で検出されたが、近接してほぼ全ての破片が集中しており、焼土・炭化物物・土器の3者の関係が目玉される。土器を観察すると、外面には土器焼成の後に使用した痕跡となる部分的な赤化や黒色物の付着などが認められない。加えて、口唇部から内面にかけては黒色化しており、伏せて土器焼成を行った際の痕跡に類似している。これは、あくまでも可能性の1つに過ぎないが、土器焼成遺構の可能性も視野に入れた焼土・炭化物物集中遺構として解釈したい。

第3節 遺物

(1) 土器

① 2群1類 (第28図4～第31図24)

87点が出土し、このうち21点を図化した。分布は焼土・炭化物物集中の節においても述べたが、F-1-5～7区に集中する傾向がある。

特徴は、器面に凹線文を施すものである。太めの凹線文を施すものや、口縁部にやや細めの凹線文を施すものがある。共に数個体の出土であった。

16は、口縁部外面に段を設けて文様帯を作出し、口唇部は深いキザミを施す。口縁部文様帯も縦・横位など凹線や凹点が不規則に施文されている。なお、この凹線は幅6～7mm程度である。

② 2群2類 (第32図25～第41図76)

399点が出土し、このうち52点を図化した。Ⅳ層出土土器の主体を成すものである。器形は深鉢形が主流であるが、鉢形を呈する資料も確認できた。分布は、O-U-4～8区にかけて集中的に出土している。この他にも、C～H区にかけても散在している状況が見られる。

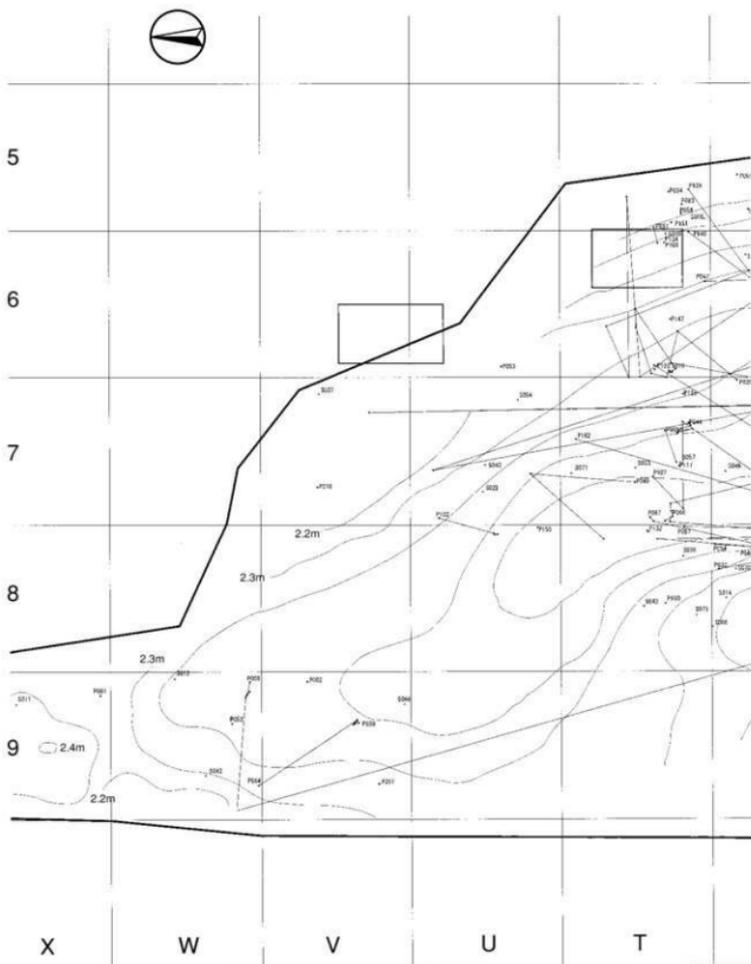
これら2類の特徴は、口縁部が外反するものが多く、平口縁と波状口縁とがある。波状口縁には、4か所の波頂部を有するものが多いが、中には3か所の波頂部を有する資料もある。しかし、破片での認定は困難で、破片に関しては厳密に分類できなかった。文様は、口縁部から胴部上端にかけて2本1組の沈線文が靴形あるいは音符文に近いもの、S字状に施文されるものなどがある。器面調整は、貝殻条痕を基本とするが、これをそのまま残すもの、ナデにより条痕が不明瞭なもの、ナデにより貝殻条痕が消失しているものに大別でき、胴部下半に関しては、ケズリが認められるものもある。底部は、粗い粘土の貼り付けや調整などにより外に張り出す。底面には網代等の圧痕が確認されている。以下、個別にその特徴を記していきたい。

26は、口縁部が緩やかに外反し、4つの波頂部を有す

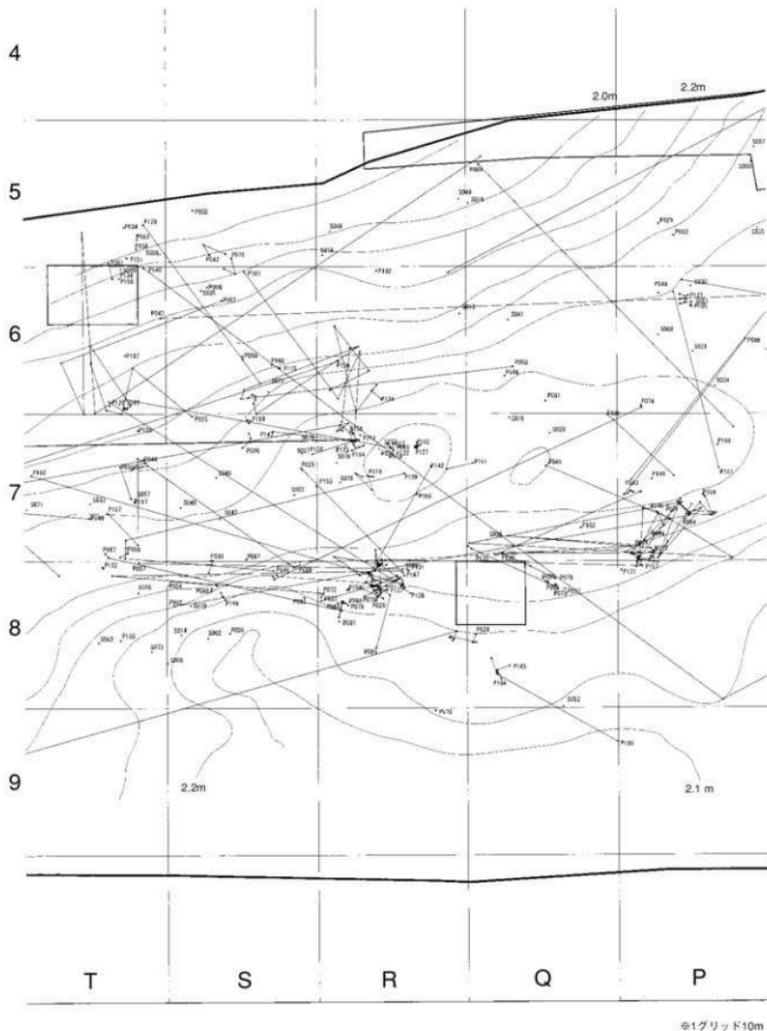
る。胴部はわずかに膨らみ底部は外へ張り出す。器面調整は貝殻条痕で、胴部上半から口縁部にかけてはこれをナデ消す。その後、細い沈線文を縦帯状に施文する。波頂部には3本の沈線文がやや斜位に施文される。内面調整はケズリを主体とする。なお、口縁部に補修孔が見られるが、内面には外面と連結しない穿孔も見られた。27は、口縁部が外反し、3つの波頂部を有するもので、口縁部内面には段が設けられている。器面調整は、胴部下半に幅1cmの工具によるケズリ痕が見られ、口縁部文様帯周辺ではナデが観察される。文様は、2本1組を意識した直線的な沈線文を縦帯状に施文する。28は口縁部が外反し胴部でやや膨らむ。3つの波頂部を有し、その頂部にはキザミ目が施される。文様は、2本1組の沈線文を逆C字状に施す。29はわずかに波状を呈する。上下各2本の横位沈線文に挟まれた部分には短い直線的な沈線文が施される。なお、波頂部内面には菱形状に沈線文が施文される。32の器壁は頭部下で薄くなっている。36は口縁部に鱗状の波頂部が作出されている。2本の並行する沈線を組み合わせて施文されている。胴部はケズリが見られる。内面は胴部で縦位の条痕が見られ、その上位は横方向にケズリ、明瞭な段を有する。胎土は特に小礫が多く粗い素地となっている。34は内面施文に横位のS字状文が見られる。39は、口縁部が外反し内面に段を有する。2ないし3本の沈線文が横位にめぐる。施文具は棒状工具であろうか、沈線文内に細いスジが走る。波頂部内面には貝殻刺突文が施文される。43の沈線文は鋭く深い。一連の動作でS字状に近い施文を施す。内面は波頂部に縦位に3本の沈線文が施される。61は、口縁部に粘土を貼り付け正面と側面から穴を穿っている。63は波頂部を肥厚させやや幅広い口唇部に沈線文が施される。64は、口唇部に粘土ねじり紐を貼り付ける。施文はやや鋭い。65は、波頂部内面に粘土ねじり紐を貼り付けている。66は、器壁が厚い。条痕後口縁にヘナタリ?により擬似縄文が施され後に沈線文が施される。口唇部にも同様の施文が施されている。45は内外面ともに比較的確にナデ調整が行われている。そして、沈線文が施されているが、沈線文内には細かなスジが認められる。53は横位の条痕後ナデが施されている。やや太めの沈線文が長靴形に施されているものと思われる。56～58は胴部が膨らむ一群である。次に述べる59群鉢形にはならない。59は、鉢形を呈する。2か所の突起を有し、上面、両側面、正面からそれぞれ穿孔している。60は釣手形の裝飾が施されていたと思われる。73は内外面共にケズリが明瞭に観察される。

③ 2群3類 (第42図77～85)

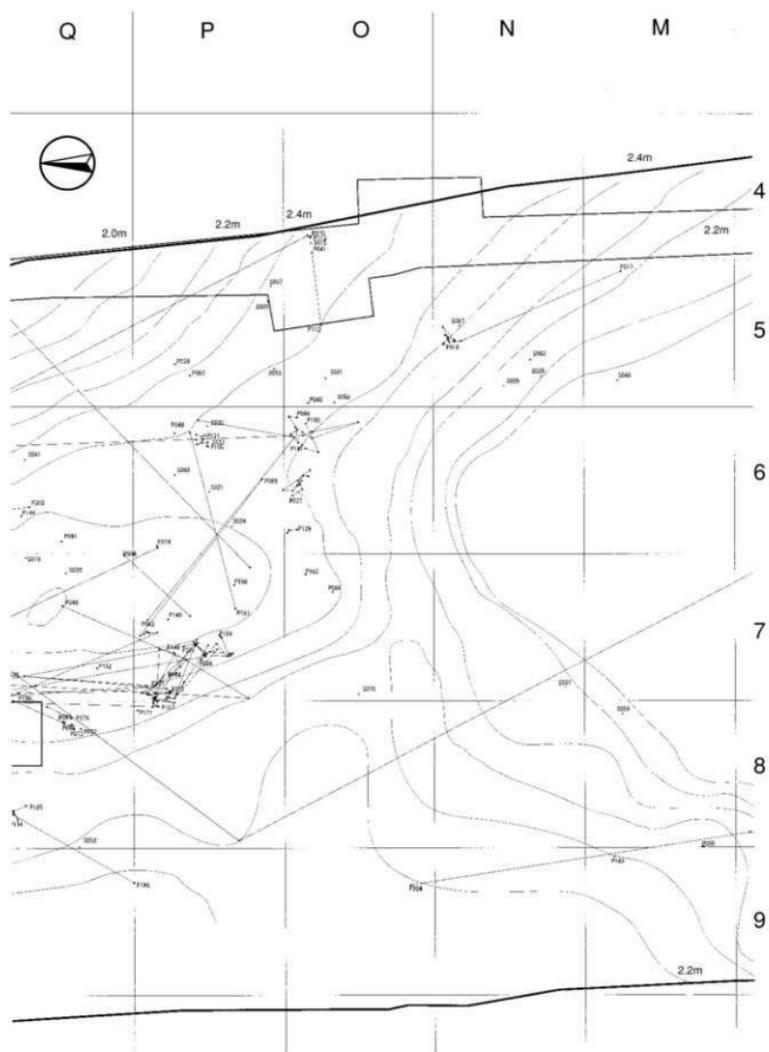
器面に、縄文が施されるものを一括した。80点が出土し、このうち9点を図化した。数個体の出土であり、口



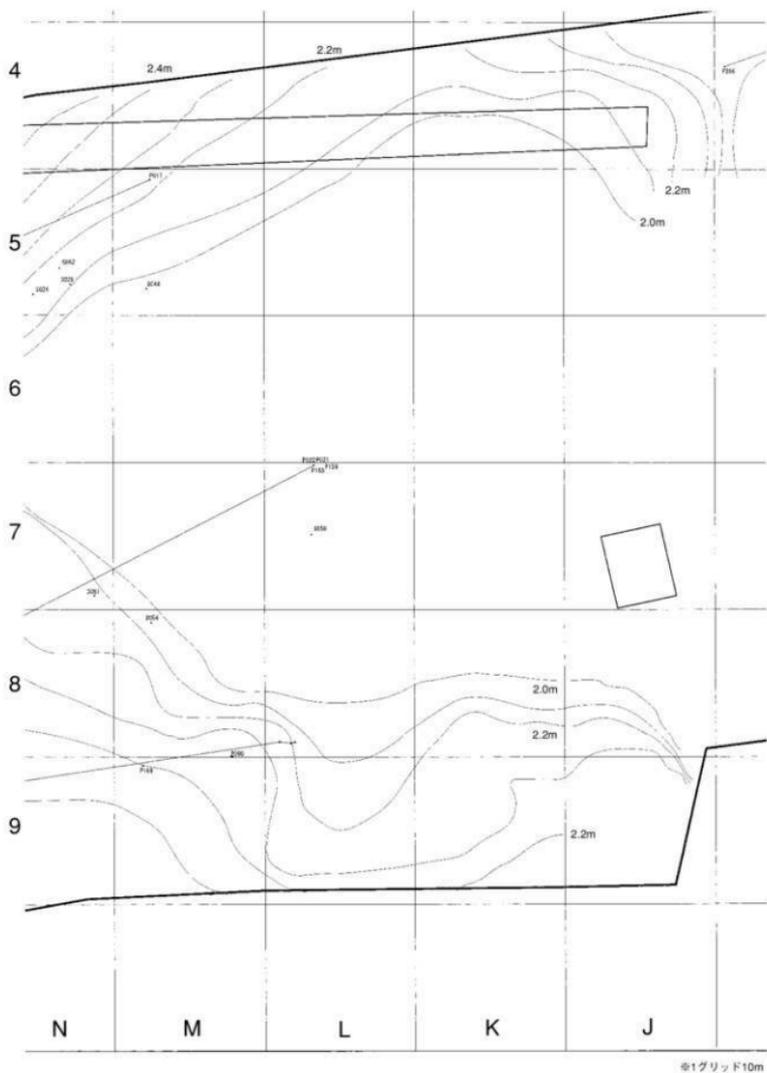
第20図 掲載遺物の出土状況図(1)



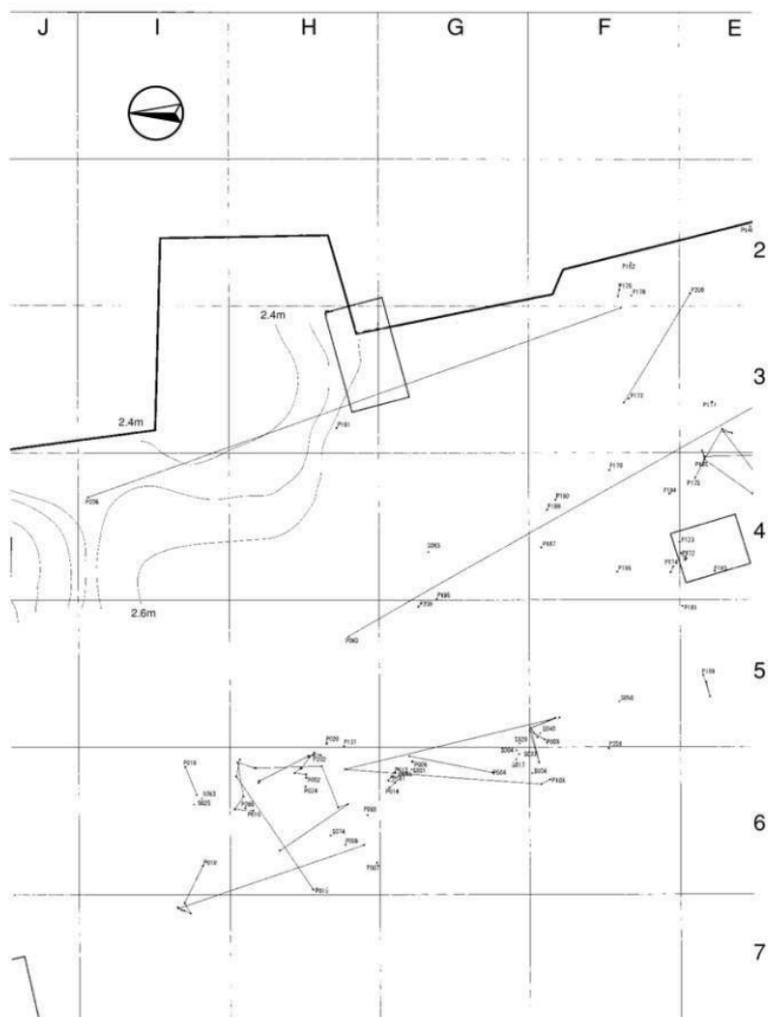
第21図 掲載遺物の出土状況図（2）



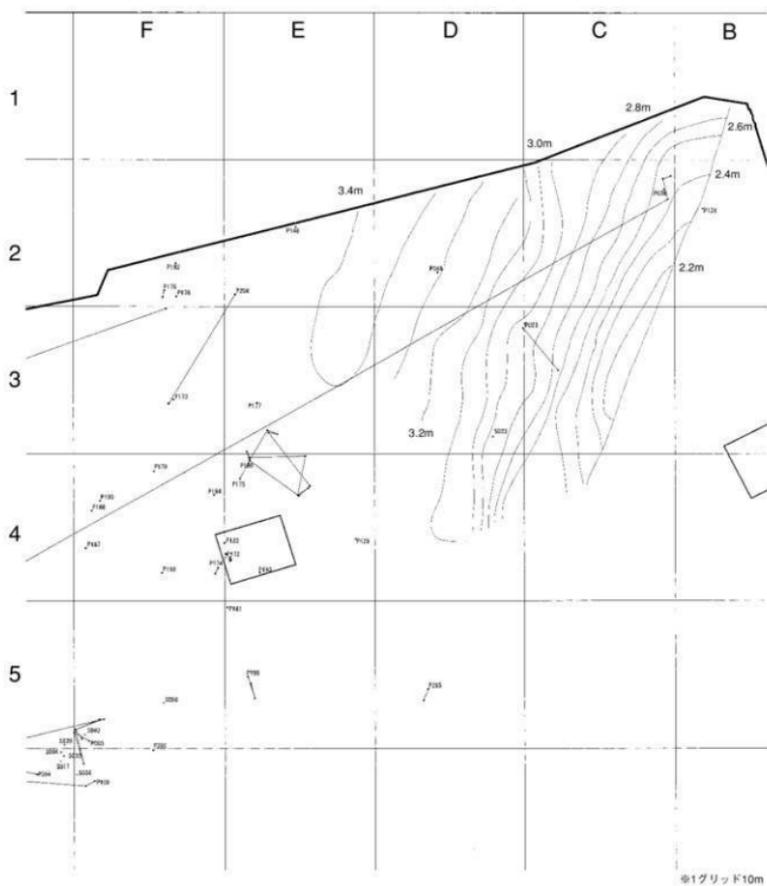
第22図 掲載遺物の出土状況図（3）



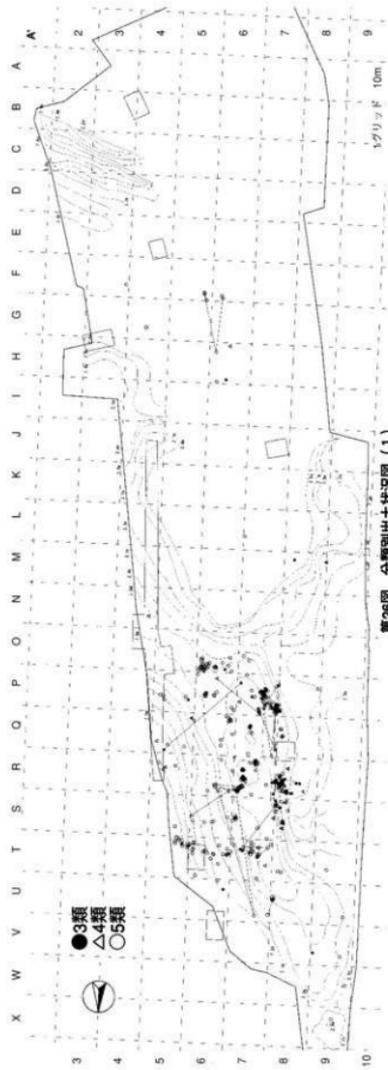
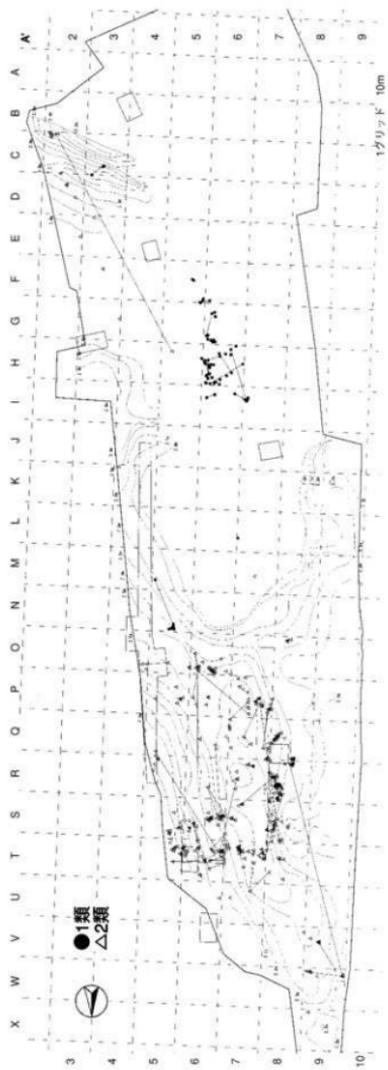
第23図 掲載遺物の出土状況図（4）



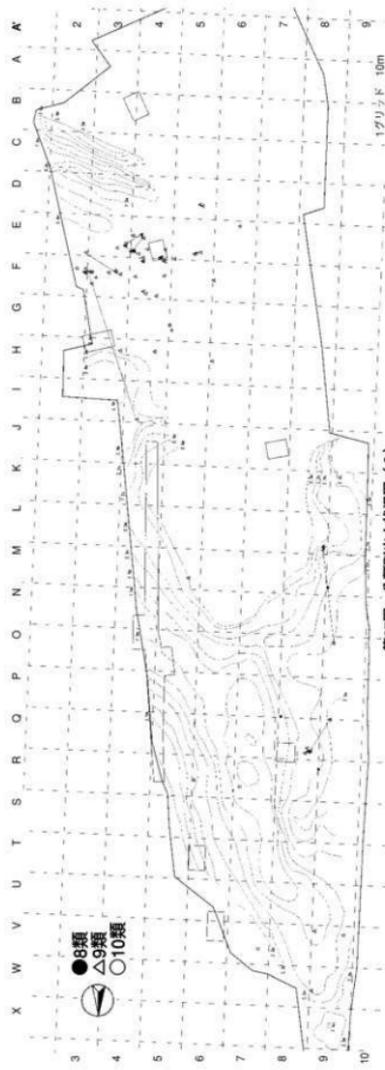
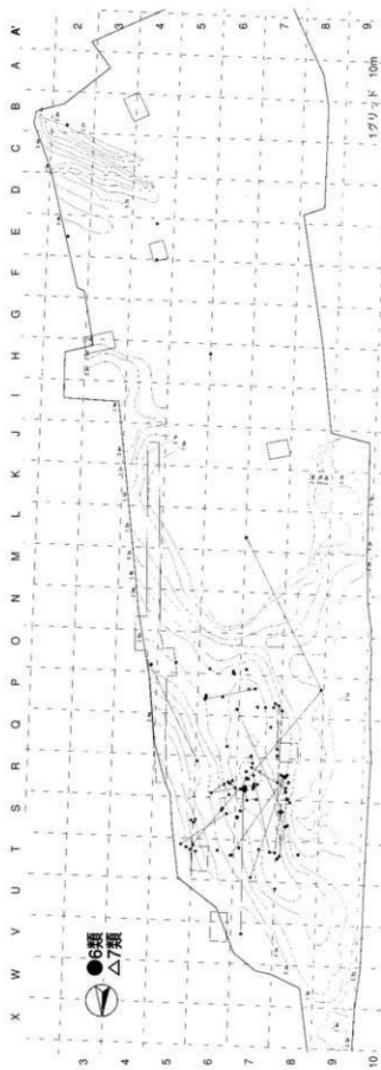
第24図 掲載遺物の出土状況図 (5)



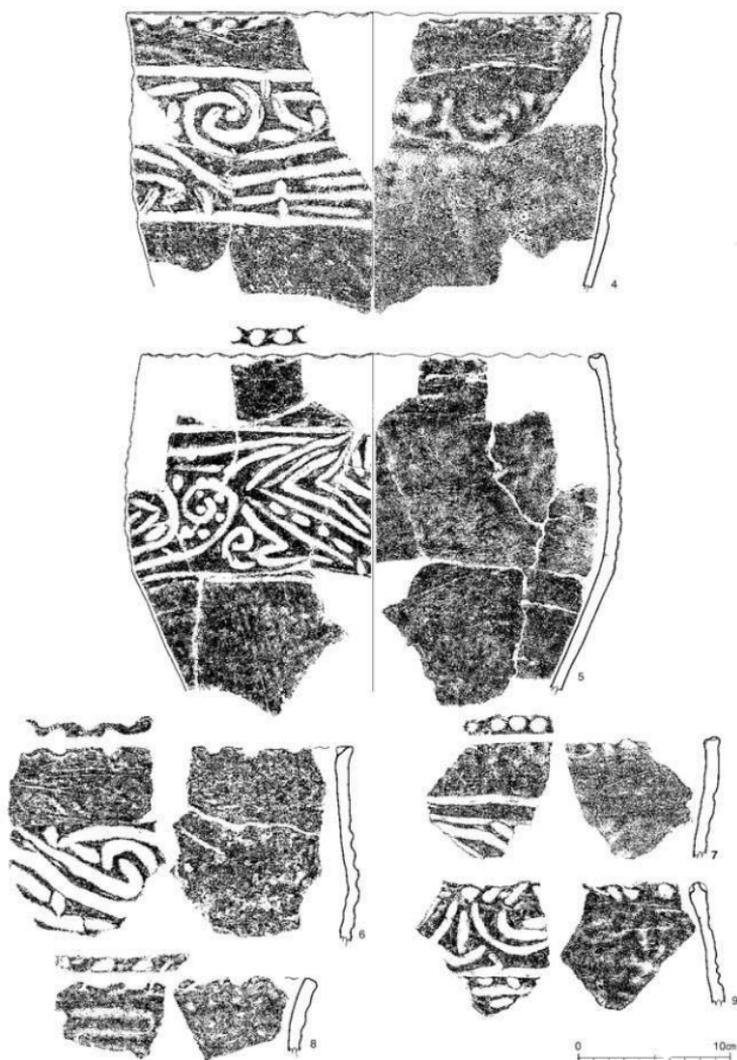
第25図 掲載遺物の出土状況図（6）



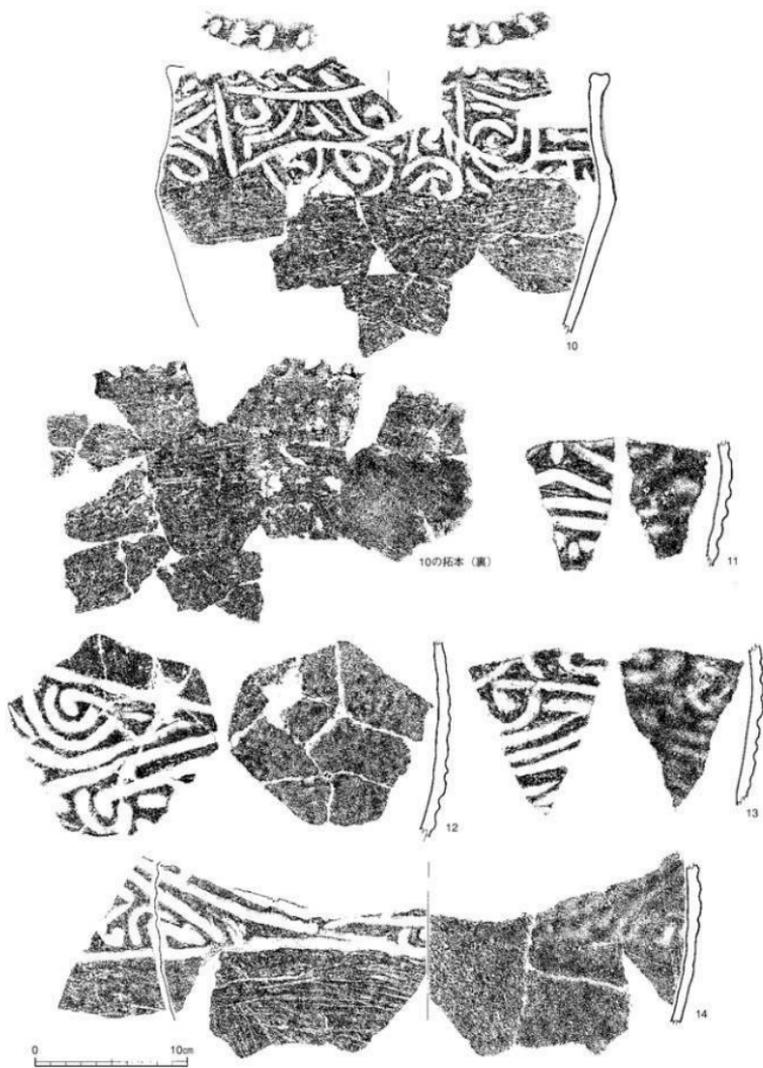
第266図 分類別出土状況図(1)



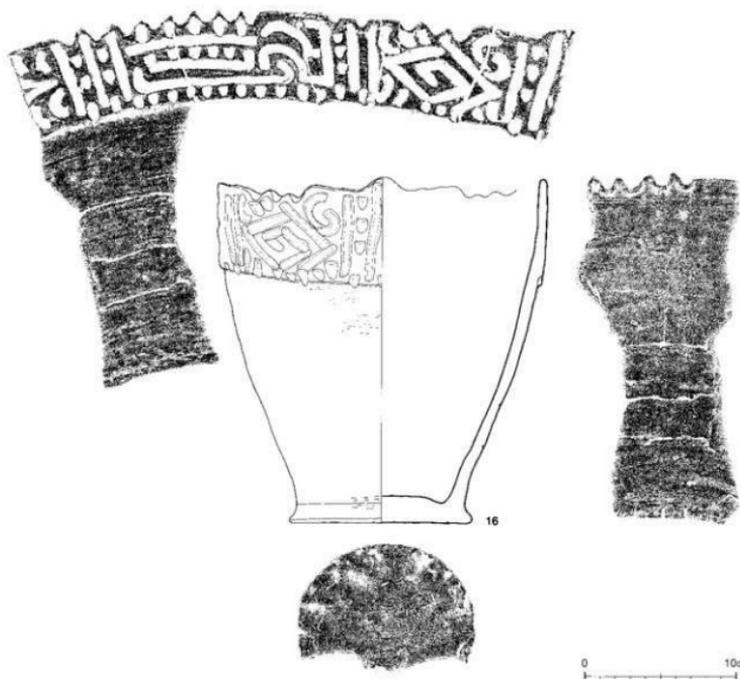
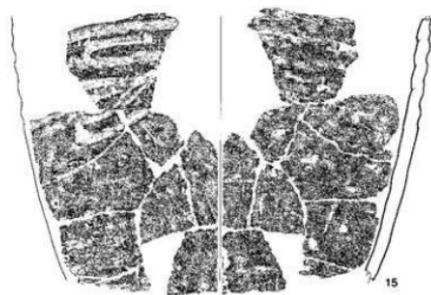
第27図 分類別出土状況図(2)



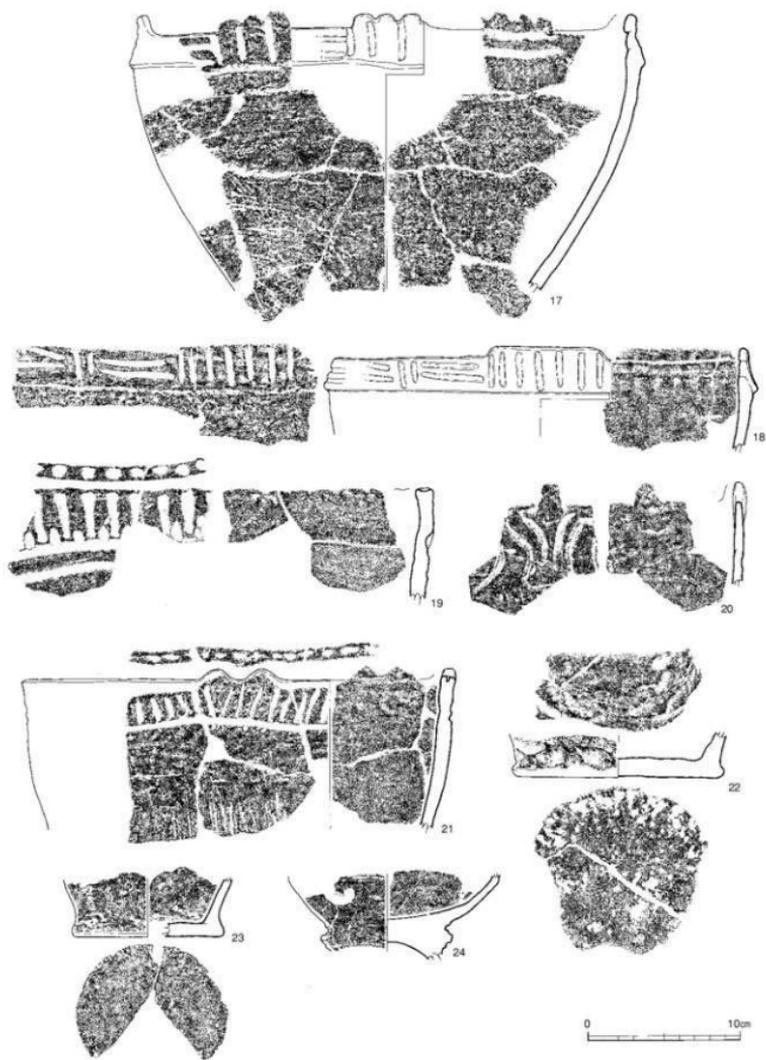
第28図 遺物実測図 (1) 1類土器①



第29図 遺物実測図(2) 1類土器②



第30図 遺物実測図 (3) 1類土器③



第31图 遗物实测图(4) 1類土器④



図版26 2群2類25出土状況



25



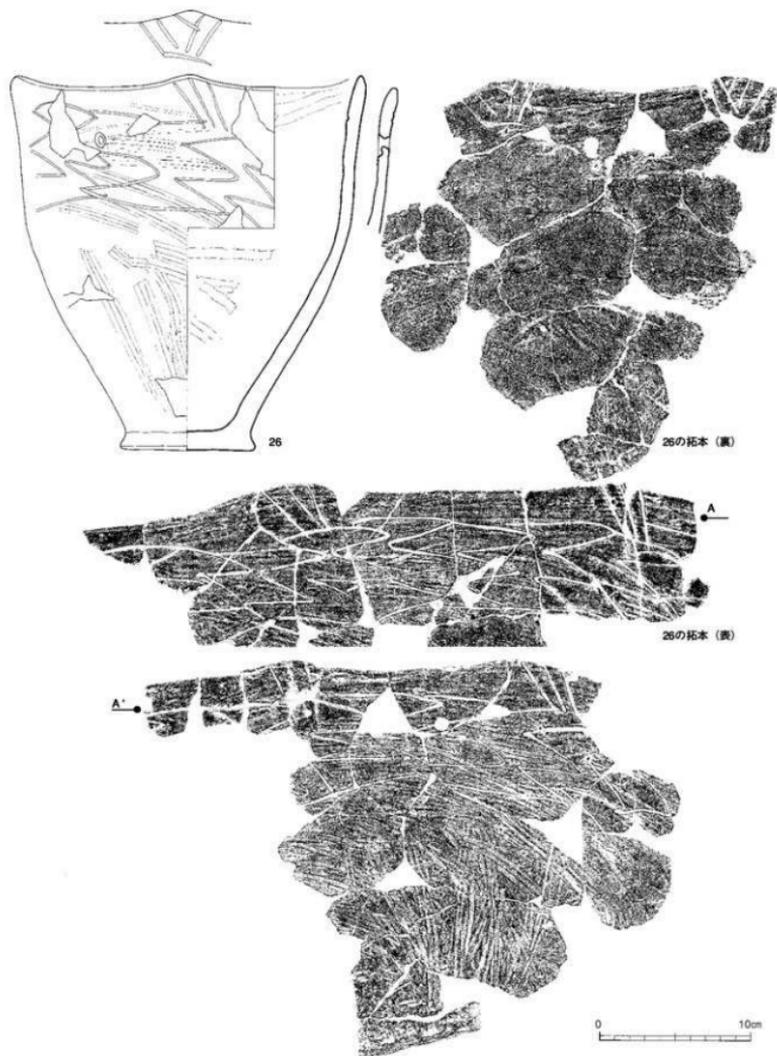
25の拓本(裏)



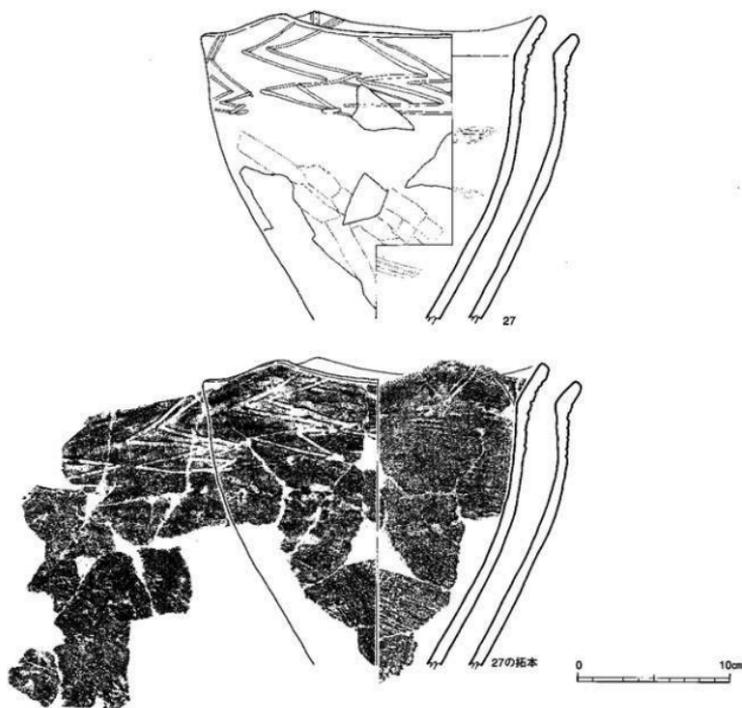
25の拓本(表)



第32図 遺物実測図 (5) 2類土器①



第33図 遺物実測図 (6) 2類土器②



第34図 遺物実測図(7) 2類土器③

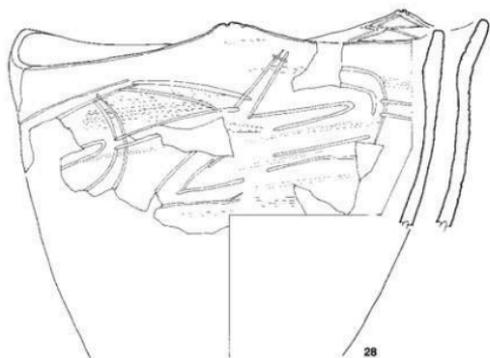
縁部が外反するものや直行するものなど個体別に特徴がある。文様は、沈線文間に縄文を施文する。分布は、R-8区に集中しているが、2類の主体的分布域とほぼ重なっている。77・78は同一個体の可能性がある。3本の並行する沈線文を有する。85は、口縁部が肥厚して3つの山形口縁を呈する。底部は上げ底状である。丁寧なケズリにより均一な器面をなしている。

② 2群4類 (第43図86~第44図93)

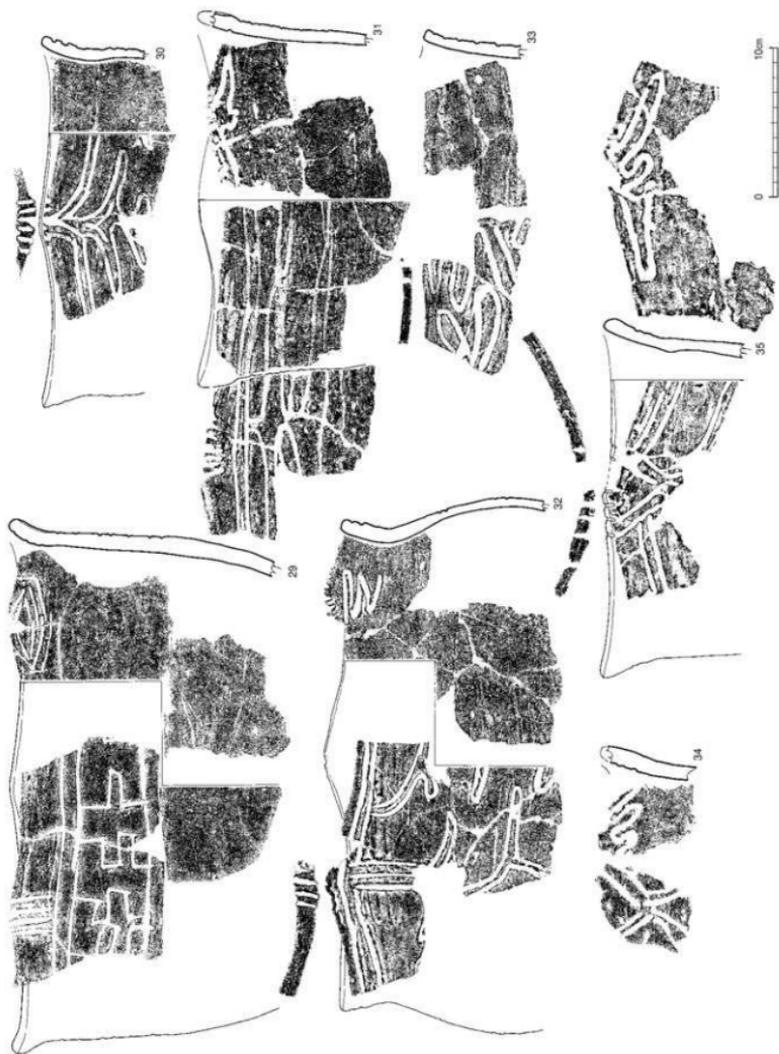
上記の1から3類に分類できなかったものを一括して掲載した。胴部片まで含めると、分類できなかったものは2823点に上り、このうち口縁部に関しては特徴を抽出

した結果、1から3類以外の口縁部片が76点あり、このうち8点を図化した。分布図を示したが、各種混入の状況であることを付言しておくたい。

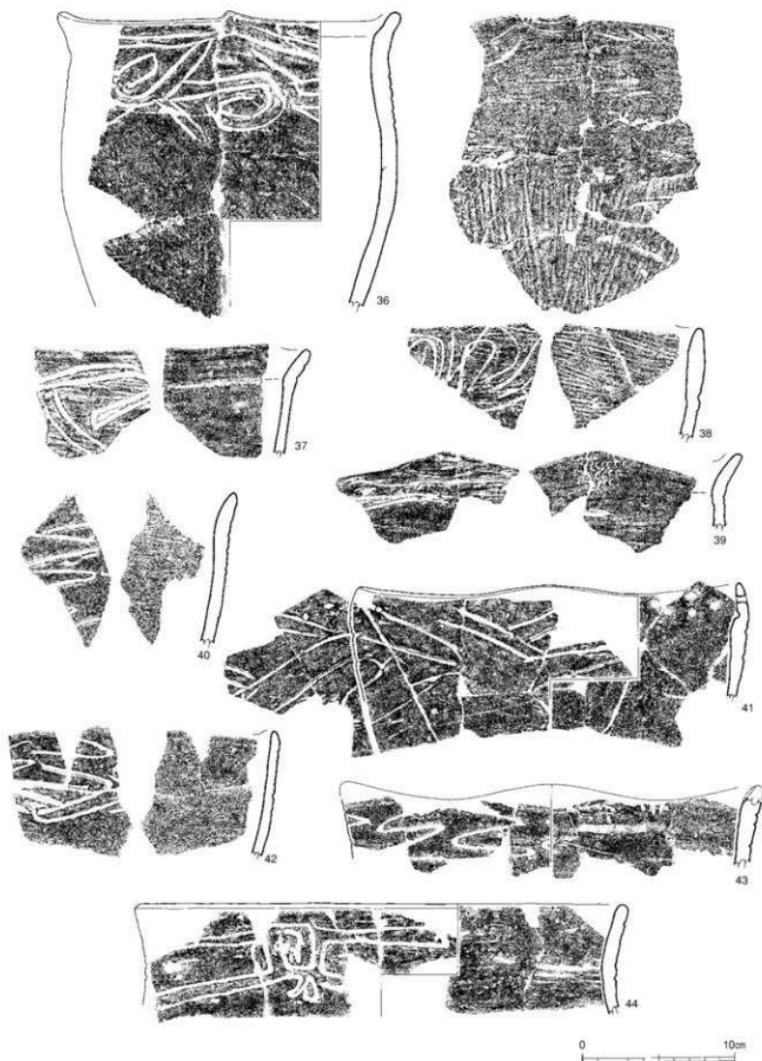
86は、IV層出土土器の中で最も大型な土器である。口縁部が外反し、その断面は三角形状を呈する。その下部ですばまり胴部で膨らんで底部近くで再びすばまり底部へ至る。この底部は、口縁部径に対して7:3程度である。4つの波頂部を有し、頂部は指で押しえつけて窪ませる。断面三角形状に肥厚した口縁部には、貝殻刺突文と沈線文とが施文されているが、沈線文周辺にも刺突文状のものが観察される。いわゆる擬似縄文と思われるが、施文具の特定ができなかった。胴部は全面貝殻条痕文で



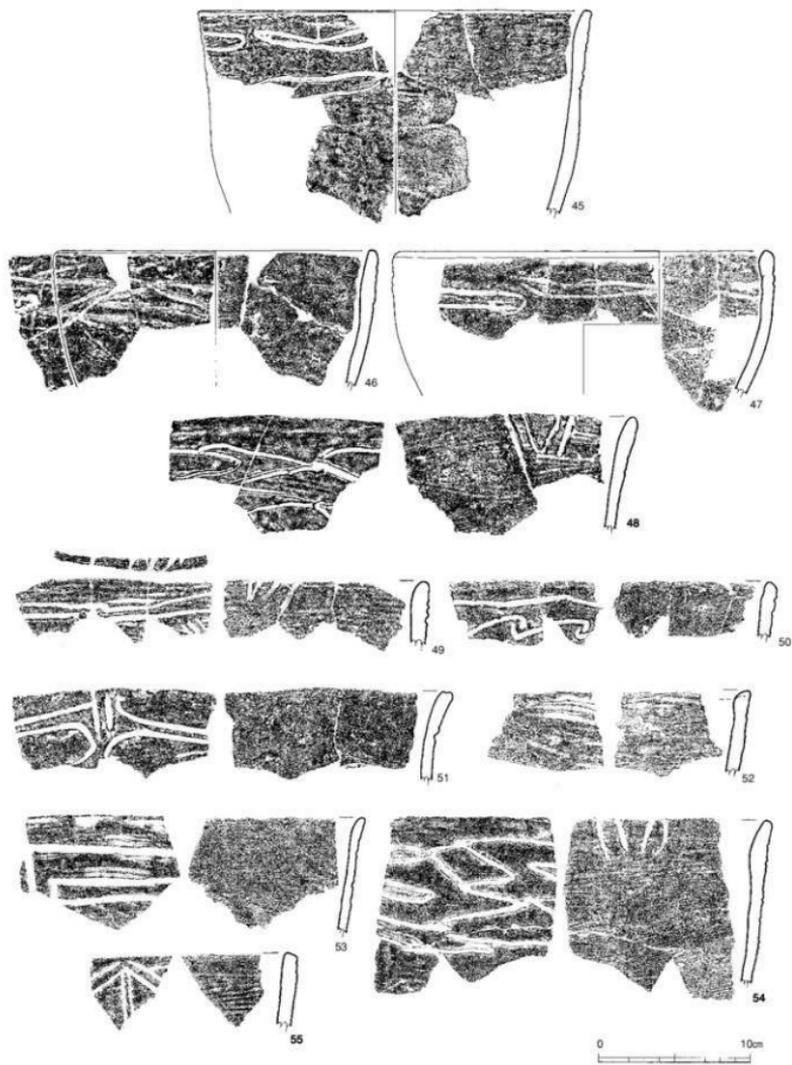
第35図 遺物実測図 (8) 2類土器④



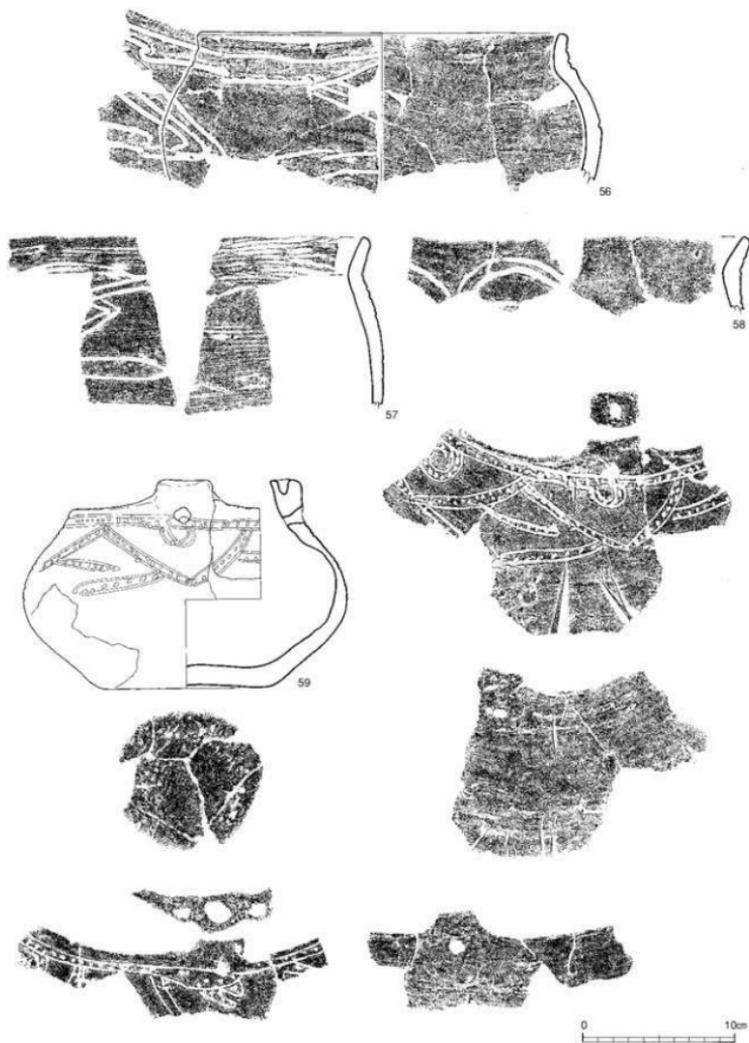
第36图 遺跡実測図(9) 2號土器⑤



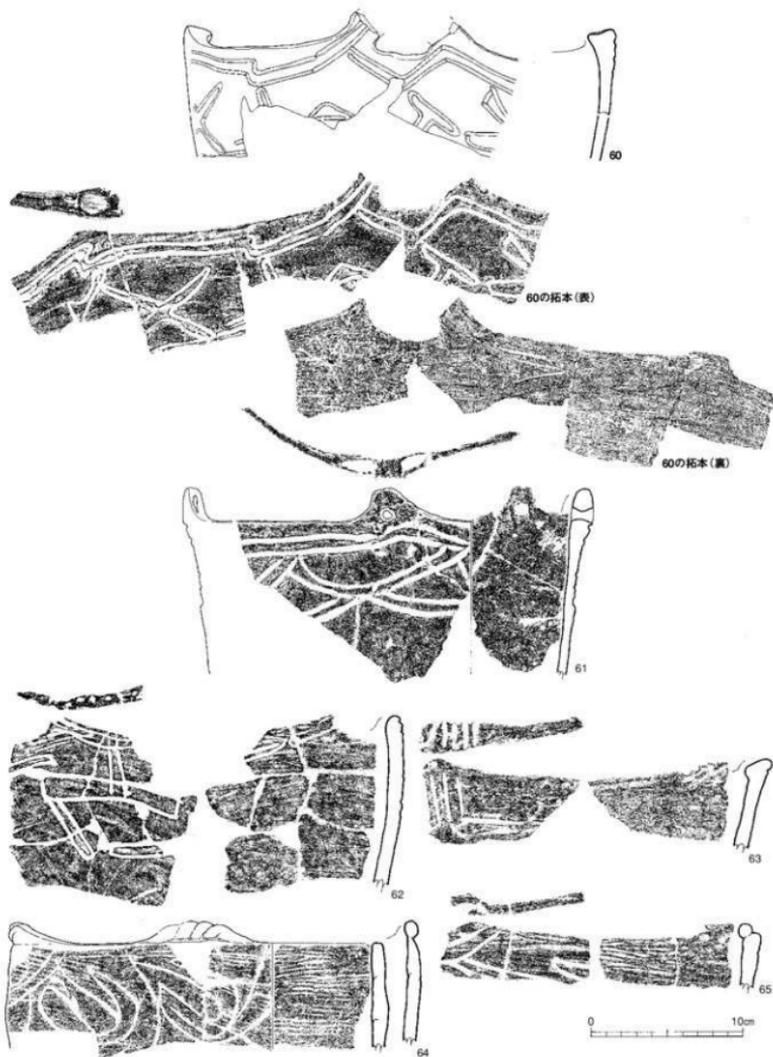
第37図 遺物実測図 (10) 2類土器⑥



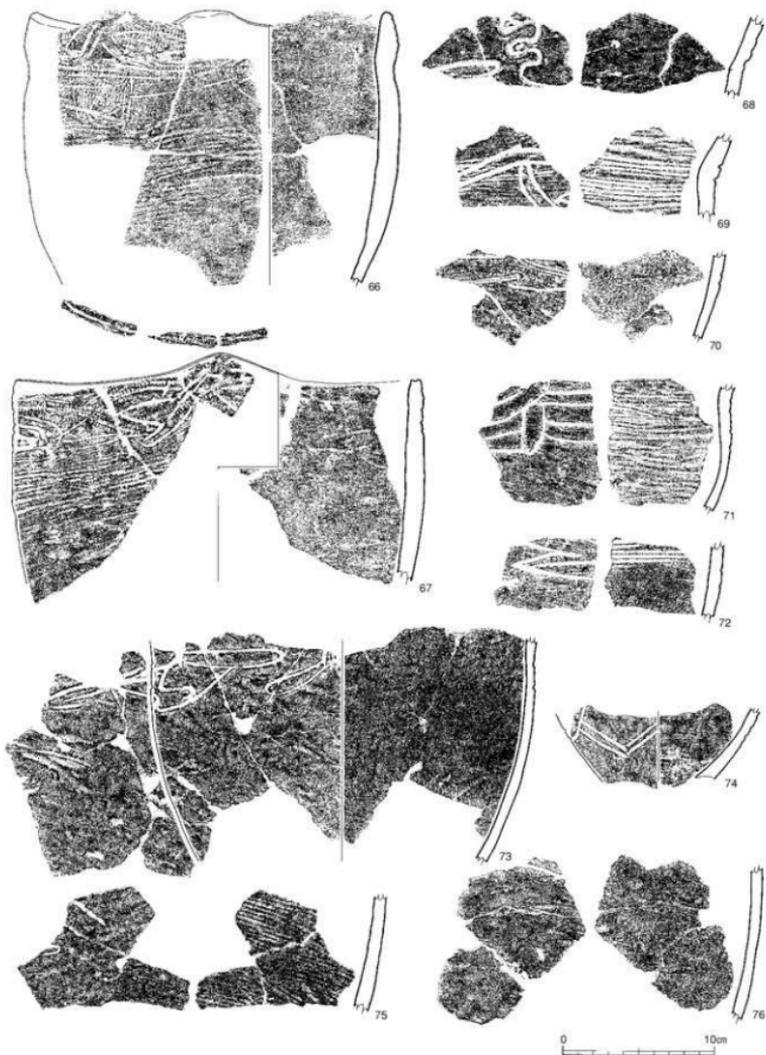
第38図 遺物実測図 (11) 2類土器⑦



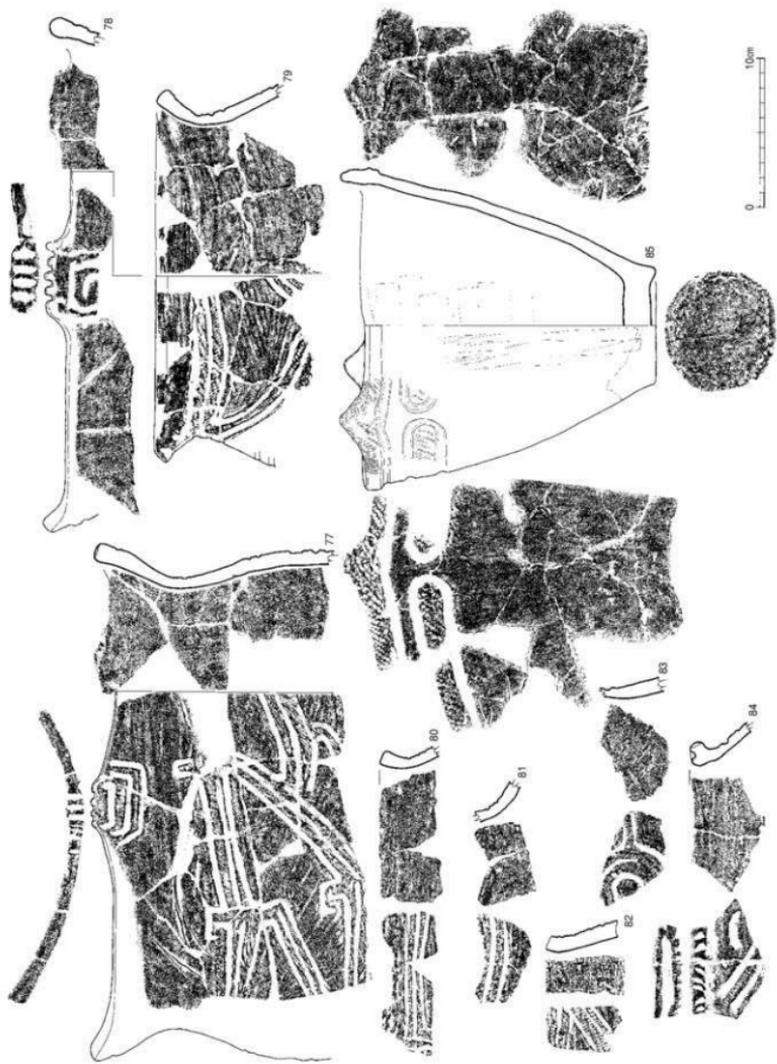
第39図 遺物実測図 (12) 2類土器⑧



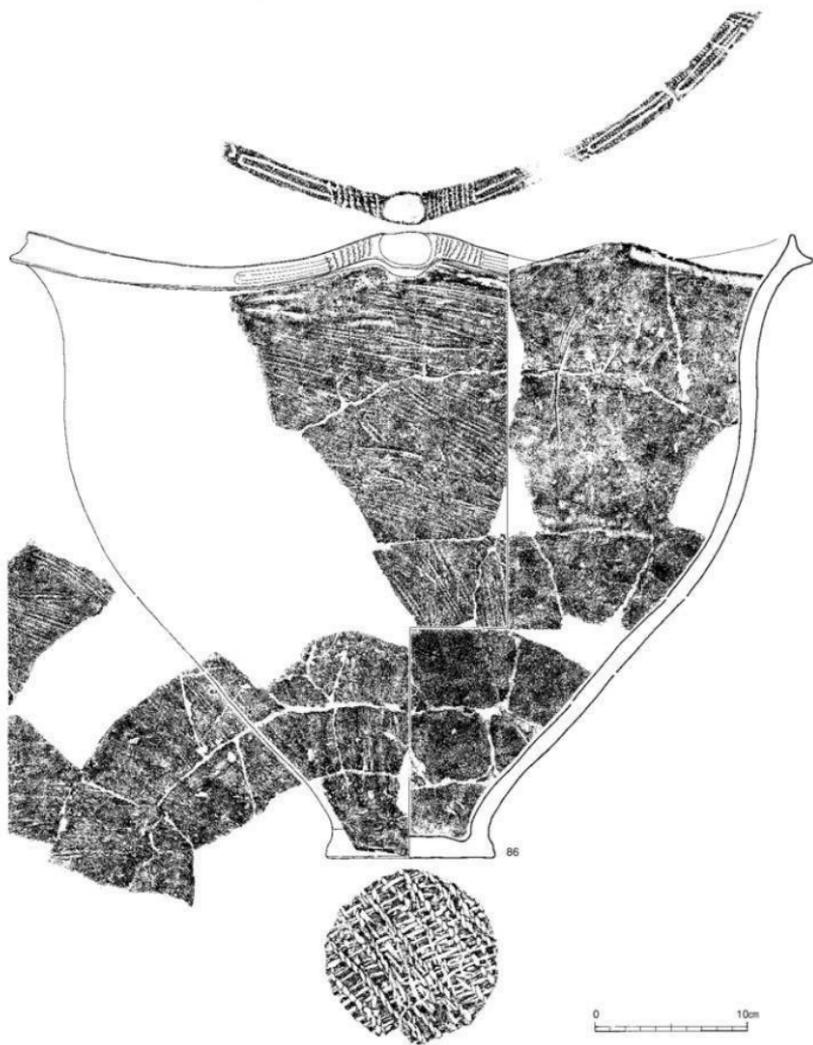
第40図 遺物実測図 (13) 2類土器⑨



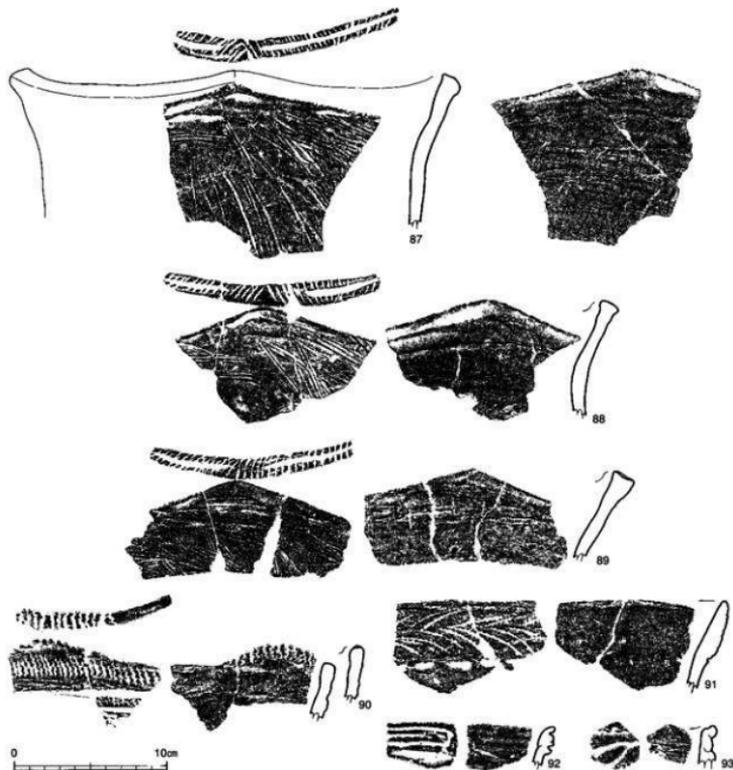
第41图 遗物実測図 (14) 2類土器⑩



第42图 遗址平面图 (15) 3 期土器



第43図 遺物実測図 (16) 4類土器①



第44図 遺物実測図 (17) 4類土器②

あり、底部近くではケズリが施されている部分もある。底部には圧痕が観察される。図版53②はそのモデリングである。

⑤ 2群5類 (第45図94～第46図109)

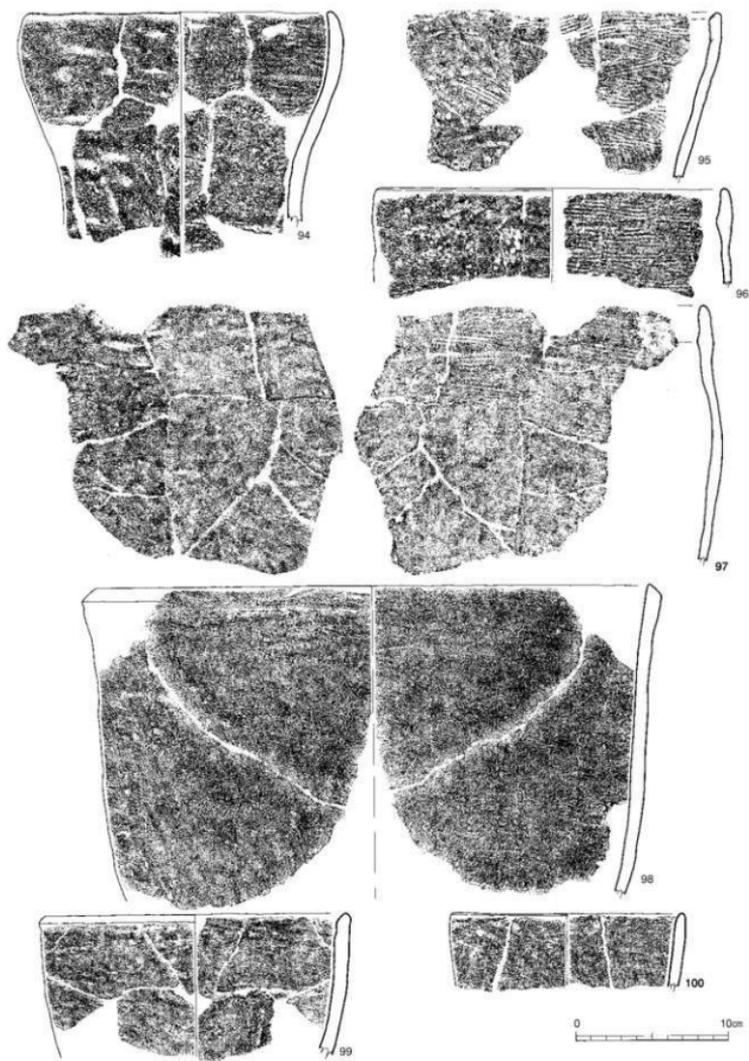
無文土器を一括した。325点が出土し、このうち16点を図化した。器形的な特徴から1類に分類できるものや2類に分類できるものがある。

⑥ 2群の胴部・底部片 (2群6類)

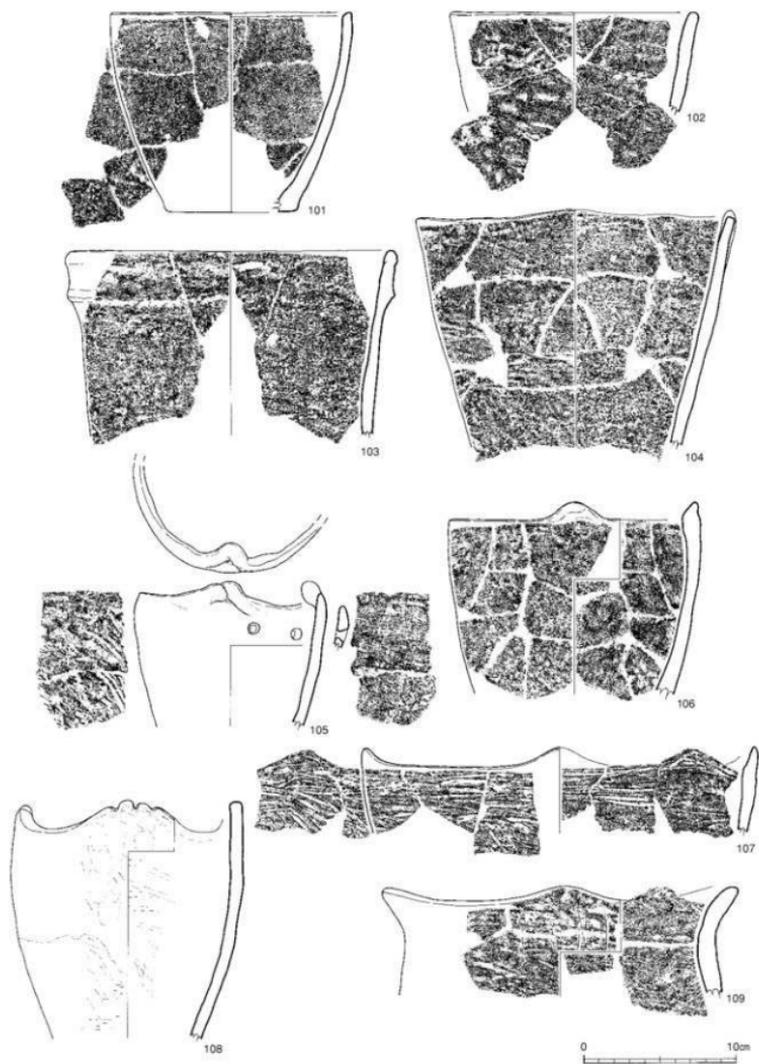
(第47図110～第50図165)

口縁部から胴部にかけての様相が不明なものを一括し

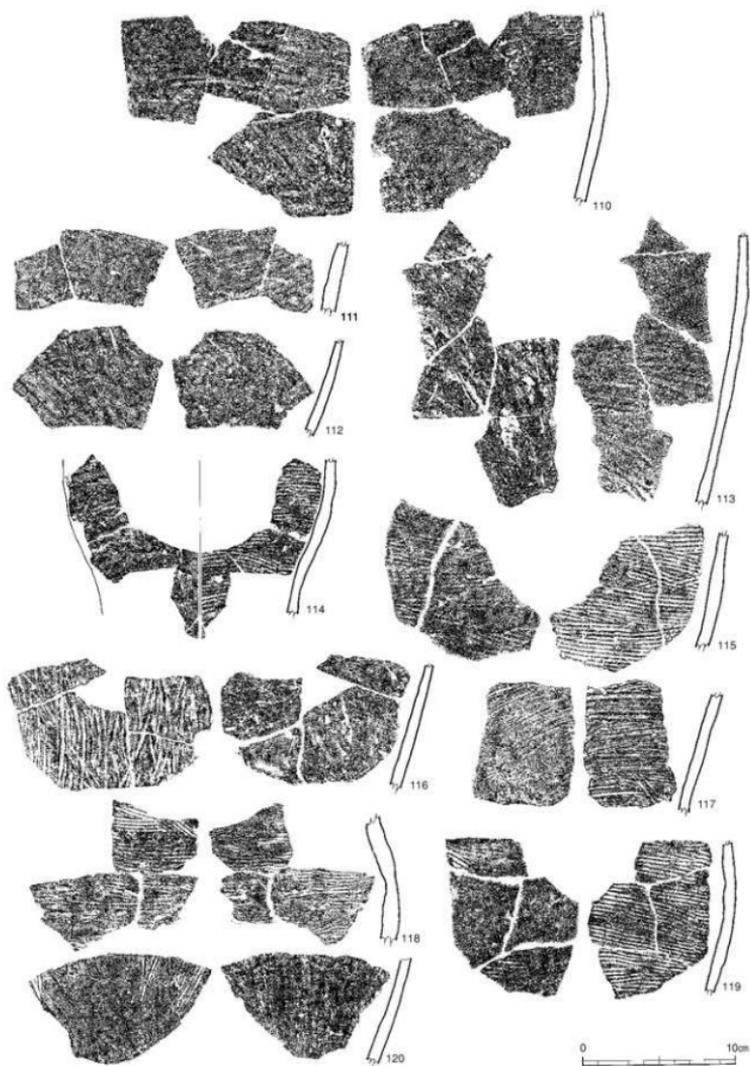
た。底部は、圧痕の有無により細分が可能である。圧痕が認められないものをa類とし、圧痕を有するものをb類と細分した。b類はさらに編み物の圧痕や木葉圧痕、堅果類圧痕と思われるものなどがある。161～164は脚状の底部である。161・162は沈線文が施文されており、2類土器の特徴に類似している。163・164は無文であるが、器形的な特徴からここに分類掲載した。なお、圧痕のモデリング陽像はまとめの中に掲載してある。



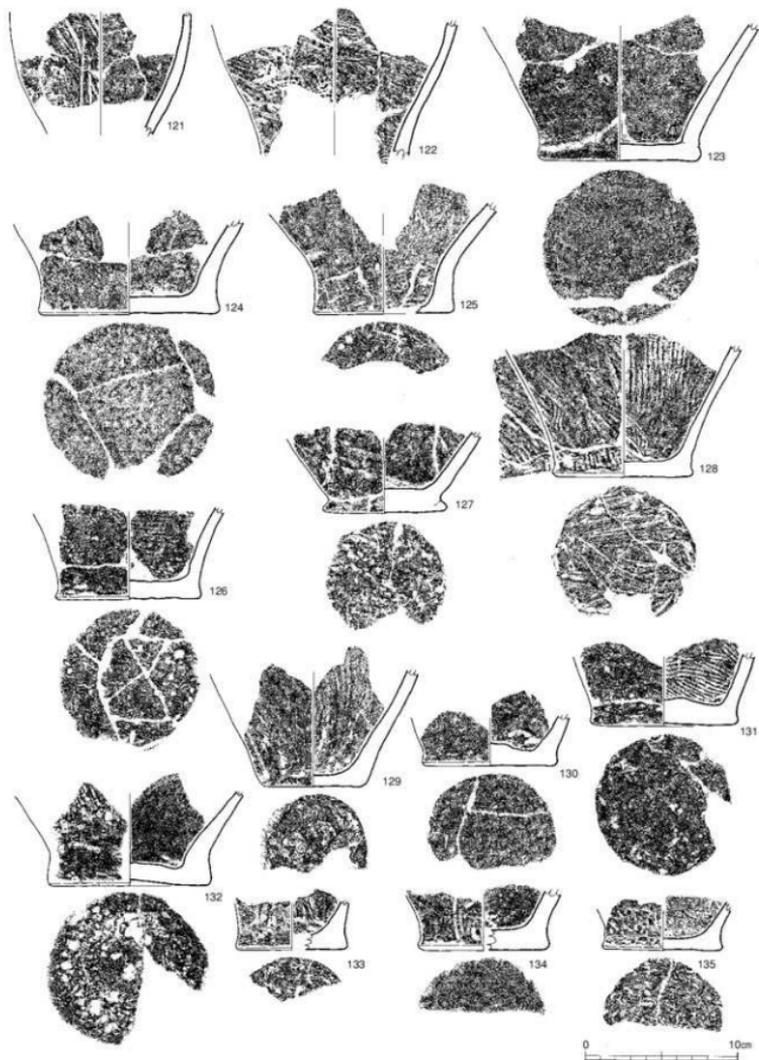
第45図 遺物実測図 (18) 5類土器①



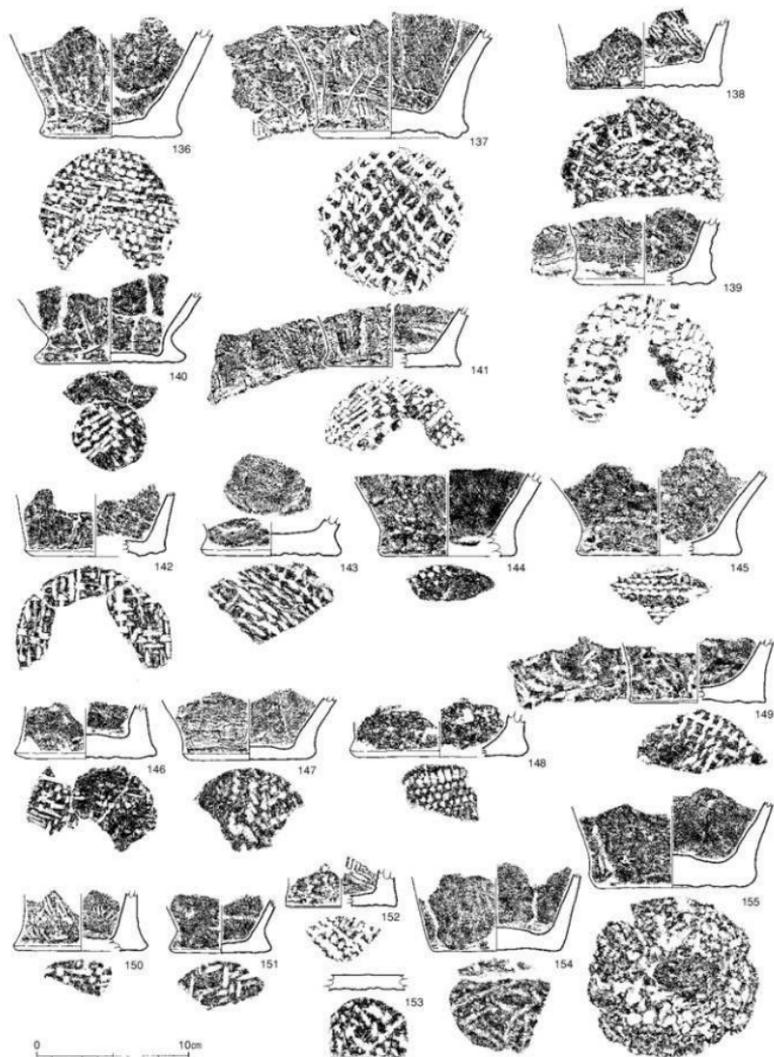
第46図 遺物実測図 (19) 5類土器②



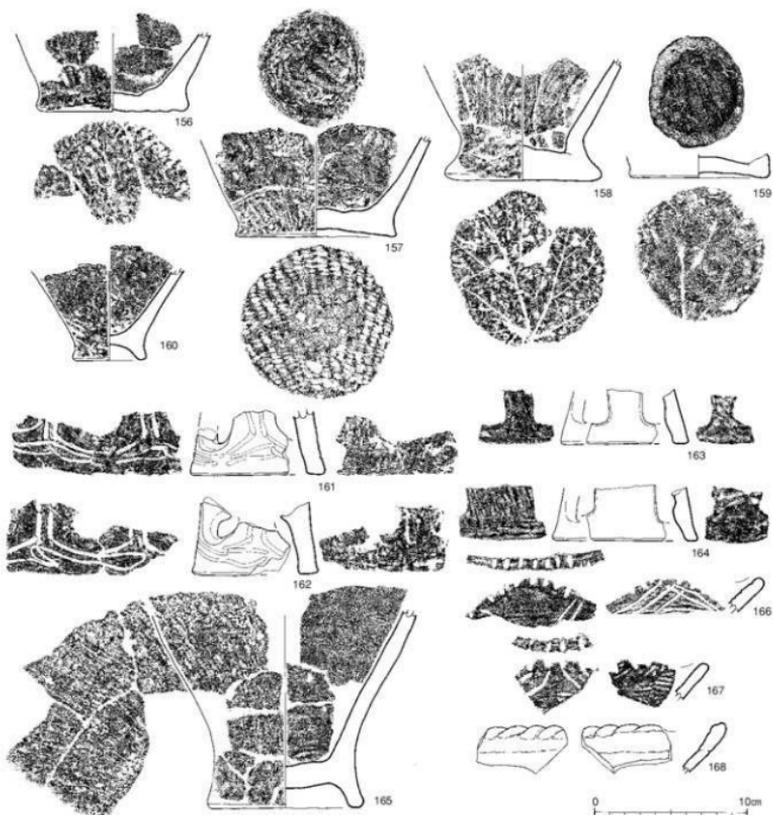
第47図 遺物実測図 (20) 6類土器①



第48図 遺物実測図 (21) 6類土器②



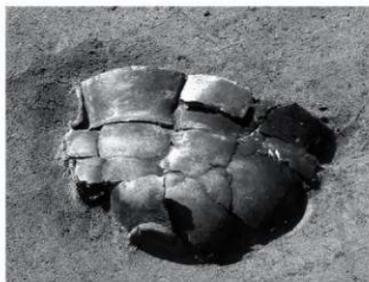
第49図 遺物実測図 (22) 6類土器③



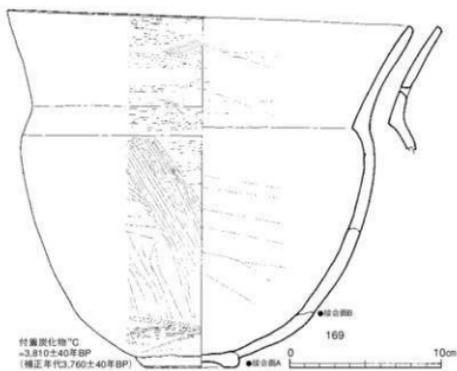
第50図 遺物実測図 (23) 6類土器④・7類土器



図版27 底面の様子



図版28 2群8類169の出土状況



第51図 遺物実測図 (24) 8類土器①



図版29 169



接合面Aの状況

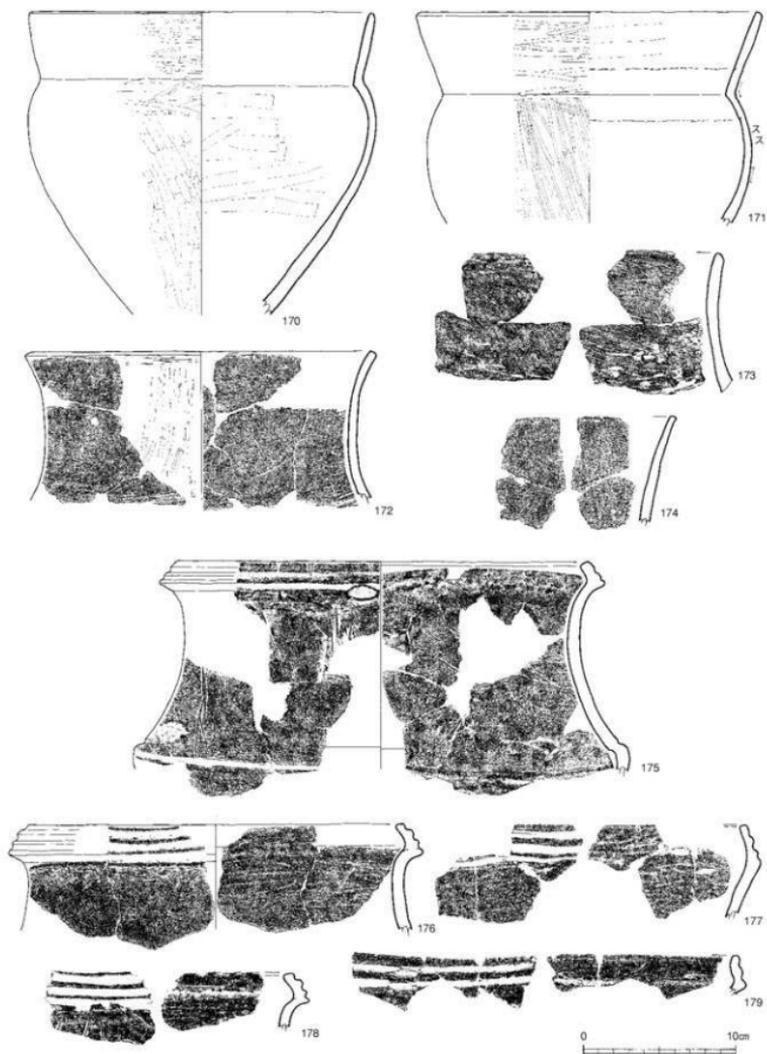


接合面Bの状況①

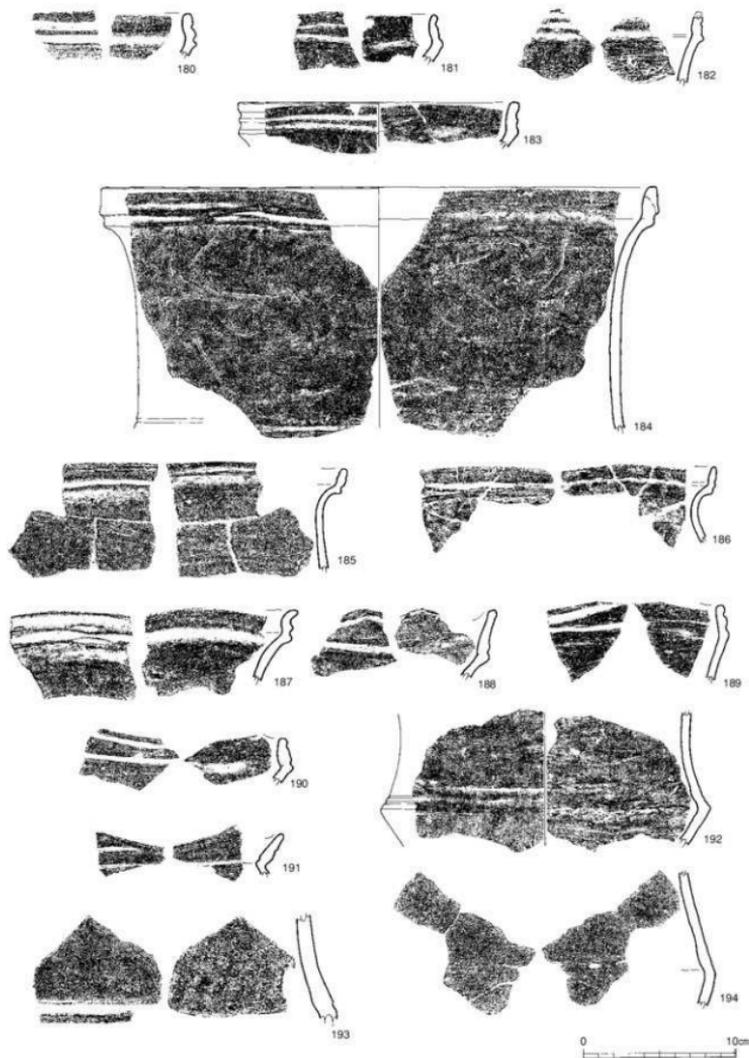


接合面Bの状況②

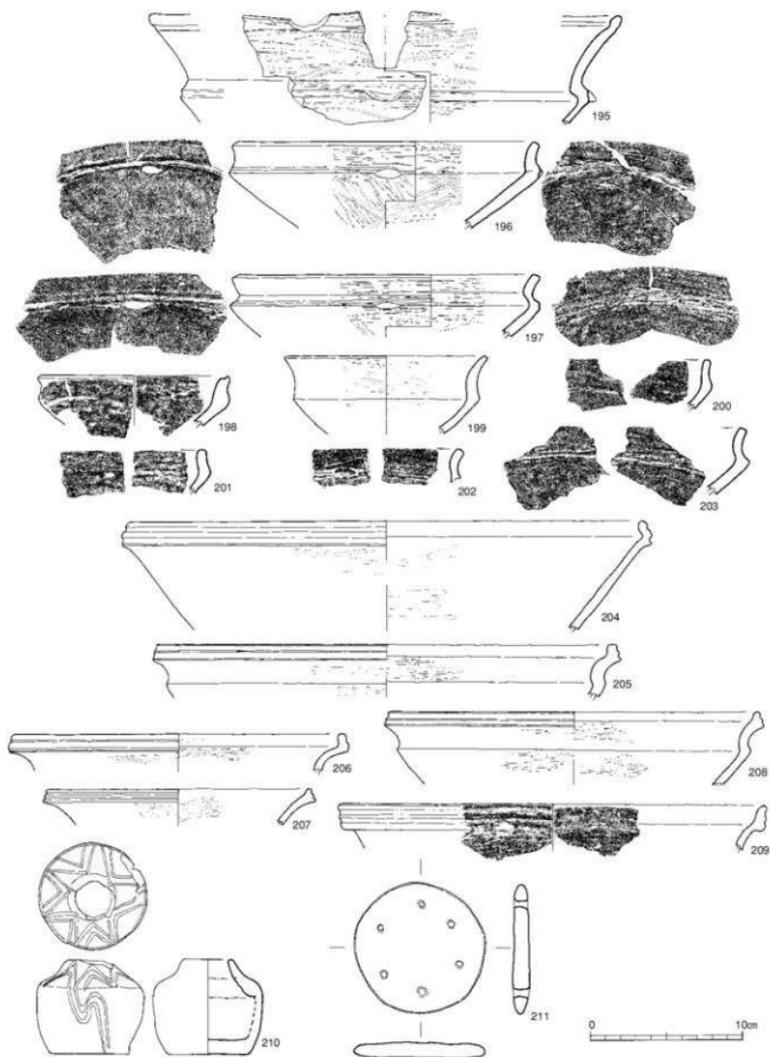
図版30 169の接合痕



第52図 遺物実測図 (25) 8類土器②・9類土器①



第53図 遺物実測図 (26) 9類土器②



第54図 遺物実測図 (27) 9類土器③・10類土器

⑦ 台付皿形土器（2群7類）第50図166～168）

上記分類以外の器形として台付皿形土器が4点認められた。このうち3点を図化した。分布域は少数出土のため明確ではない。168は、口縁部にねじり紐状の粘土紐を貼付している。

⑧ 後期終末の土器群（2群8類）（第51図169～第52図171）

器面に、ミガキなどの手法が用いられているもので、器形は、口縁部が直線的に外反し胴部が膨らむ。分布は、E～H-2～6区にかけて比較的まとまって出土しているが、169のように完形品単体でも出土している。3点が出土し、3点を図化した。

169は、図版28のように横倒しの状態で出土した。当初、掘り込み等を想定し中心軸を決めて半載した。しかし、掘り込み等は確認できなかった。この土器は、口径27cmで高さ23.5cmで、外面はナデ後ミガキが施され、内面は工具により調整されている。底部は、粘土紐を円形に貼り付け上げ底状を呈する。なお、図版30のように粘土の接合痕が明確に観察された。これらの粘土は、幅5～6cmを1つの帯として胴部において下から3段が観察できた。接合面Bの状況から、上の粘土は下の粘土の内側に被さって立ち上げられている様子が観察できる。口縁部には補修孔が見られ、その周辺が器面の中で最も脆弱である。また、スス付着が認められ、¹⁴C年代測定の結果表19のとおり約3,800年前という結果が示されている。170・171は口縁部が直線的に開き、胴部は球状に丸みを帯びている。

⑨ 2群9類（第52図172～第54図209）

器面にミガキが施されている点では8類と同様であるが、胴部が球状を呈しない点が大なる相違である。口縁部が屈曲せず、深鉢形を呈するものや、内側へ屈曲して沈線が施されるもので深鉢形を呈するもの、浅鉢形を呈するものに細分が可能である。86点が出土し、このうち38点を図化した。172～174は口縁部が屈曲ない。175は口縁部が屈曲し、胴部との境に凹点状の施文が認められる。195～209は口縁部が外反し胴部が屈曲する比較的浅い器高のものである。屈曲部には、指頭による凹点文施文のグループがある。

⑩ 小形土器及び土製品（2群10類）（第54図210・211）

小型土器と土製品を便宜上10類とした。210は、小型の壺形の器形を呈する。2本1組の沈線文を口縁部から肩部にかけて上面観星形状に施文されている。211は、円盤形土製品である。6つの穿孔が見られる。

(2) 石器

① 概要

IV層に出土する石器類は、石鏃、石鏃木製品、石匙、スクレイパー、二次加工剥片、石核、石錐、摺切状石器、磨製石斧、打製石斧、横刃形石器、礫器類、磨石・敲石類、石皿類が確認できた。器種の概要に関しては第3章を参照されたい。

IV層からは総点数で1359点の石器が出土している。ツールに関しては236点で全体の約31%を占めている。それぞれの石材の分布を見てみると、第55図の黒曜石I（上牛鼻産に類似）と黒曜石II（三船産に類似）に関してはT-Nの範囲に分布しているが、第56図の黒曜石IV（腰岳産に類似）に関してはH-6とG-6に剥片が集中して分布している。この範囲には高系の土器の集中が見られ県外産の土器・石器が分布しているという特徴が見られる。一方黒曜石Iと黒曜石IIが見られた範囲には指宿系の土器が見られ、同じ県内産という特徴がうかがえる。このことから、在地系の土器が作られるときには石材も在地のものを使用し、県外産の土器が入ってきたときにはそれと時を同じくして県外産の黒曜石が流通したのではないかと考えられる。なお、黒曜石V（針尾産に象徴される西北九州産系に類似）に関しては、G-6での剥片の集中は少なく、MからTにかけての幅広い分布が見られる。報告書掲載のツールを見てみると、黒曜石Iでは、石核が6点、石錐が3点である。黒曜石IIでは石核のみ1点である。黒曜石IIIでは、石錐のみ1点である。黒曜石IVでは、石錐が6点で、黒曜石Vでは、石錐が6点、二次加工剥片が3点、石核が2点、石匙が1点である。第56図のめう系に関しては、剥片が6点、スクレイパーが2点、石錐と二次加工剥片がそれぞれ1点となっており、QからWの範囲での分布が見られる。第57図の安山岩Iについては、剥片の集中がG-6で見られる。ツールに関しては、P-6からR-8に分布している。安山岩IIに関しては、剥片のみ1点である。安山岩IIIについては、石核が1点で剥片が7点である。安山岩IVについては、ツールがG-Hで4点、P-Wで11点である。報告書掲載のツールをみると、安山岩Iでは石匙、スクレイパー、礫器、磨製石斧、磨石・敲石類がそれぞれ1点である。安山岩IIIでは、石核が1点である。安山岩IVでは、磨石・敲石類が5点、石皿類が4点、磨製石斧が2点である。第58図の頁岩Iについては、P-7とR-8で剥片の集中が見られる。ツールに関しては、P-Uの範囲の分布が多い。頁岩IIについては、頁岩I同様P-7での剥片の集中が見られる。頁岩IIIについても、P-7での剥片の集中が見られる。このことから、頁岩に関してみるとP-7やR-8は石器製作場の可能性が高いと思われる。報告書掲載のツールを見ると、頁岩Iで

は、磨製石斧が2点、打製石斧、石核、礫器がそれぞれ1点である。頁岩Ⅱでは、磨製石斧が2点、石核、磨石・巖石類がそれぞれ1点である。頁岩Ⅲでは、磨製石斧が4点、礫器が1点である。頁岩Ⅴでは、磨製石斧が1点である。頁岩Ⅵでは、砥石が1点、頁岩Ⅶでは、磨製石斧が1点である。ツールの分布に因っては、G-6やH-6を中心とする範囲とMからWまでの幅広い範囲に特徴づけられるが、この2つの範囲に分布する器種には、石鏃、二次加工剥片、石核、磨製石斧、打製石斧、磨石・巖石類、石皿類がある。他の器種については、MからWまでの幅広い範囲での分布となっている。

② 石鏃 (第60図)

23点中の19点を図化した。

I類 (1～3)

1～3は基部に挟りが浅く入るもので、1は先端部付近に深い挟りを施しているが基部の剥離は細かい。2は小型で細かな剥離が施されている。3は基部の挟りが見られないもので、先端部が欠損しているが全体に大きめの剥離が目立つ。

II類 (4～10)

図化した全てのものが長身タイプである。

4～5は挟りが浅く入るものである。5は脚部が一部欠損しているが、厚みがあり両側縁に粗い鋸歯状の整形を施している。6～10は挟りが深く入るものである。7は先端部が尖り両側縁に鋸歯状の整形を施し基部にはU字状の挟りが入る。8・10は側縁部に細かな鋸歯状の整形が施され挟りも深い。

IV類 (11～13)

11 (I Aa類)は挟りが浅く入り肩部が上位に位置し肩部から脚部にかけて若干開くタイプである。側縁は内湾し肩部を強調しているとともに脚部の張り出しが少し見られる。背面には自然面を残している。12 (I Bb類)は先端から肩部、肩部から脚部への側縁が内湾し、肩部が鋭く尖るという形状をしたものである。肩部の張り出しを強調し基部には浅い挟りを施している。13 (III Cc類)は挟りがみられず脚部が下位に位置し、肩部から脚部にかけて狭まるものである。背面に大きな主要剥離面を残し、先端部のみ細かな調整剥離が行われている。

V類 (14～19)

未製品や欠損の大きなものを集めた。

14はめうを石材とし側縁部の細かな整形も見られるが厚みもあり製作途中のものと考えられる。15・19は主要剥離面を大きく残している。特に15は基部の挟り部分の整形が細かく行われているが、腹部左側縁部の剥離が行われていない。17は先端部が欠損しているが基部に挟りがない平基鏃で基部には細かな剥離が施されている。18は胴部から基部にかけての欠損が大きい、両側縁に

は鋸歯状の整形が施されている。

③ 石匙 (第61図)

3点中2点図化した。

I類 (20)

表面右部が不定形で、一見未製品に思われるが、表面右側縁には微細な剥離及び使用痕が確認できる。

IIa類 (21)

つまみ部に対して体部が小さい。欠損及び再加工による繰り返しにより、体部器形が小さくなった可能性がある。

④ スクレイバー (第61図)

9点中3点図化している

I類 (22)

表面観が尖頭状で横断面観は三角形状を呈する。丁寧な調整が施される右側縁部が刃部と想定される。右側縁部の横断面観は45度程度に傾斜し搔器と考えられる。

II類 (23)

表面観が半月状で、円弧部に鋸歯状の丁寧な刃部調整を施す。最大長1.5cmと小さい。

V類 (24)

部分的に微細な調整痕が確認できるが、器形は不定形で未製品の可能性もある。

⑤ 二次加工剥片 (第61図：25～27)

40点中3点図化している。

25は左側縁部に微細な調整痕を有し、削器の可能性はある。26は左側縁部に微細な使用痕が確認できる。27は裏面左側縁部に細かな調整痕を有し、横断面観が45度程度の傾斜をもつことから、搔器の可能性はある。

⑥ 石核 (第61図・第62図)

56点中12点図化している。

Ib類 (28～30)

28・29は礫皮面を打面とし、30は分割により打面を形成している。

IIa類 (31・32)

31は端部を部分的に整形し踵部を作出したドリルの可能性もある。32は右側面にも剥離痕が見られるが、表面の剥離を中心的に行っていることから、本類に含めた。

IIb類 (33～35)

いずれにも、部分的な打面転移が見られる。

IIc類 (36)

IIa類に近似するが、下面に打面転移による剥離が見られる。

Ⅱb類 (37)

やや大振りの素材である。周辺から中心に向かって削いでいるが、部分的には打面転移が見られる。

Ⅱa類 (38)

最大長12.5cm程度の大型を素材とする。左上側縁部の細かな剥離痕は刃部相当で、礫器の可能性も考えられる。

Ⅱb類 (39)

長軸長7cm程度の比較的大きめの素材である。下面の剥離痕はいずれも小さく、剥片の採取を目的とする可能性は少ないと思われる。

⑦ 擦切状石器 (第63図：40)

4点中1点図化している。

擦切状石器の欠損品である。下側縁の刃部周辺は磨面が顕著であり、縦位や斜位の擦痕が確認できる。石材はガラス質の鉱物を多量に含む砂岩である。

⑧ 磨製石斧 (第63図)

28点中13点図化している。大型のⅠ類は硬質頁岩が中心で、Ⅱ・Ⅲ類の小型資料は剥離性の強い頁岩で占められ、用途に応じた石材選定がうかがえる。

Ⅰ類 (41～48)

本類は基部形態において、刃状の基部をもつ43と刃部・基部の形態分化が明瞭な他資料に分けられる。基端部が平基の41・44と円基(尖基)のその他資料という分け方も可能である。41・42は器面中央部より若干刃部寄りに3cm幅の敲打痕が帯状にめぐり、着柄痕と考えうる。なお、41～43の3点とも、刃部見通しで刃縁ラインが中央軸上に位置し、おおむね幅のない船刃である。44・46は器厚がさほど厚くなく側面の断面が隅丸形状であること、加えて46は刃部見通しの刃縁ラインが表面側に湾曲することから、定格式石斧と想定される。44は刃部折損後、剥離面を生かして打製石斧等に再利用した可能性もある。

Ⅱ類 (49～52)

いずれも側面部横断面に「コ」の字状の整形が散見でき片刃であることから、定格式石斧に分類できる。体部上部が縮まり基部に至り、特に50・51は楕形に近似し、着柄を意図した整形と考えられる。51・52は着柄挟り部と推定される側縁の稜に磨滅と稜に直交する微細な削痕が確認できる。52は頁岩の節理面を生かして、器厚5mm未満と極薄に仕上げている。

Ⅲ類 (53)

長軸長15cm程度と細長断面が樽型の定格式を呈し、器面調整が極めて丁寧である。側縁部等に剥離面や着柄痕が確認できないこと、基部に欠損があることから、ノミのような使用法が推定される。

⑨ 打製石斧 (第63図)

5点中1点図化している。

Ⅰ類 (54)

挟り幅6cm弱で最大幅8cm弱の扁平幅広の器形である。刃部は欠損後継継使用されており、使用痕が顕著に残される。

⑩ 礫器類 (第63図・第64図)

7点中6点図化している。

Ⅰ類 (55)

55は扁平な柳葉形を呈しているが、基部周辺には自然面が大きく残存し未整形である。刃部に明瞭な使用痕は確認できず、尖頭状石器の未製品の可能性もある。

Ⅱ類 (56)

表面右部には磨面及び削痕が見られ、元の素材は磨製の欠損品と思われる。左側縁部には基部調整が、右側縁部には刃部調整がなされている。

Ⅲ類 (57)

三角形状(楕形)を呈し、基部には刃潰しを施してある。

V類 (58～60)

58は下及び右側縁部を中心に調整を施す。明瞭な基部調整が見られず、上・左側縁のエッジは比較的鋭い。59は砂岩製の扁平石材を利用してあり、扁平打製石斧の欠損品の可能性もある。60の左側縁部の刃部には使用による磨滅が見られ、基部側の刃潰しとあわせて、掘り具の可能性が考えられる。

⑪ 磨石・敲石類 (第64図・第65図)

49点中11点図化している。なお、磨製石斧等の敲道具への転用品も用途は敲石と同様と捉え、本類に含めた。

Ⅰa類 (61)

長楕円形を呈するが、器厚が2cm強と比較的厚肉なため本類に含めた。

Ⅰb類 (62～64)

62の敲打痕は浅めである。63・64は表裏面中央部に敲打集中による明瞭な凹みを有する。64の裏面には赤色顔料が付着している。

Ⅱa類 (65～68)

65の側面の敲打痕は浅めである。66は下側面及び裏面中央部に剥離痕をもつ。67の裏面中央部の敲打痕は深いピット状を呈し、側面部にも著しい敲打痕が見られる。68の表裏面の敲打痕は浅めで、明瞭な磨面をもつ。側面稜線に変化を与える程度に敲打使用が顕著である。

Ⅲ類 (69～71)

69は磨製石斧の刃部欠損に伴う転用品で、長軸長は15cm弱である。磨製石斧完成品中、最短の長軸長は9cm程であることから、再加工・再利用可能な欠損品をあえて敲石として利用していることになる。70は本遺跡出土の

砥石と同質の砂岩を素材とする。裏面に磨面を有し、棒状砥石の可能性もある。71は敲打痕を確認できないが、棒状を呈する器形上本類に含めた。下側面の磨面は砥面とも考えられ、棒状砥石の可能性もある。

⑫ 石皿 (第65図～第67図：72～78)

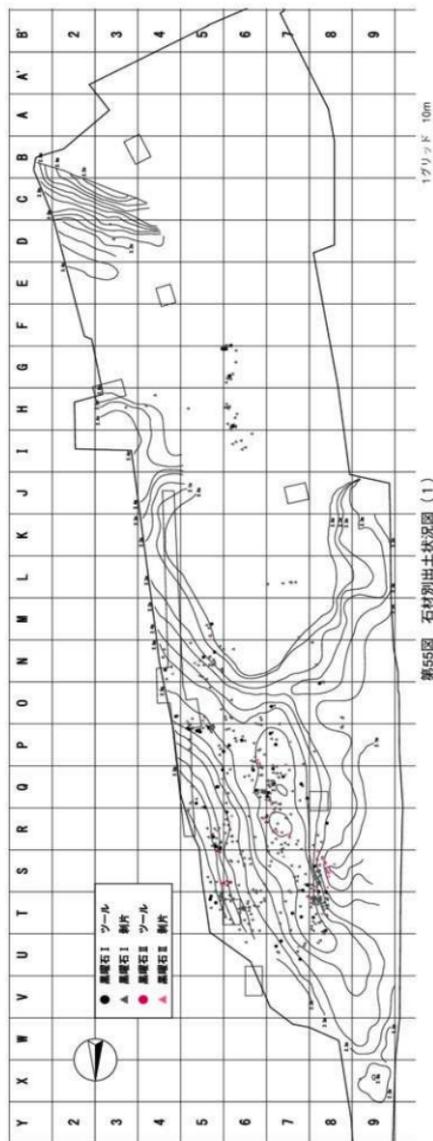
10点中7点図化している。

72は稜線が磨滅していることから、本状態で使用されたものと思われる。顕著な凹みや一定方向の削痕は確認できないが、縦横無尽に走る削痕や磨面が顕著であることから、砥石の機能を有していた可能性がある。73には明瞭な削痕等は確認できないが、表面に磨面を有する。74は表面中央部にかけて凹みを呈する。75は極平面的である。76・77は全体的に被熱を受け、特に裏面には黒炭が顕著に残る。78は石臼状の器形を有し、凹みが顕著である。

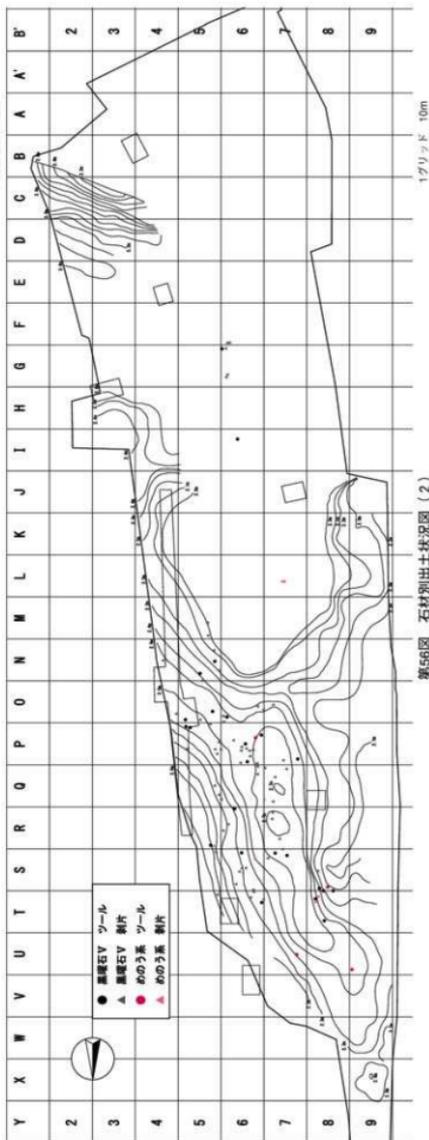
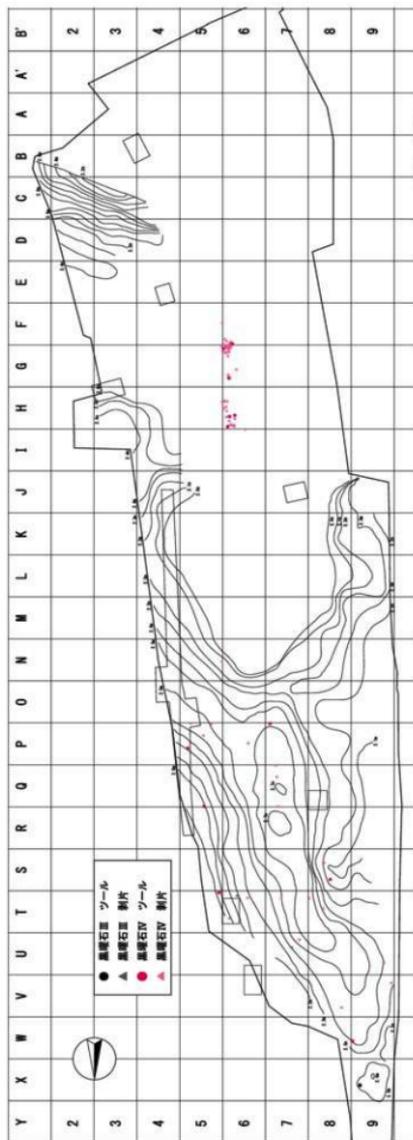
⑬ 砥石 (第67図：79)

2点中1点図化している。

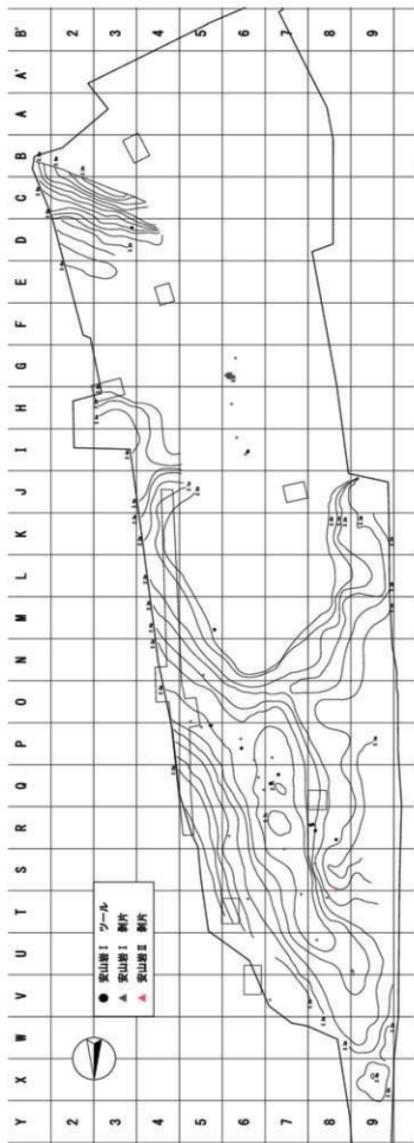
表裏面に明瞭な磨面及び凹みを有する。裏面には同一方向に斜走る明瞭な擦痕が残される。ややホルンフェルス化した砂岩質を素材とする。



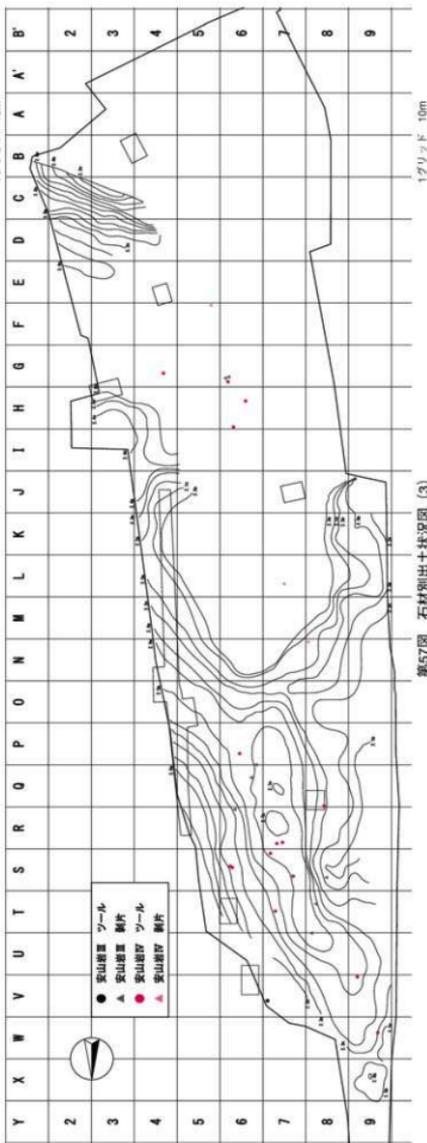
第55図 石材別出土状況図 (1)



第56図 石材別出土状況図(2)

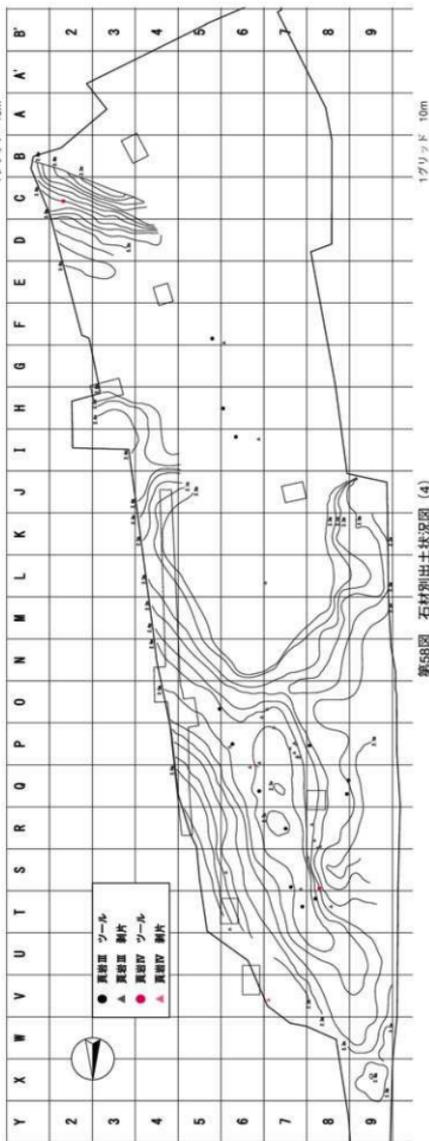
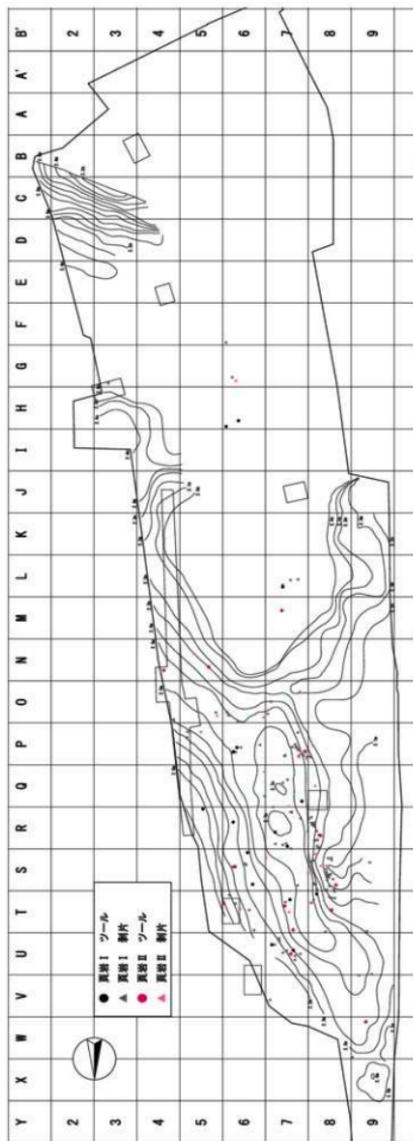


1グリッド 10m

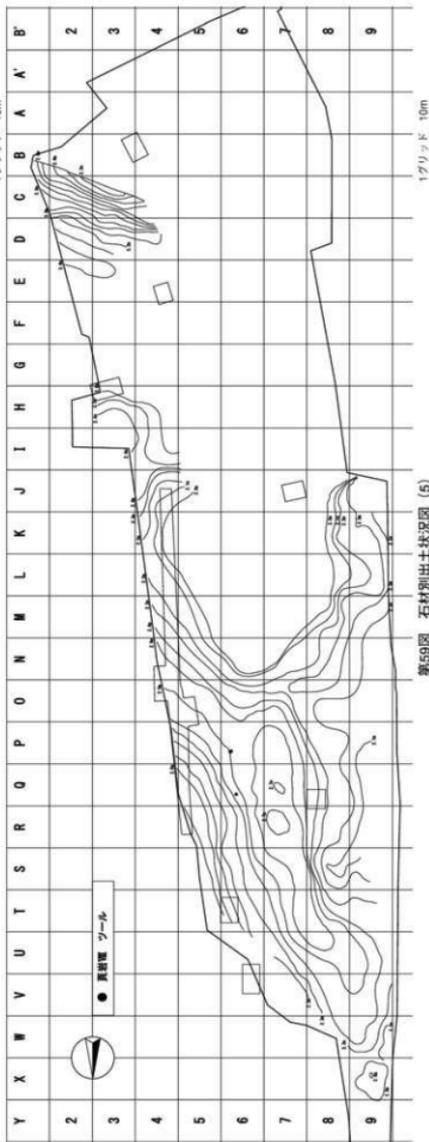
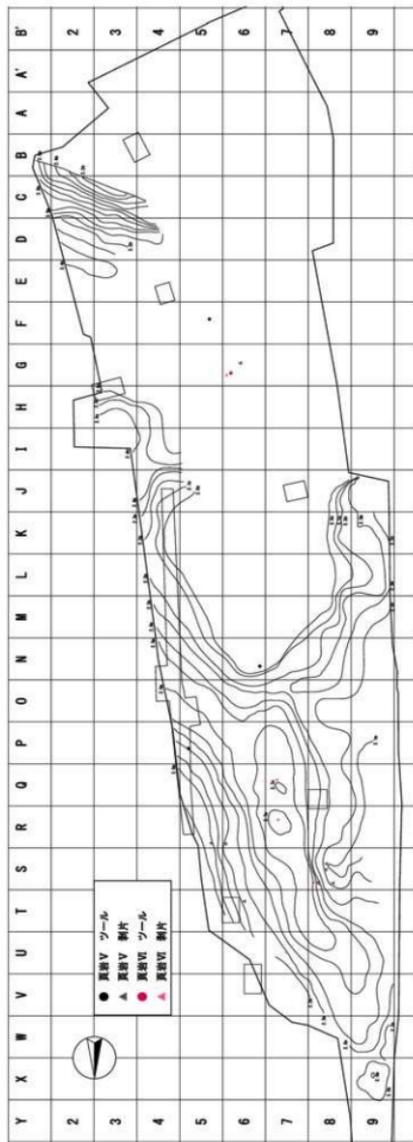


1グリッド 10m

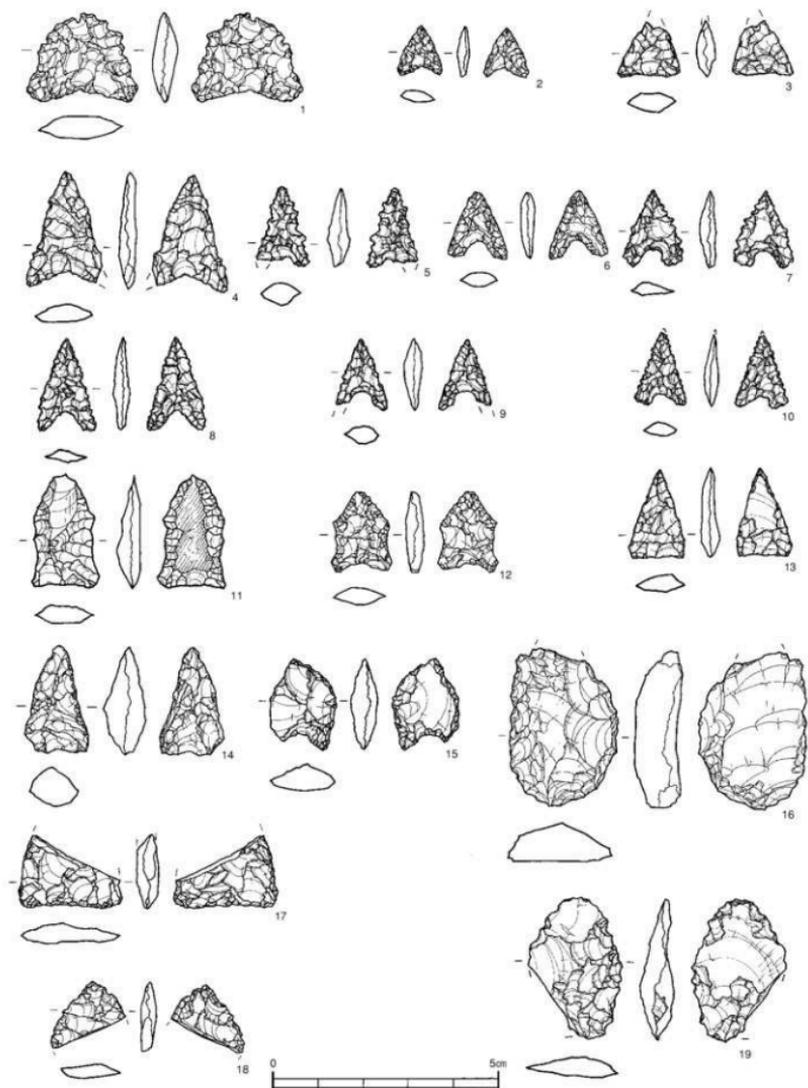
第57図 石材別出土状況図 (3)



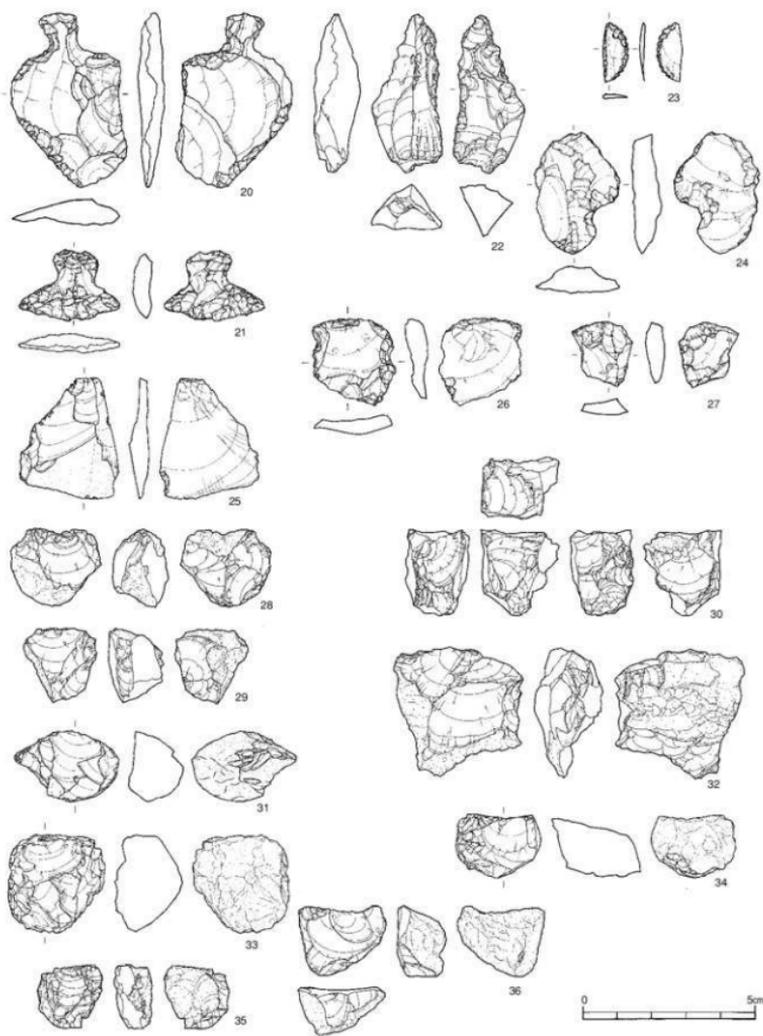
第58図 石材別出土状況図 (4)



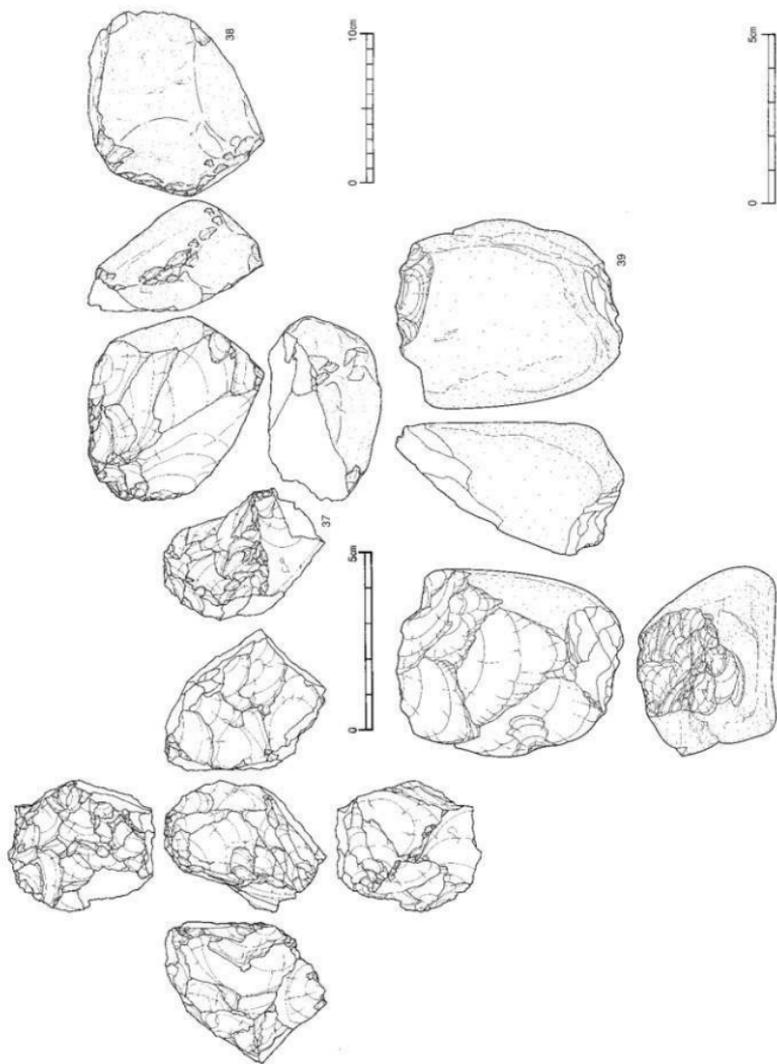
第59図 石材別出土状況図 (5)



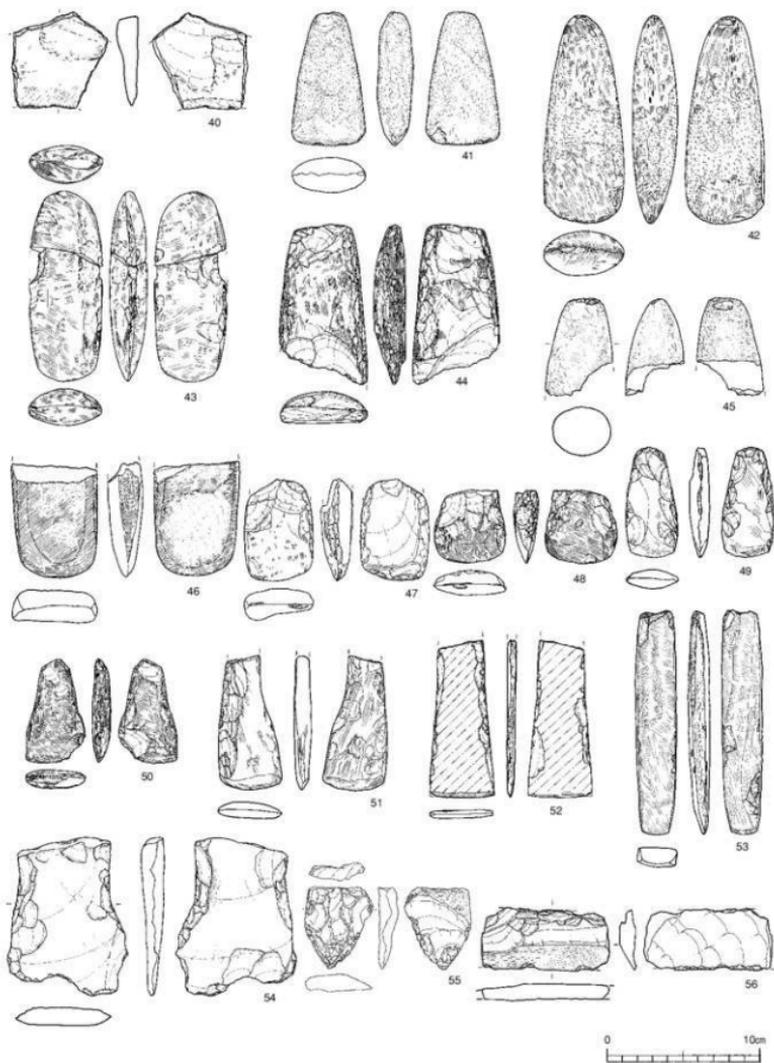
第60图 石器实测图(1)



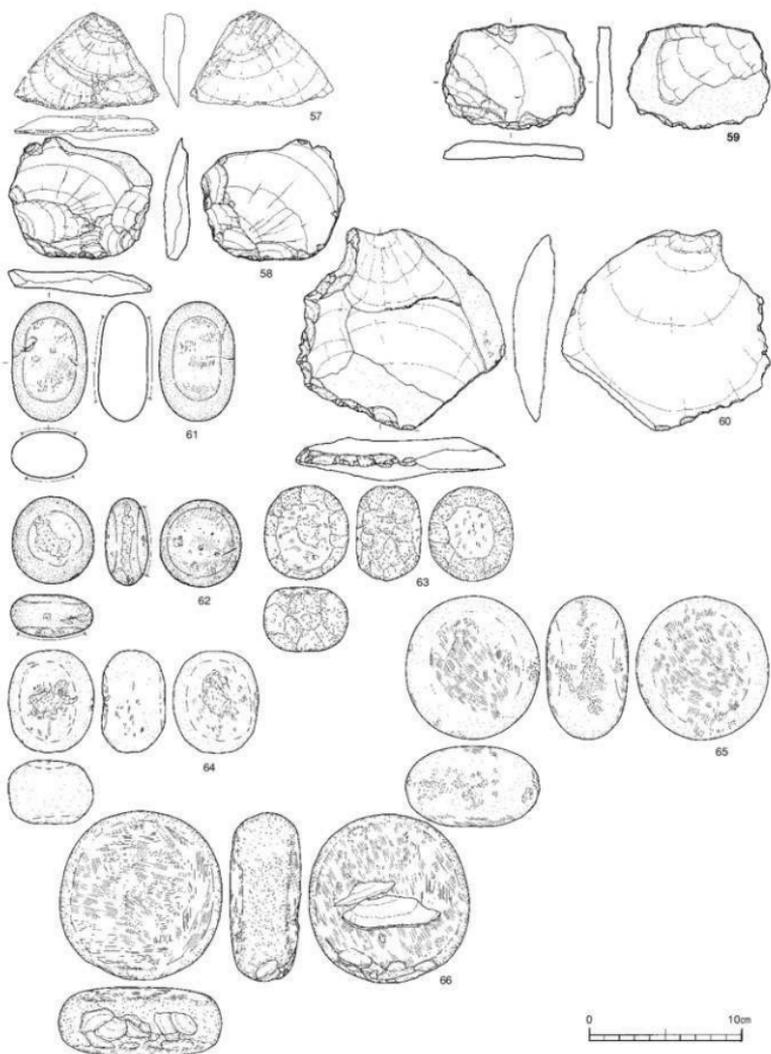
第61图 石器实测图(2)



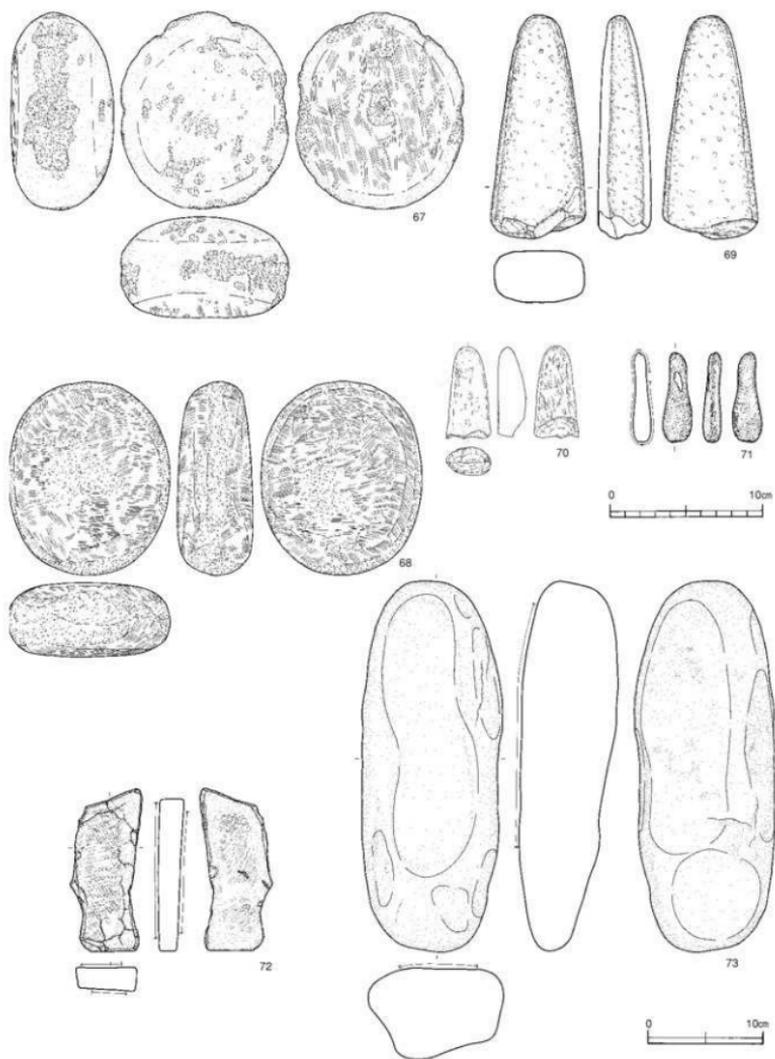
第62図 石器実測図(3)



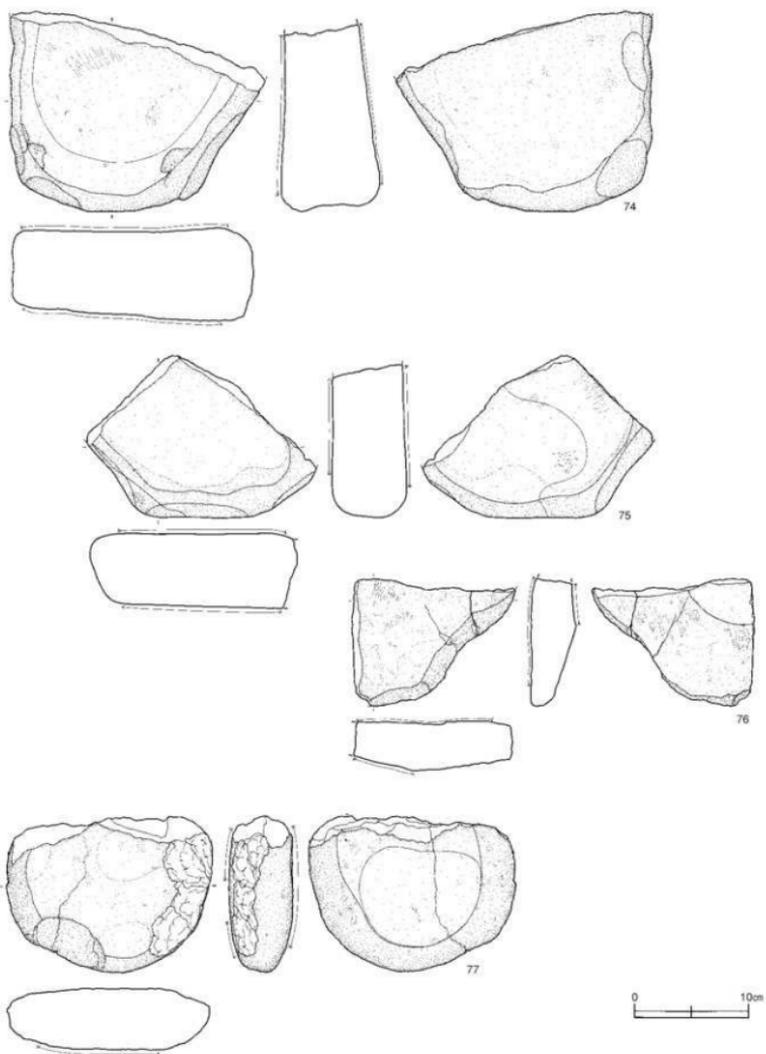
第63图 石器实测图(4)



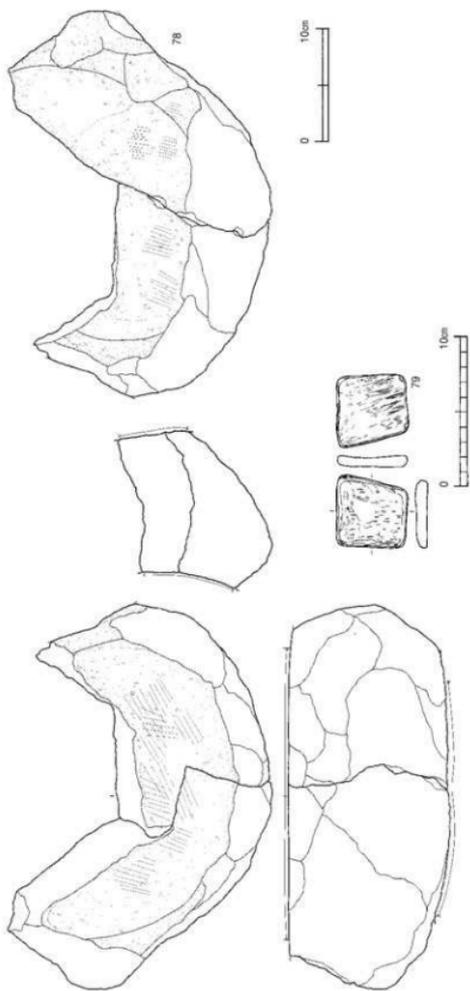
第64图 石器实测图(5)



第65图 石器实测图(6)



第66图 石器实测图(7)



第67图 石器类测图(8)

第5章 縄文時代晩期の調査

第1節 概要

縄文時代晩期の調査は、Ⅲa～Ⅲb層が該当する。

晩期該当のⅢa～Ⅲb層は、確認調査14TV層の上下に該当し、既存の土器型式で言うと入缶式土器から刻目突帯文が調査区のはほぼ全域から出土している。この中でも、調査区別に言うと、G・H・I区からの出土量が圧倒的に多い。調査区には、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけてのテフラである開間岳噴出起源の灰ゴロが部分的に確認されている。これを鍵として、調査中は灰ゴロより上位をⅢa層、下をⅢb層として遺物の取り上げや遺構の検出等を行ってきた。しかしながら、場所によっては火山灰堆積は希薄であり、また見られない場所もあったため、整理作業では顕微鏡分析を中心に行い、再度層の検討を行っていった。この結果、灰ゴロを挟んで土器型式が変化するような傾向は掴めなかった。



図版31 遺物の出土状況

第2節 遺構

(1) 集石

1基が検出された。5個の礫で構成されている小型のものであるが、このうち2点は磨石である。

(2) 土坑

11基が検出された。このうち10基が1m以内やその前後のもので、残りの1基は4mを超える大型のものであった。遺構内からは、11号でまとまった遺物の出土が認められた。遺物出土状況は、第76図のとおりである。粗製土器3類を中心に出土している。主な出土遺物を第78図3から第82図49にかけて掲載した。3～34は粗製土器である。包含層分類の2類に属するものが多い。5は口縁部がやや直立気味である。12・13は口縁部がやや内傾する。12には補修孔が穿たれている。14～20は胴部片である。胴部が強く屈曲するものが多い。21～23は小型の土器である。24～34は底部片である。24は底部内外面が摩滅しており極端に器壁が薄くなっている。35・36は

半粗半精製土器である。36の内面にはコゲが付着している。37～46は精製土器である。37～39は口縁部が玉縁状を呈し、胴部は強く屈曲する特徴を有する。40～42は口縁部から頸部までが短く、胴部が膨らんで口縁部径よりも胴部径のほうが大きくなっている。47・48は石弁の再加工品かと思われる。49は石皿である。両面共に顕著な磨りが確認できる。

(3) ビット

ビットは、調査区全域から111基が検出された。これらを組み合わせた建物跡の復元はできず、建物等が存在していたのかについては解明することができなかった。遺構内遺物もほとんど認められない。

(4) 焼土

焼土は、調査区全域から16基が検出された。柱穴と同様、建物等と組み合わせるのか単体で完結するものなのか明確にすることができなかった。また、焼土内からは遺物は出土していない。

第3節 遺物

(1) 土器・土製品

①土器分類の概要

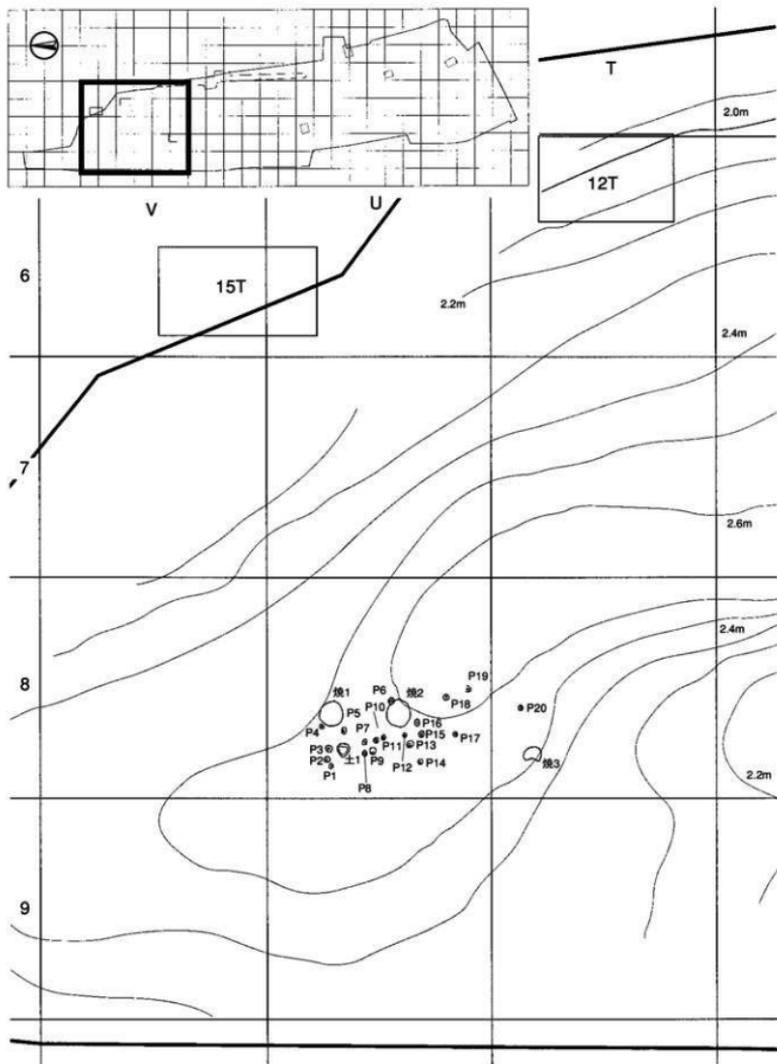
土器は、先述したようにH区を中心に調査区全域で出土している。これらを概観したところ、器形は多くのバリエーションが存在しており、特に口縁部においては顕著に見られる。このため、器形的に特徴のある壺形土器を除いた器形では、器面調整による分類を優先させた。よって、特に深鉢形や鉢形などは「粗製土器」、「半粗半精製土器」、「精製土器」に3分類した。その結果、大まかに粗製土器には深鉢形、鉢形が、半粗半精製土器には、鉢形と浅鉢形が、精製土器には深鉢形と浅鉢形が分類された。この観点で作成した遺物出土状況が第83図から第90図になる。さらに、それぞれは器形などの特徴から細分される。これらについては各項目の中で説明している。なお、便宜上粗製をA、半粗半精製をB、精製をC、壺形をDとしていきたい。

②粗製土器（3群A類）

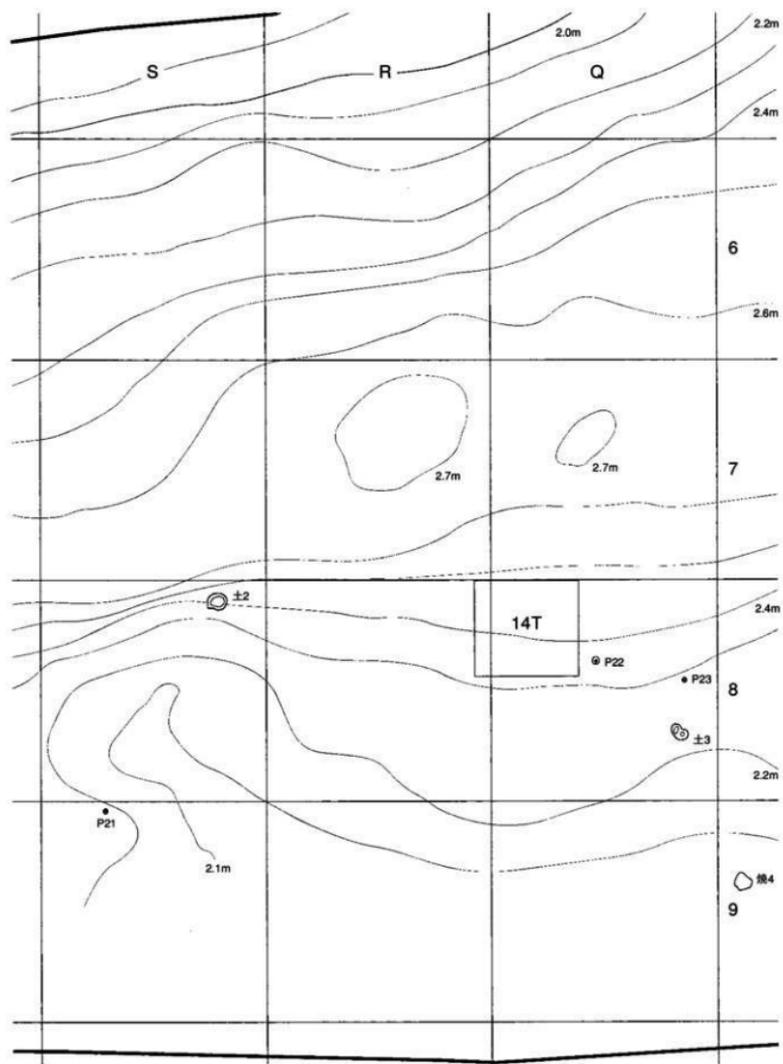
器面内外面共に、貝殻条痕やナデなどの調整を施すものを一括して粗製土器として位置づけた。接合作業を経て28,144点が出土し、このうち400点を図化した。

A1類（第108図1～第111図31）

口縁部はわずかに肥厚して外に開き、下位に段を有する。頸部ではしまり、胴部で膨らむ器形を呈する。文様は、口縁部に沈線文をめぐらせるものと無文のものがある。164点が出土し31点を図化した。8は波状口縁を呈し、波頂部へ向かうように沈線が施文されている。17

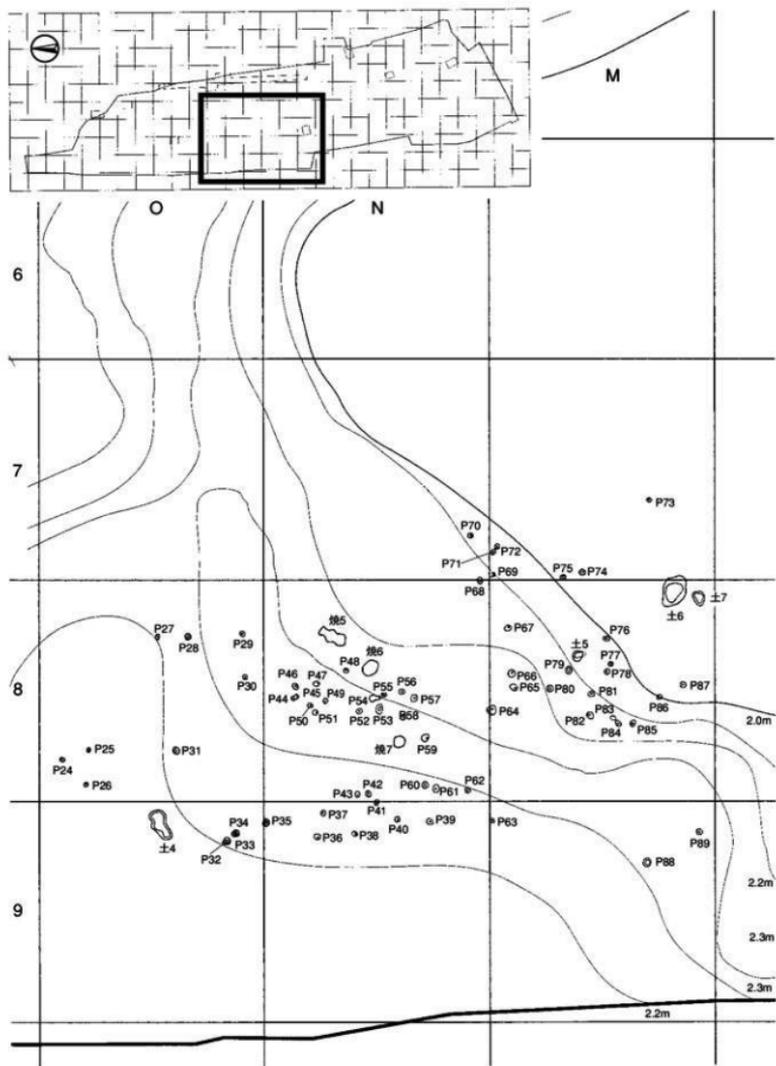


第68図 遺構配置図(1)

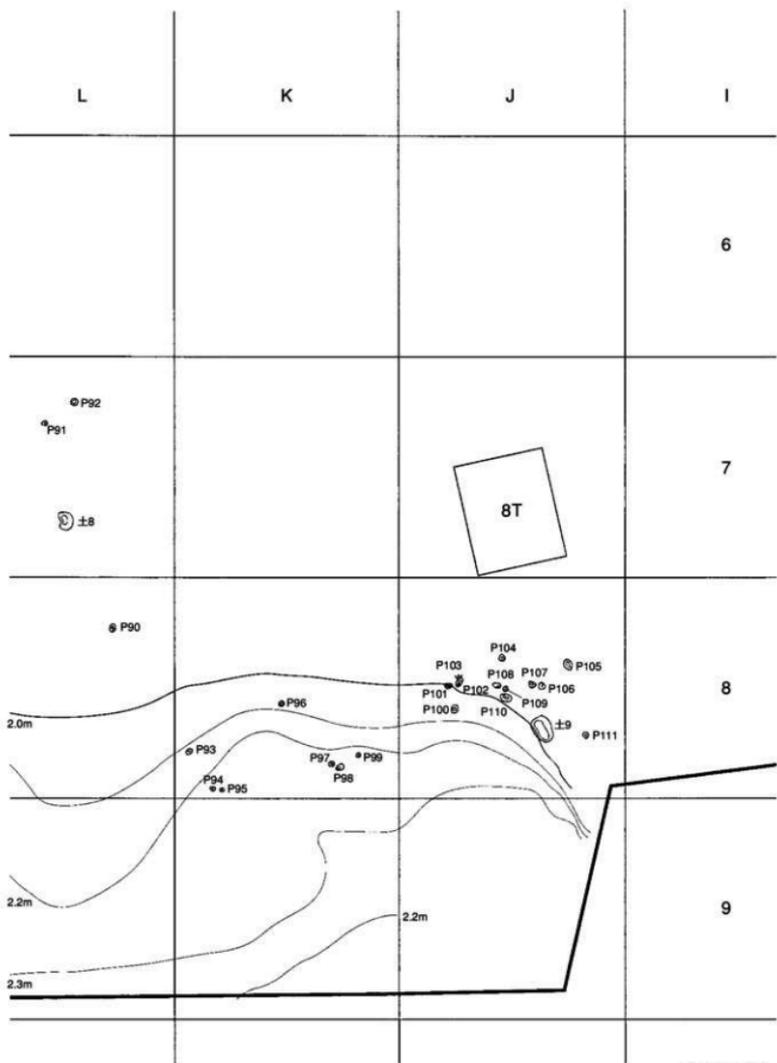


※1グリッド10m

第69図 遺構配置図 (2)

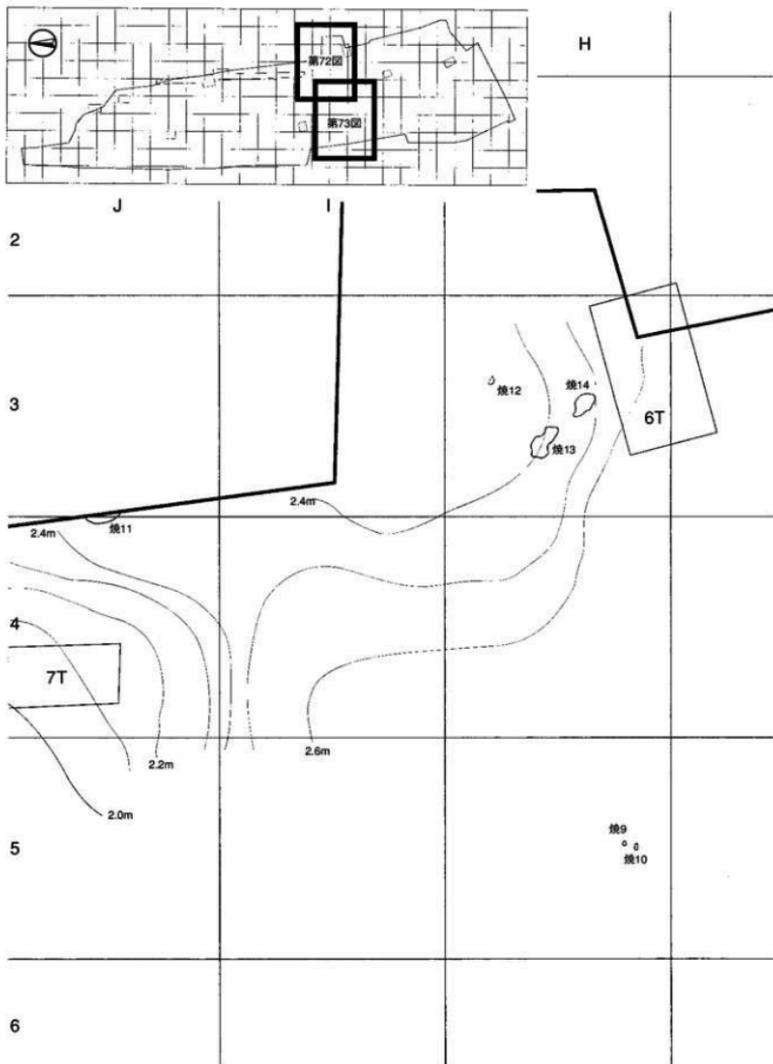


第70図 遺構配置図 (3)

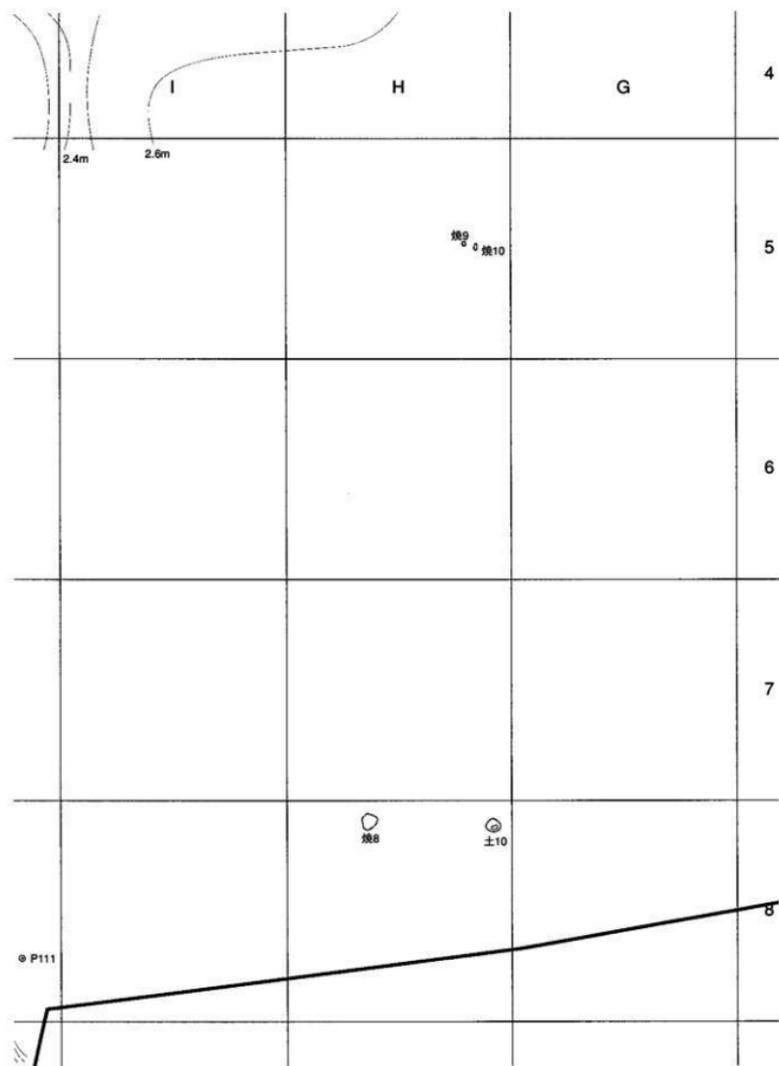


第71図 遺構配置図(4)

※1グリッド10m

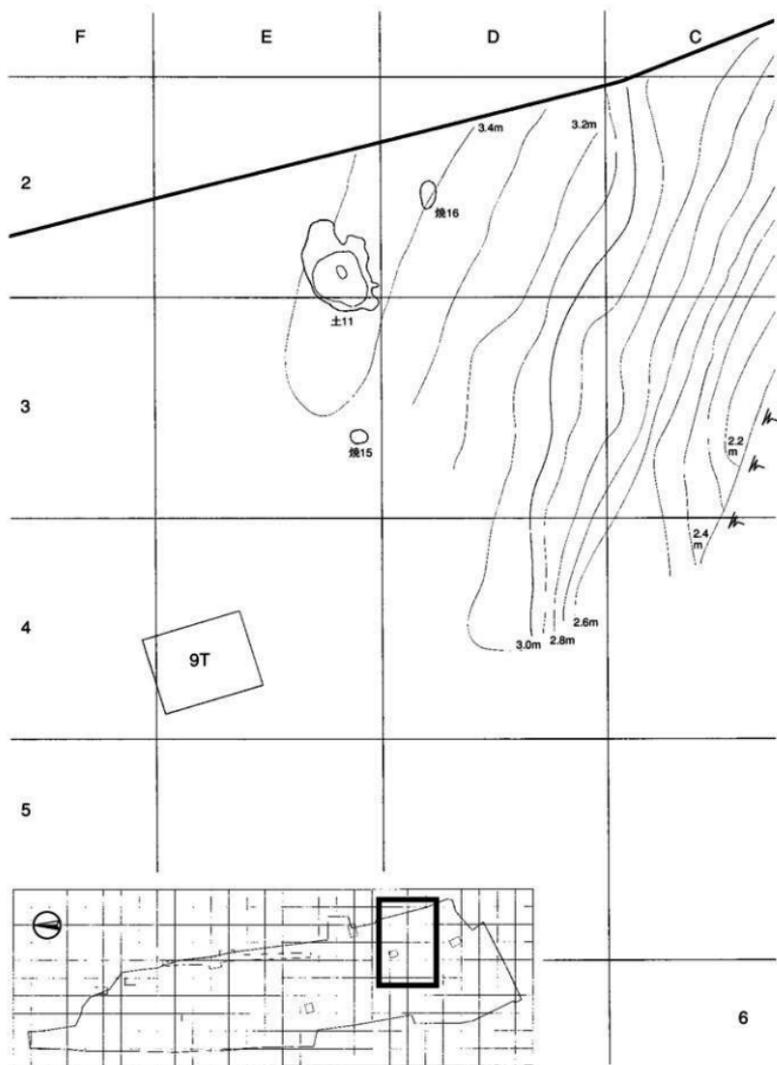


第72区 遺構配置図 (5)

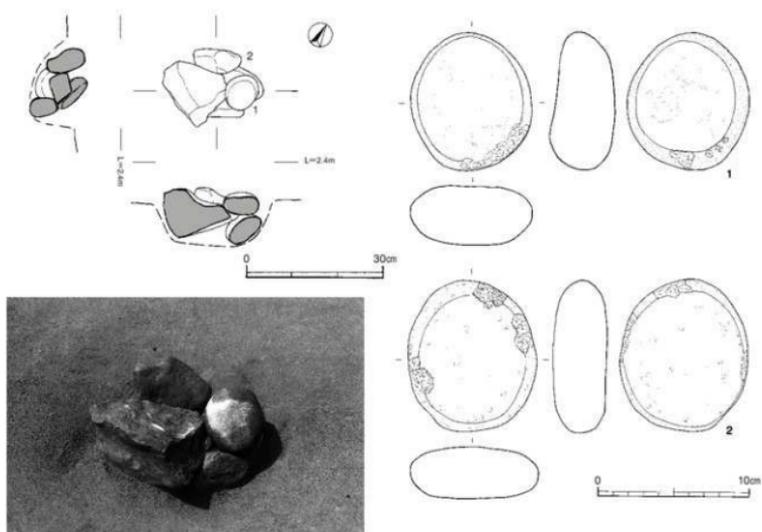


第73図 遺構配置図 (6)

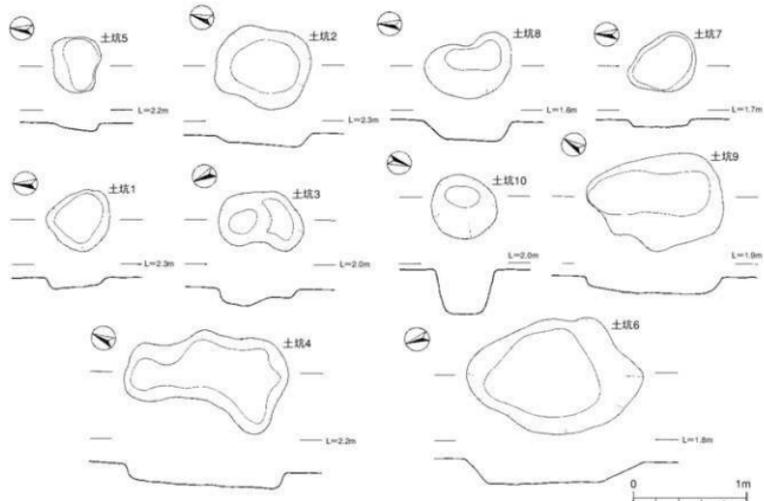
※1グリッド10m



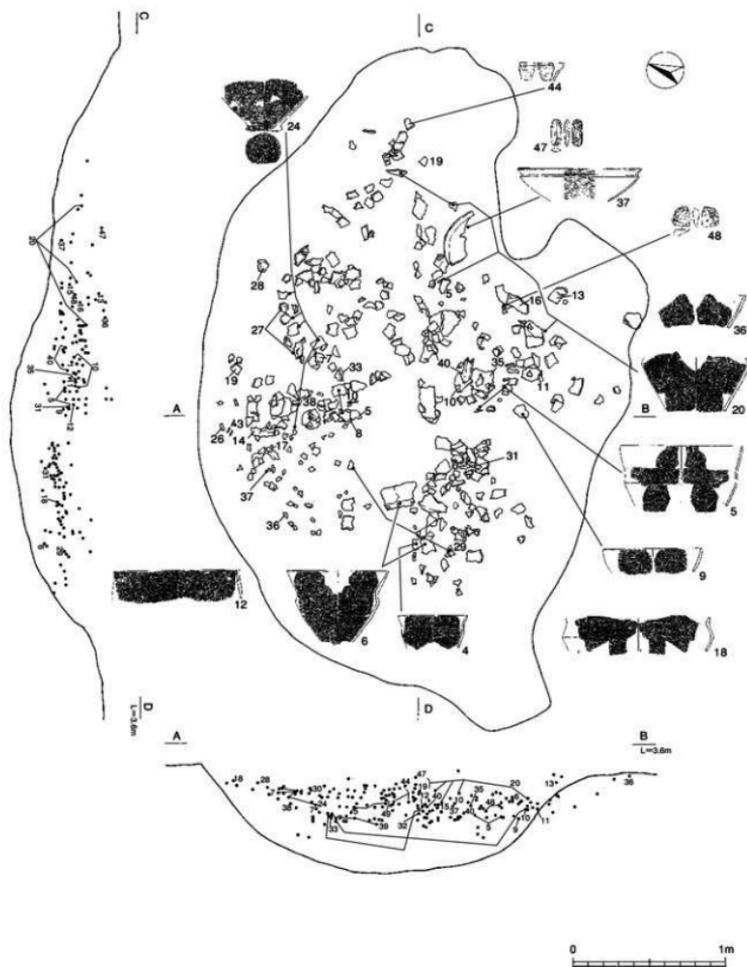
第74図 遺構配置図 (7)



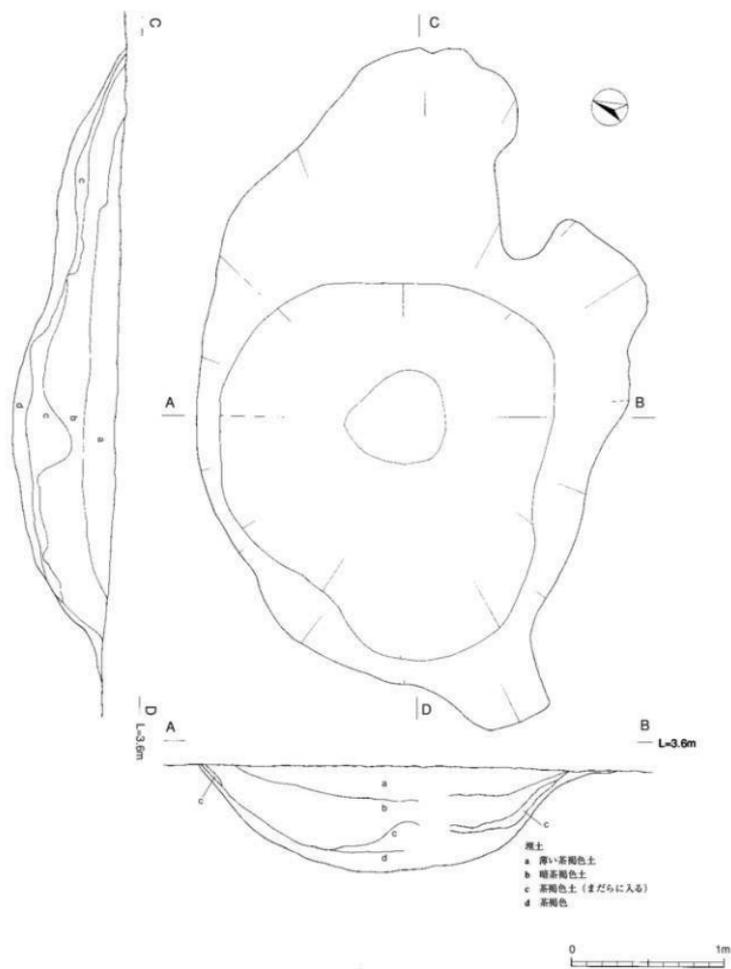
図版32 集石検出状況



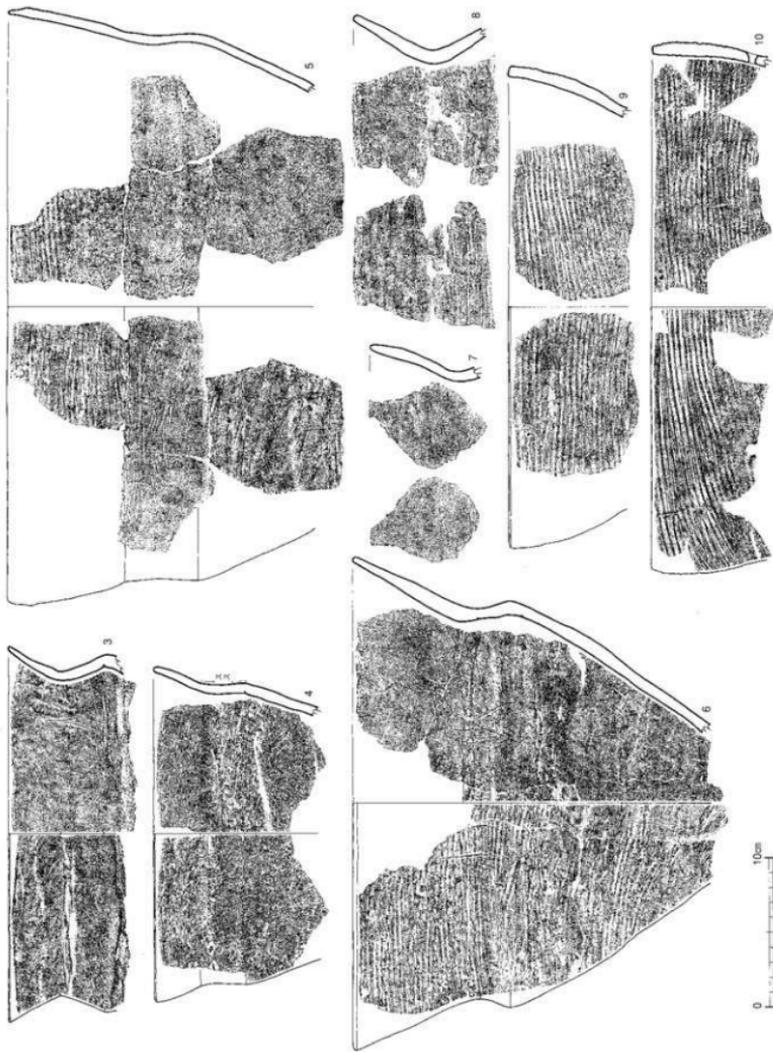
第75図 集石・土坑実測図及び集石内出土遺物



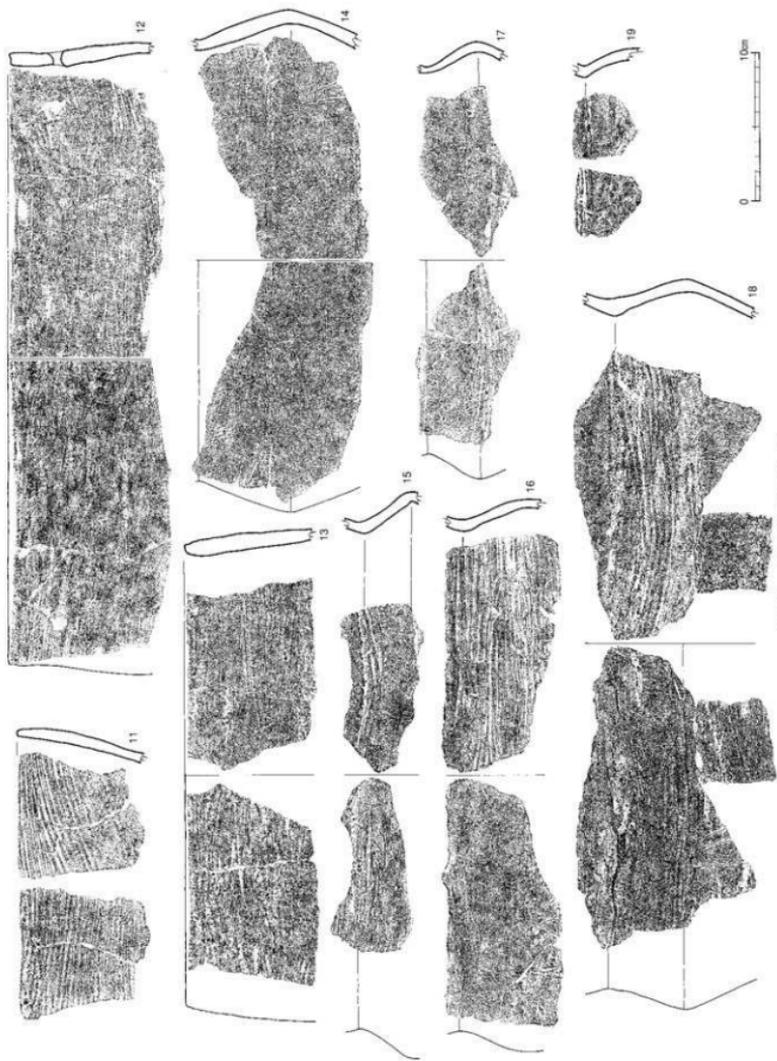
第76図 土坑内遺物出土状況図



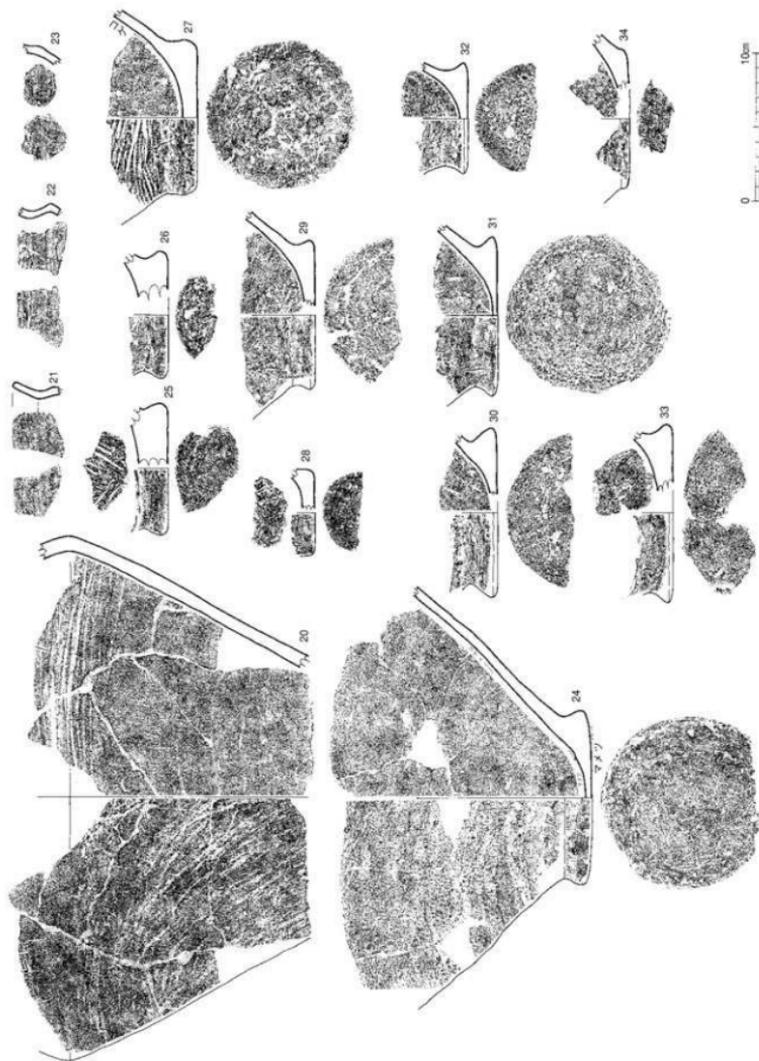
第77図 土坑実測図



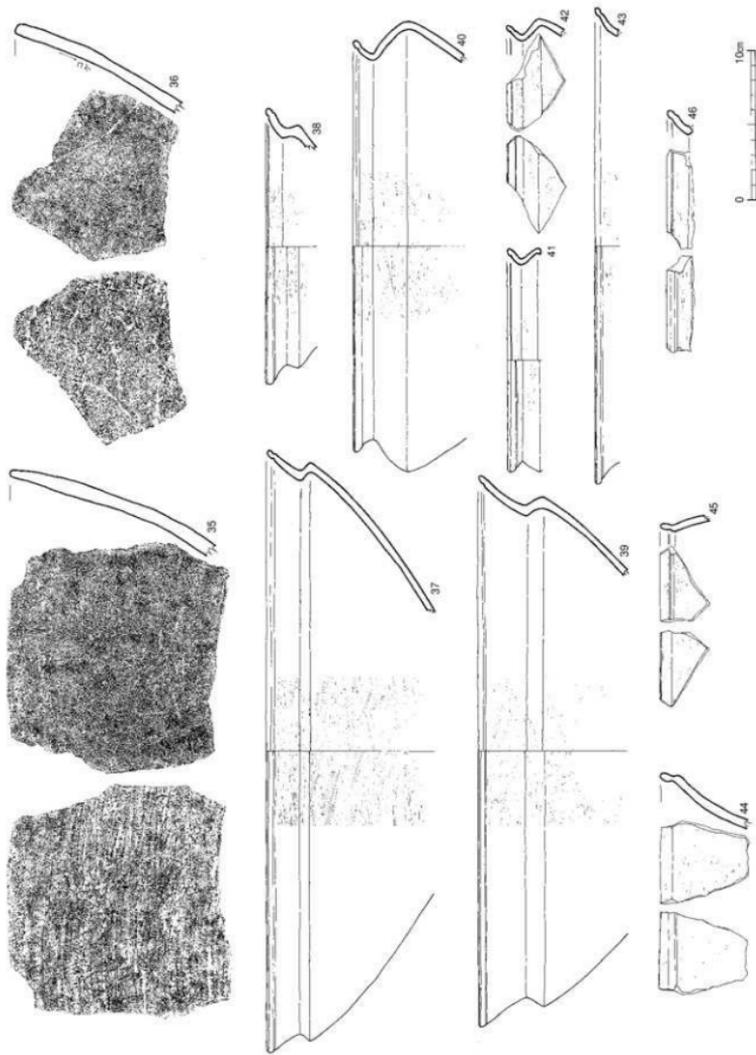
第78图 土坑内器物残片图(1)



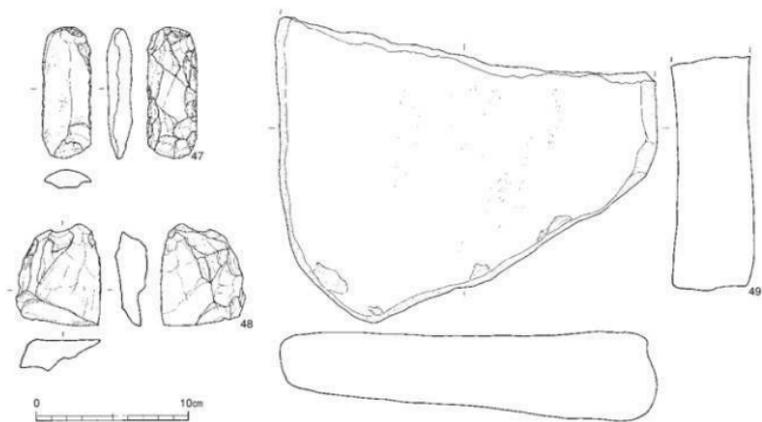
第79图 土坑内遗物实例图(2)



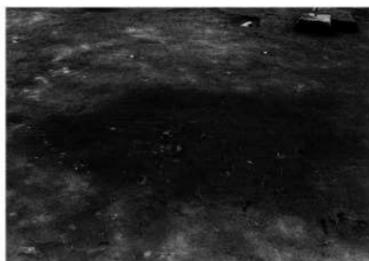
第60图 土坑内器物平面图 (3)



第61圖 土坑內遺物実測圖 (4)



第82図 土坑内遺物実測図(5)



①検出状況



②遺物出土状況



③土層断面1



④土層断面2

図版33 土坑11の調査状況

表8 焼土観察表

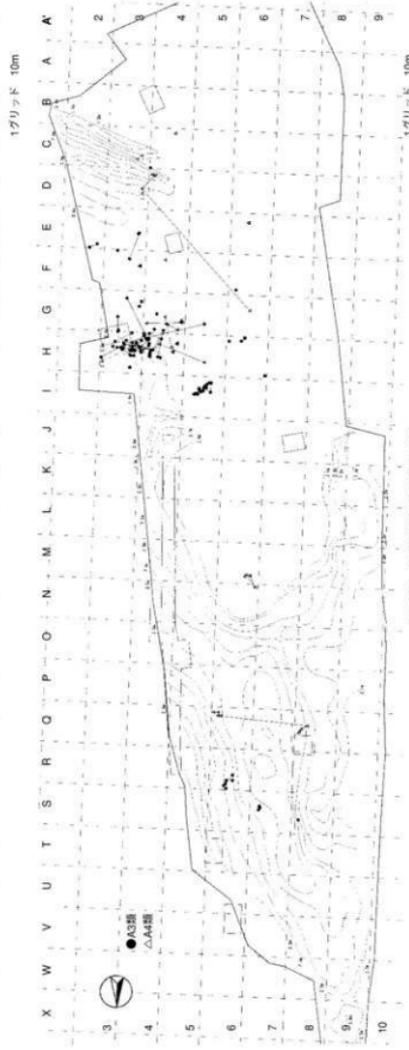
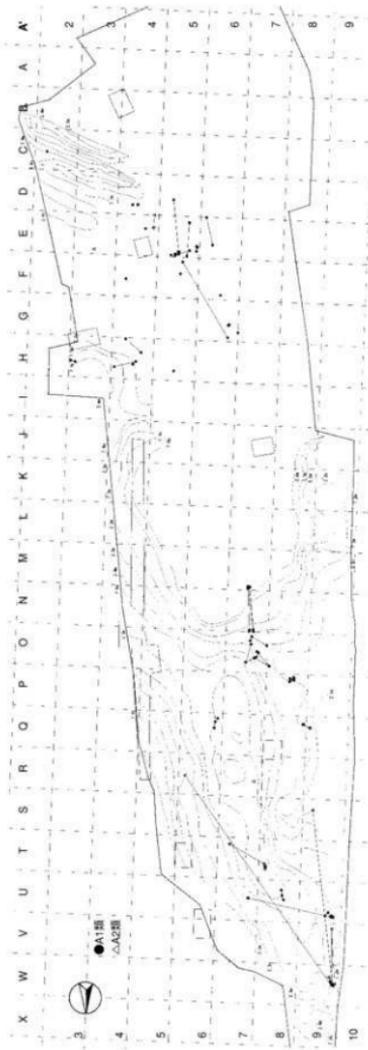
レイアウト 番号	遺構番号	計測値 (cm)		
		長径	短径	深さ
1	2968	112.0	102.0	7.0
2	2967	126.0	100.0	8.0
3	2961	82.0	68.0	—
4	2171	80.0	72.0	7.0
5	1186	129.0	56.0	—
6	2500	73.0	57.5	24.9
7	2401	53.5	47.0	12.3
8	2214	69.0	61.0	12.0
9	4号1	30.0	20.0	—
10	4号2	40.0	20.0	—
11	J-3区	160.0	70.0	—
12	3号	38.0	37.0	—
13	5号	170.0	90.0	37.0
14	6号	123.8	85.0	45.0
15	1号	78.4	71.6	—
16	2号	134.0	72.0	—

表9 柱穴観察表 (1)

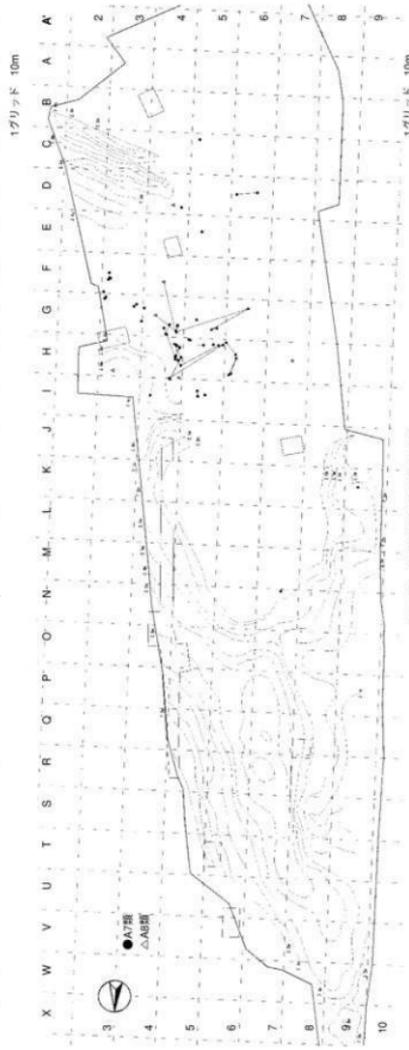
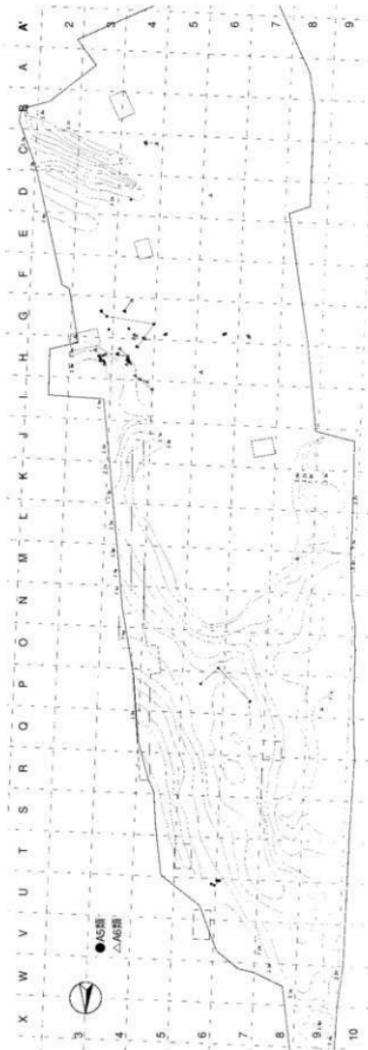
レイアウト 番号	遺構番号	計測値 (cm)		
		長径	短径	深さ
1	2903	21.0	21.0	22.4
2	2902	25.0	25.0	56.0
3	2901	26.0	26.0	52.1
4	2900	18.5	18.5	20.8
5	2905	21.0	21.0	25.6
6	2912	23.0	23.0	30.7
7	2906	19.0	19.0	32.0
8	2907	23.0	23.0	22.0
9	2908	24.0	24.0	33.2
10	2900	21.5	21.5	21.1
11	2910	17.5	17.5	13.0
12	2913	15.5	15.5	20.3
13	2914	29.5	29.5	27.1
14	2921	18.0	18.0	19.7
15	2915	20.0	20.0	18.2
16	2916	17.5	17.5	19.4
17	2918	23.0	23.0	27.8
18	2917	20.5	20.5	49.7
19	2920	26.5	26.5	26.9
20	2919	22.5	22.5	24.1
21	2851	19.0	19.0	15.0
22	1895	30.0	30.0	28.4
23	1896	22.0	22.0	30.0
24	2357	19.0	19.0	34.6
25	2359	20.0	20.0	25.8
26	2358	22.0	22.0	15.6
27	2360	22.0	22.0	13.0
28	2361	27.5	27.5	23.8
29	2362	22.5	22.5	7.1
30	2363	18.0	18.0	12.2
31	1900	27.0	27.0	24.2
32	2392	17.0	17.0	18.4
33	2310	28.0	28.0	22.3
34	2311	24.0	24.0	13.0
35	2312	27.5	27.5	7.1
36	2394	23.0	23.0	26.2
37	2313	23.0	23.0	22.4
38	2396	30.0	30.0	24.0
39	2315	23.0	23.0	17.1
40	2314	22.5	22.5	29.6
41	2368	19.0	19.0	15.7
42	2367	21.0	21.0	11.5
43	2366	21.0	21.0	11.1
44	2501	22.0	20.0	71.8
45	2502	17.0	14.5	51.2
46	2503	21.5	19.5	42.8
47	2507	27.5	25.0	87.7
48	2508	22.5	18.0	34.8
49	2506	30.0	20.0	29.4
50	2504	19.0	19.0	30.2

表10 柱穴観察表 (2)

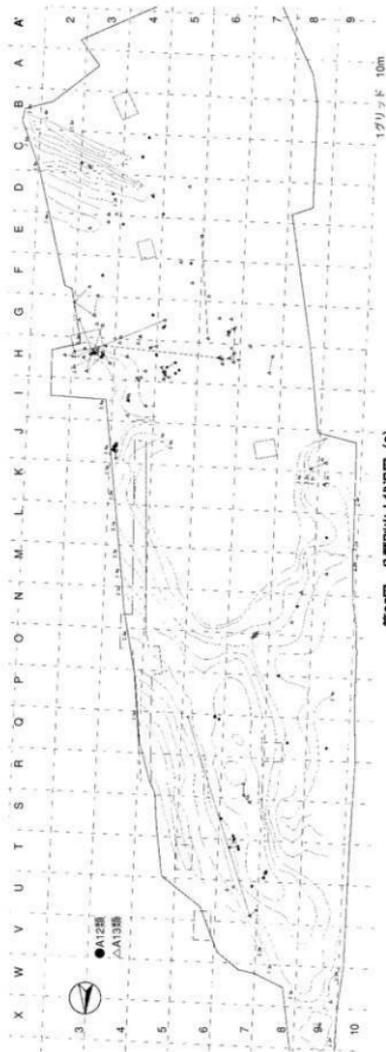
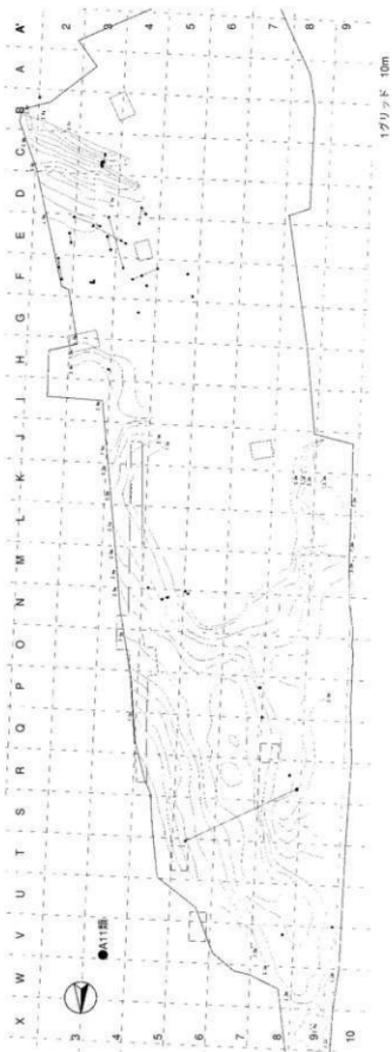
レイアウト 番号	遺構番号	計測値 (cm)		
		長径	短径	深さ
51	2505	24.0	24.0	75.1
52	2509	24.0	24.0	31.6
53	2512	27.5	27.5	38.2
54	2510	31.0	31.0	77.5
55	2513	20.0	20.0	27.0
56	2514	24.0	24.0	53.5
57	2515	26.5	26.5	60.5
58	2516	22.0	22.0	39.0
59	2402	29.0	29.0	28.2
60	2316	31.0	31.0	23.6
61	2317	29.5	29.5	27.0
62	2318	22.5	22.5	19.6
63	2369	23.0	21.5	11.4
64	2517	41.5	36.0	58.4
65	2518	34.0	29.5	58.4
66	2519	36.0	32.5	80.0
67	2522	27.0	22.5	47.5
68	2426	24.0	22.5	26.0
69	2427	24.0	21.0	36.4
70	2424	21.5	18.0	56.0
71	2425	34.0	21.5	11.7
72	2540	21.0	18.5	11.2
73	2342	18.5	17.5	19.8
74	2524	33.5	26.5	10.6
75	2523	21.0	19.0	13.2
76	2637	26.5	17.0	6.9
77	2636	20.0	16.0	15.0
78	2635	28.0	21.0	12.7
79	2589	25.5	25.0	26.3
80	2520	28.0	24.0	16.1
81	2624	26.0	22.0	5.1
82	2623	31.0	29.0	13.9
83	2643	23.0	17.5	5.1
84	2642	20.5	16.0	0.7
85	2626	19.5	19.0	25.3
86	2640	21.5	19.5	12.1
87	2641	21.5	18.0	16.0
88	2181	38.5	36.0	14.9
89	2182	30.0	23.0	15.1
90	2379	38.0	27.5	32.5
91	2343	24.0	21.5	27.2
92	2345	30.0	28.0	30.8
93	2563	23.0	22.5	43.1
94	2594	23.0	22.0	38.9
95	2578	12.5	12.0	4.2
96	2537	22.0	20.0	9.2
97	2534	23.0	22.0	24.5
98	2535	35.0	27.0	28.3
99	2536	19.0	16.0	24.3
100	2538	35.0	33.5	25.6
101	2546	28.5	23.0	18.3
102	2557	32.0	28.0	34.6
103	2558 (27.0)	(13.0)	(13.0)	(26.0)
104	2569	25.0	25.0	23.8
105	2565	47.5	32.0	40.6
106	2563	26.0	23.5	44.7
107	2564	24.5	22.0	5.5
108	2559	34.0	21.0	35.6
109	2560	20.5	19.5	22.2
110	2561	54.0	36.0	34.9
111	2574	22.0	18.0	18.2



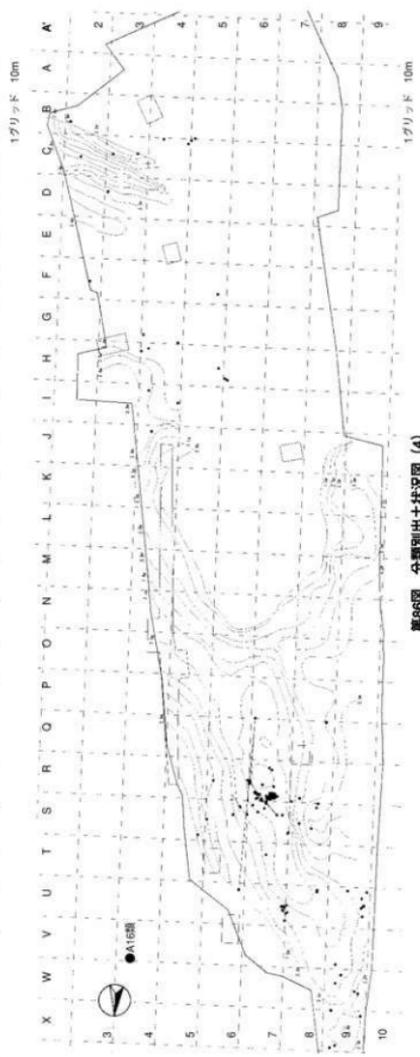
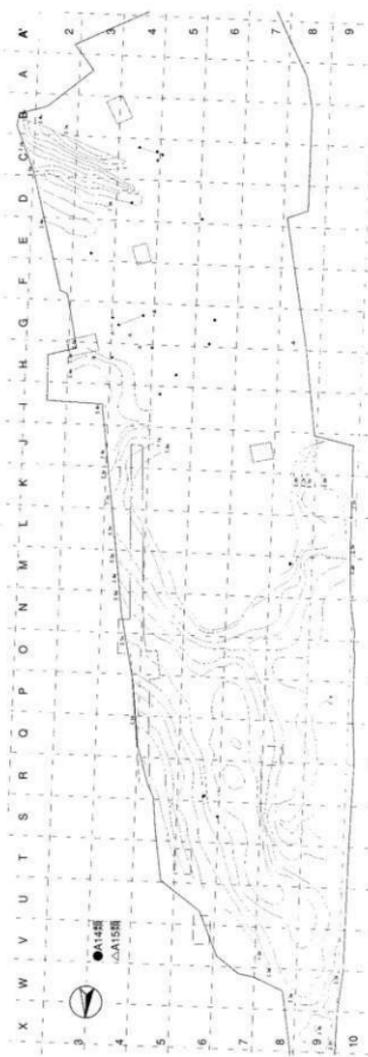
第63図 分類別出土状況図 (1)



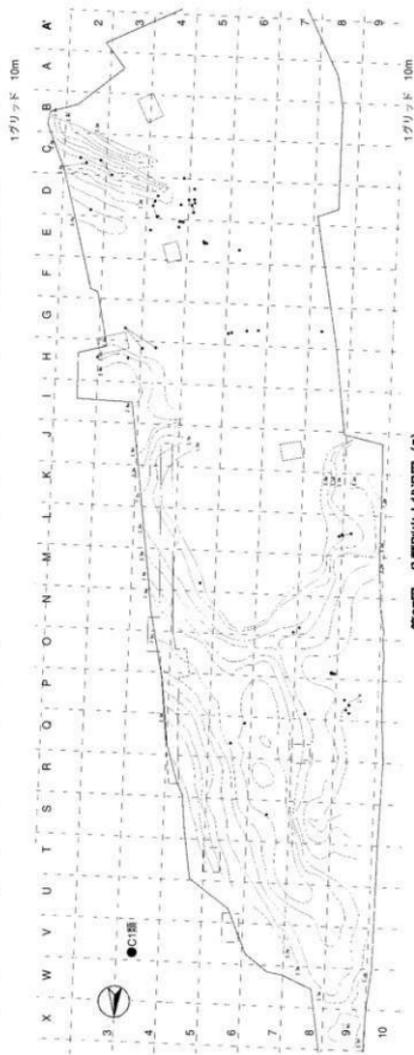
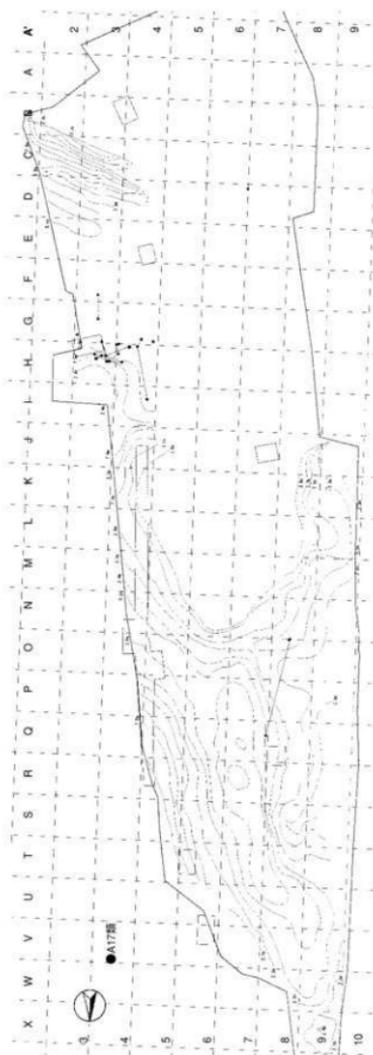
第64図 分類別出土状況図 (2)



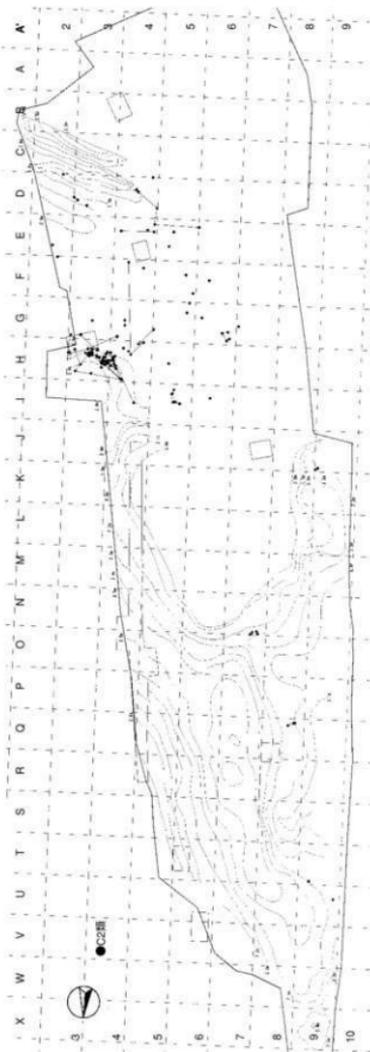
第65図 分類別出土状況図 (3)



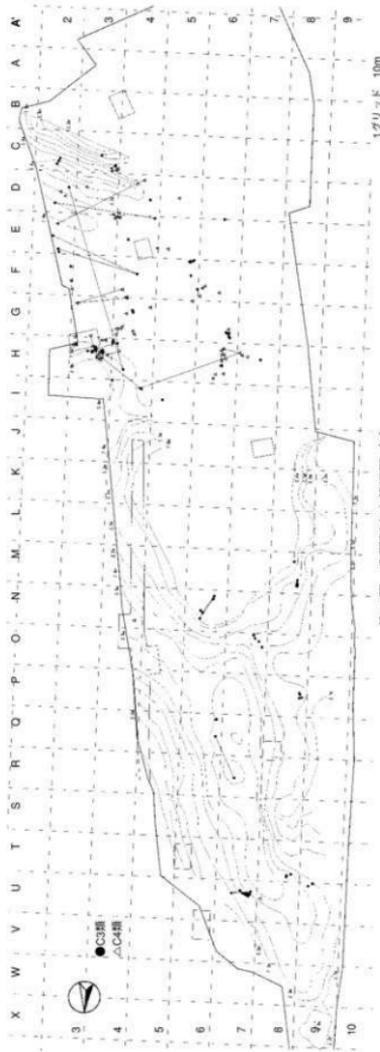
第66図 分類別出土状況図 (4)



第57図 分類別出土状況図 (5)

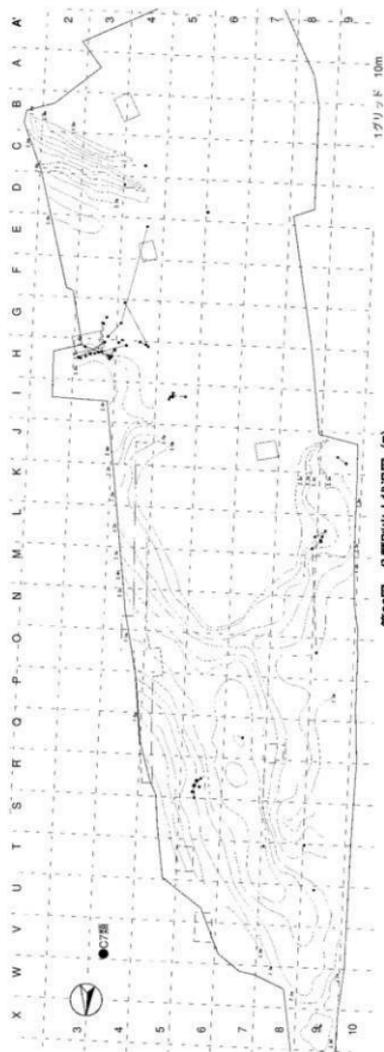
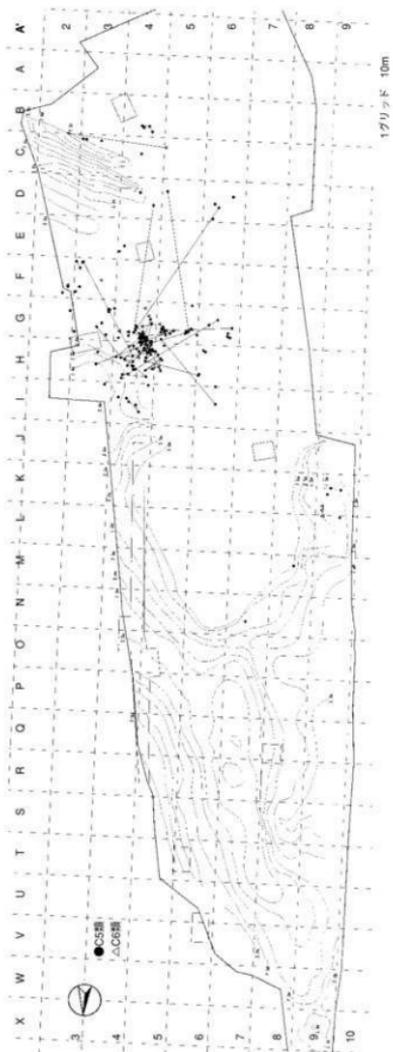


17mグリッド

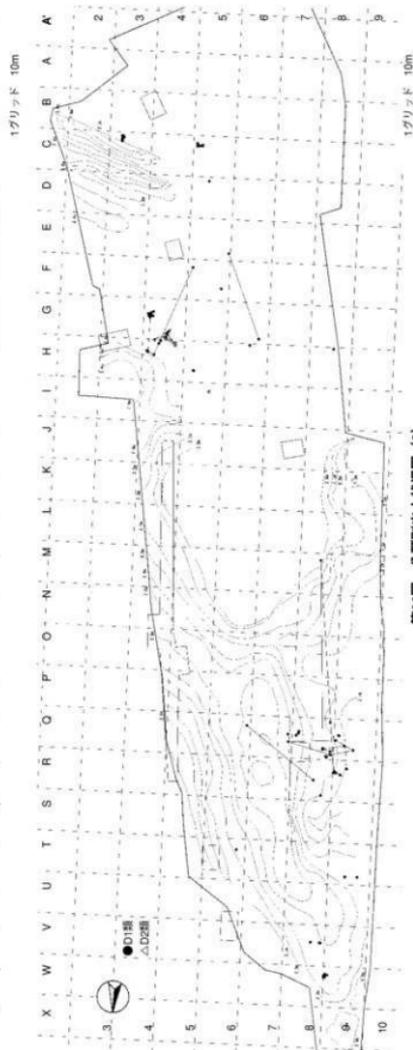
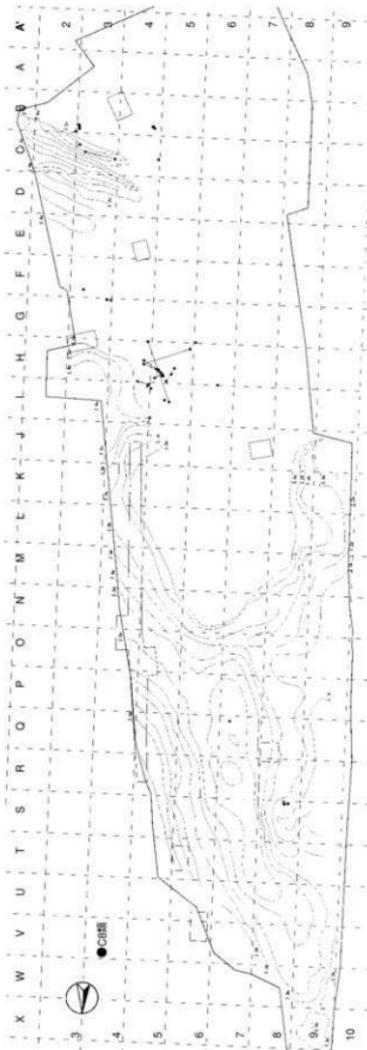


17mグリッド

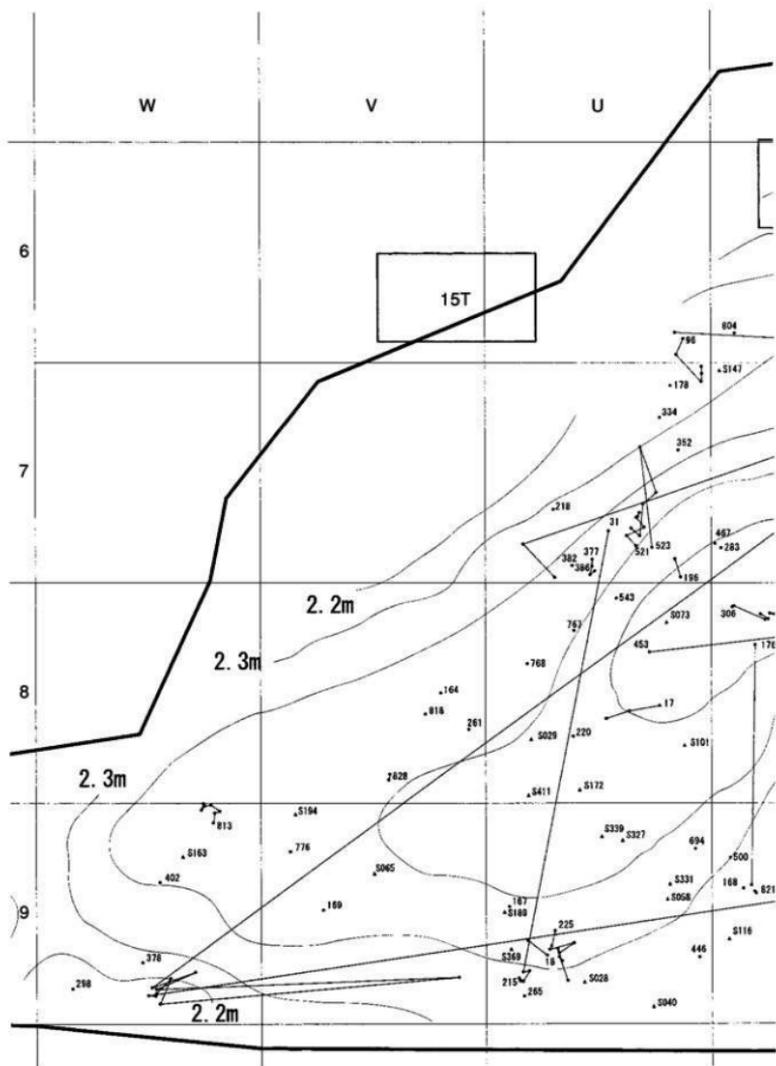
第68図 分譲別出土状況図 (6)



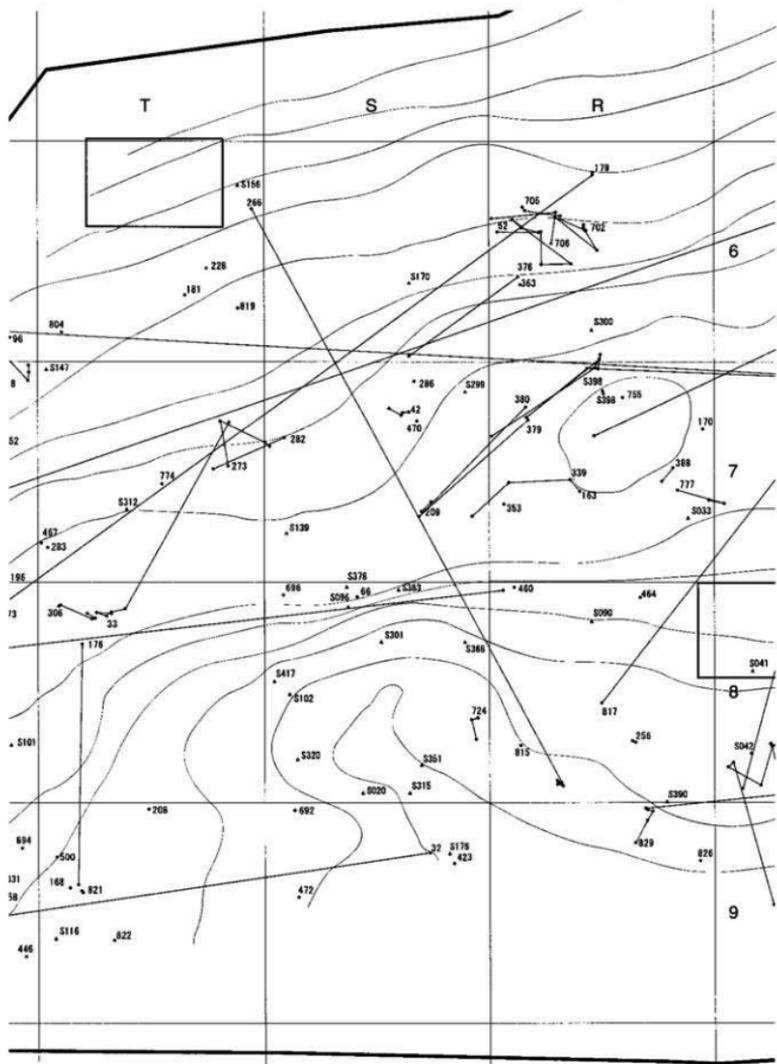
第69図 分類別出土状況図 (7)



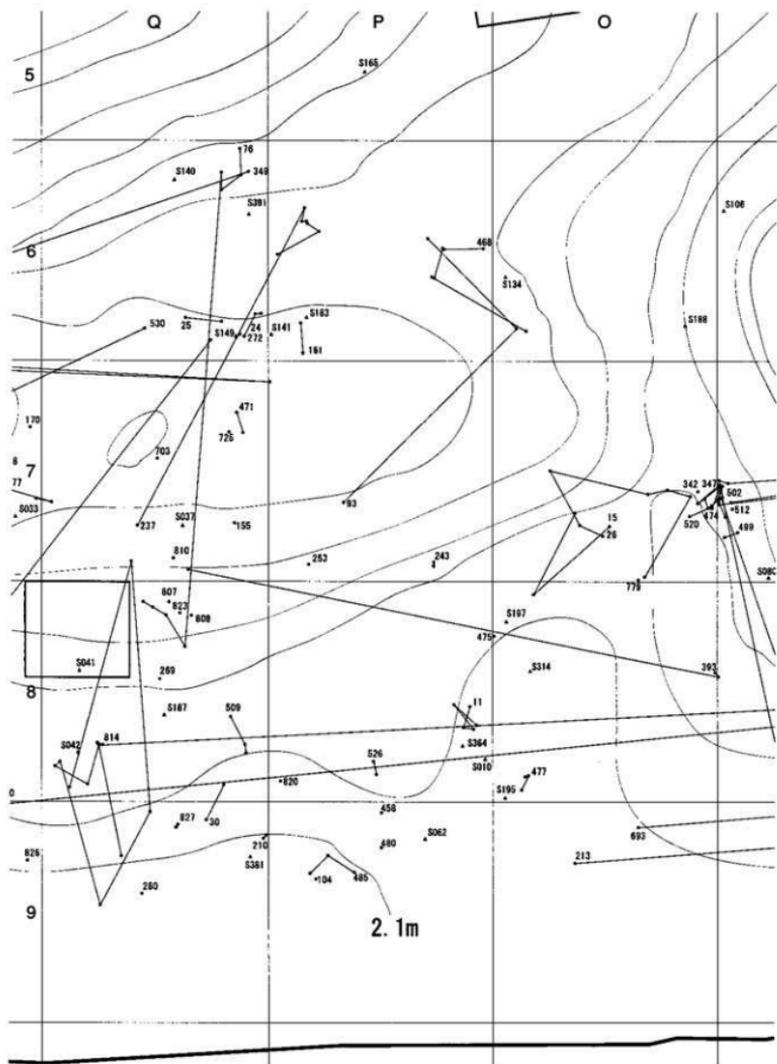
第90図 分類別出土状況図 (8)



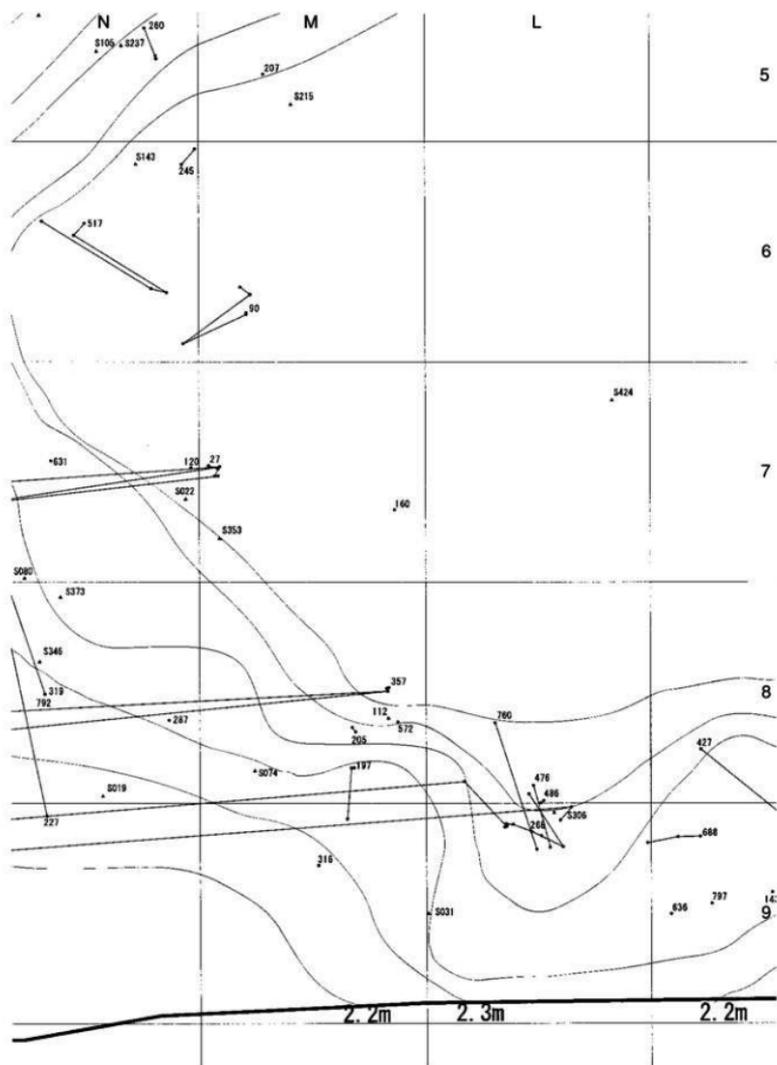
第91図 掲載遺物の出土状況図 (1)



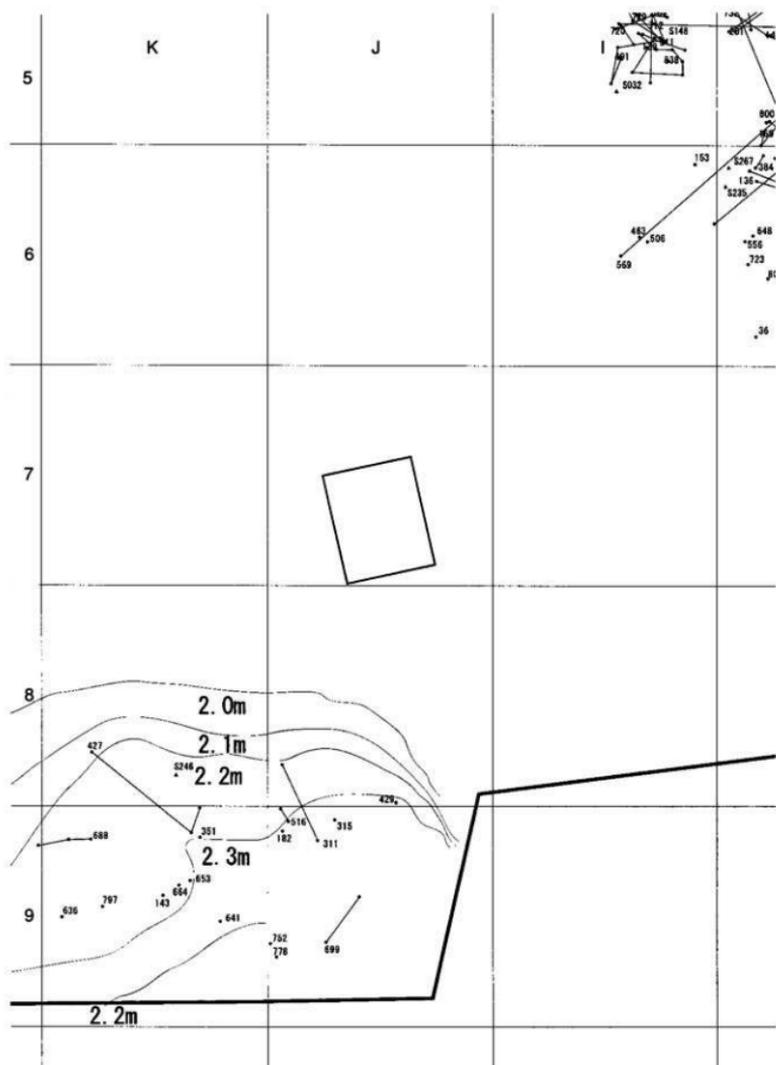
第92図 掘載遺物の出土状況図(2)



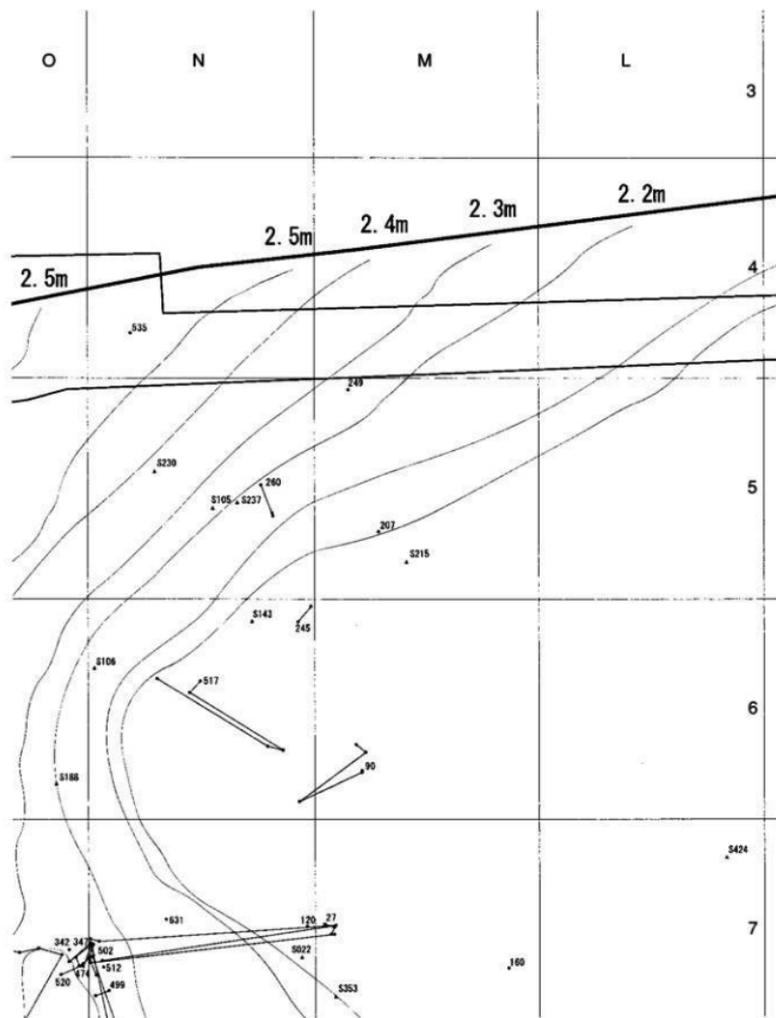
第93図 掲載遺物の出土状況図 (3)



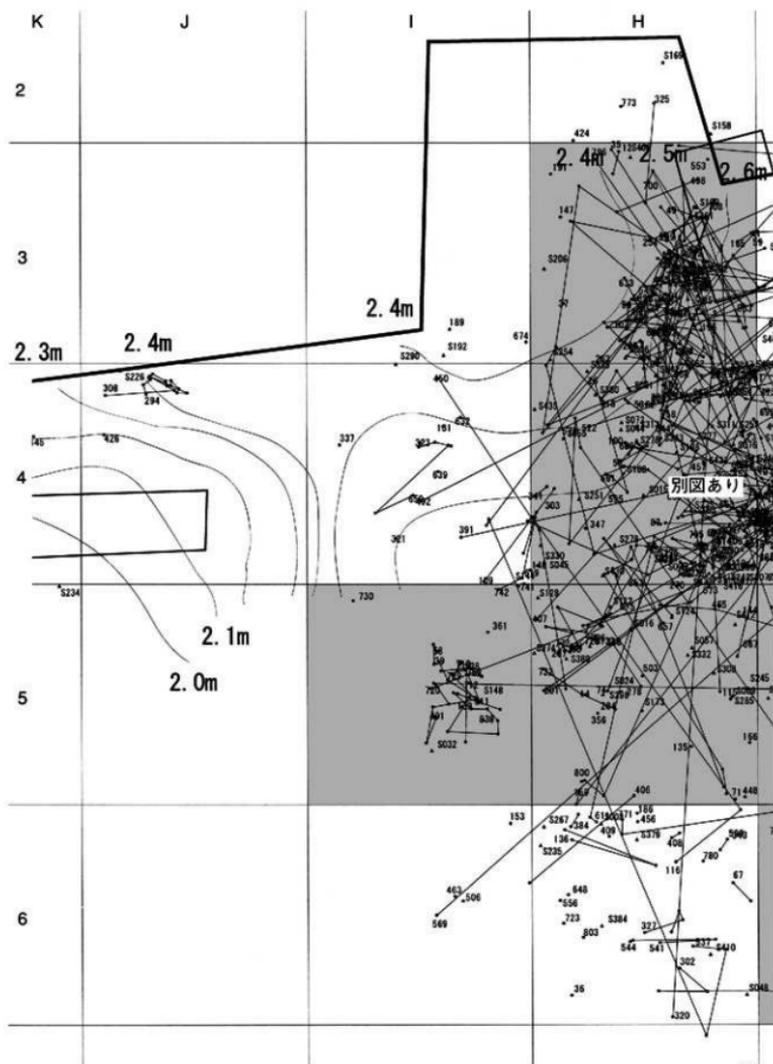
第94図 埋蔵遺物の出土状況図(4)



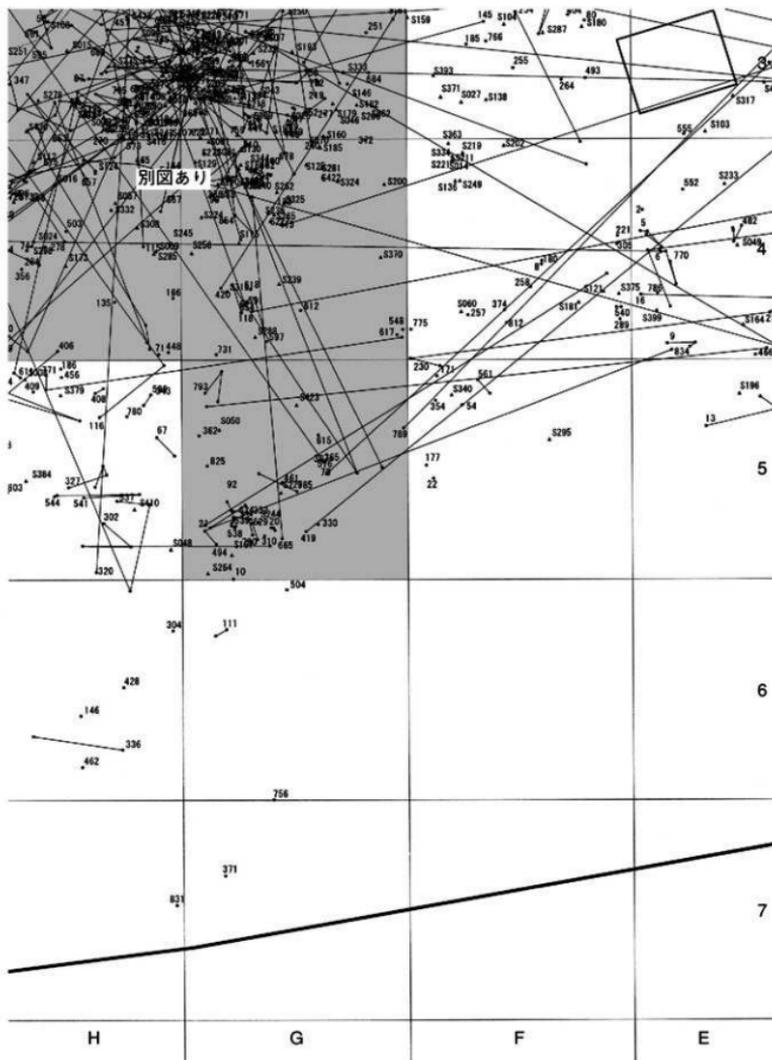
第95図 掲載遺物の出土状況図 (5)



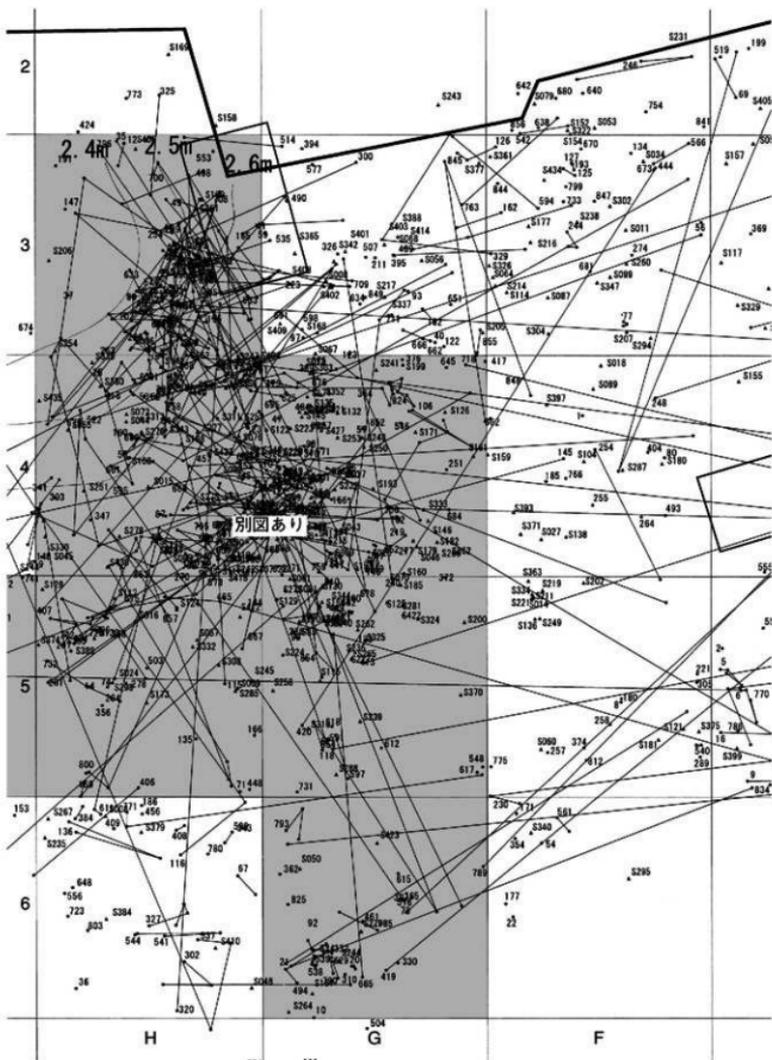
第96図 掃蕩遺物の出土状況図 (6)



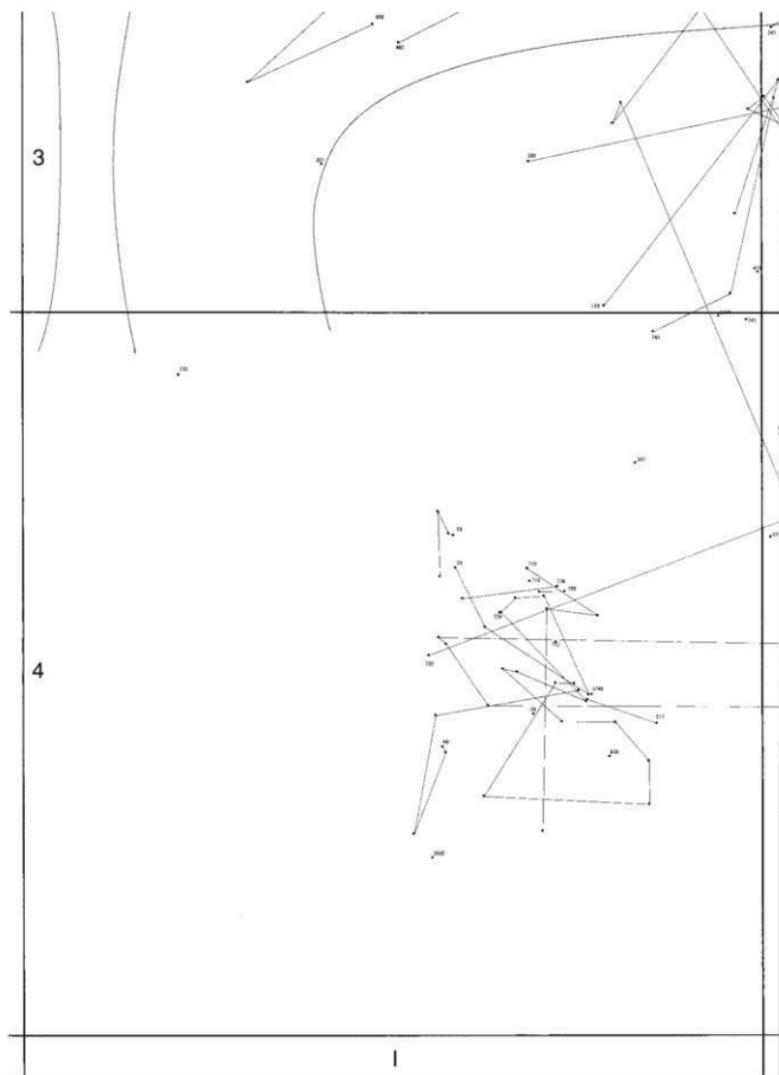
第97図 播磨遺物の出土状況図 (7)



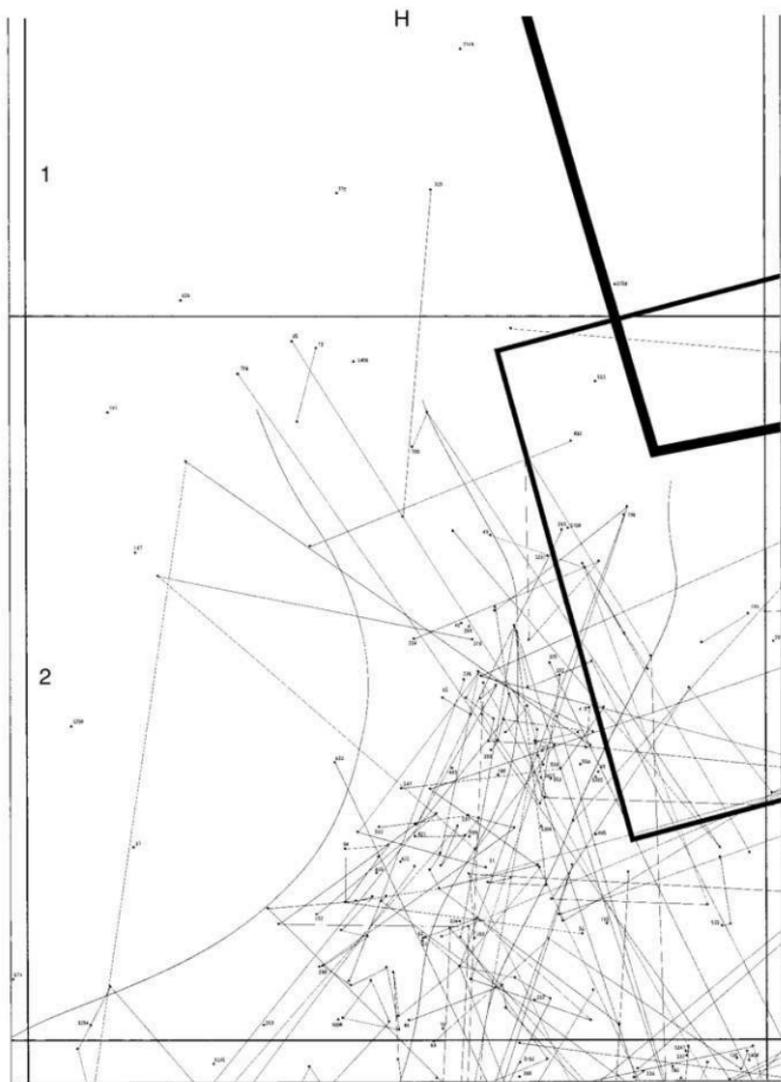
第98図 埋藏遺物の出土状況図 (B)



第99図 播磨遺物の出土状況図 (9)

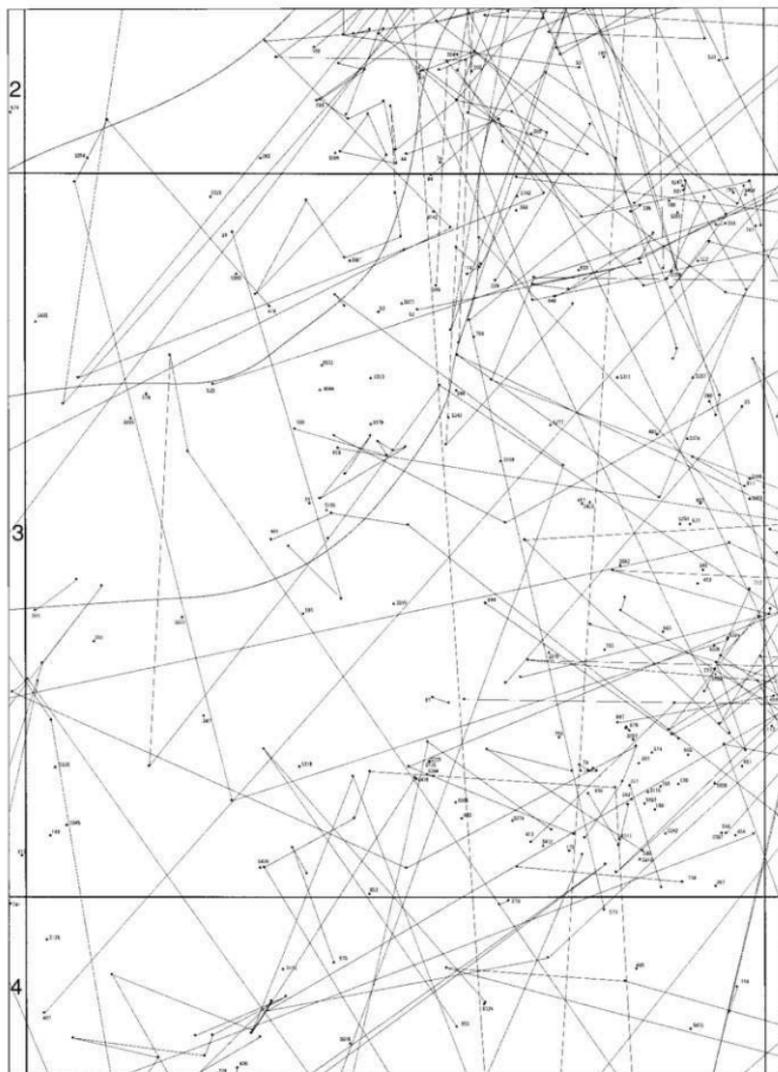


第101図 掲載遺物の出土状況図 (11)



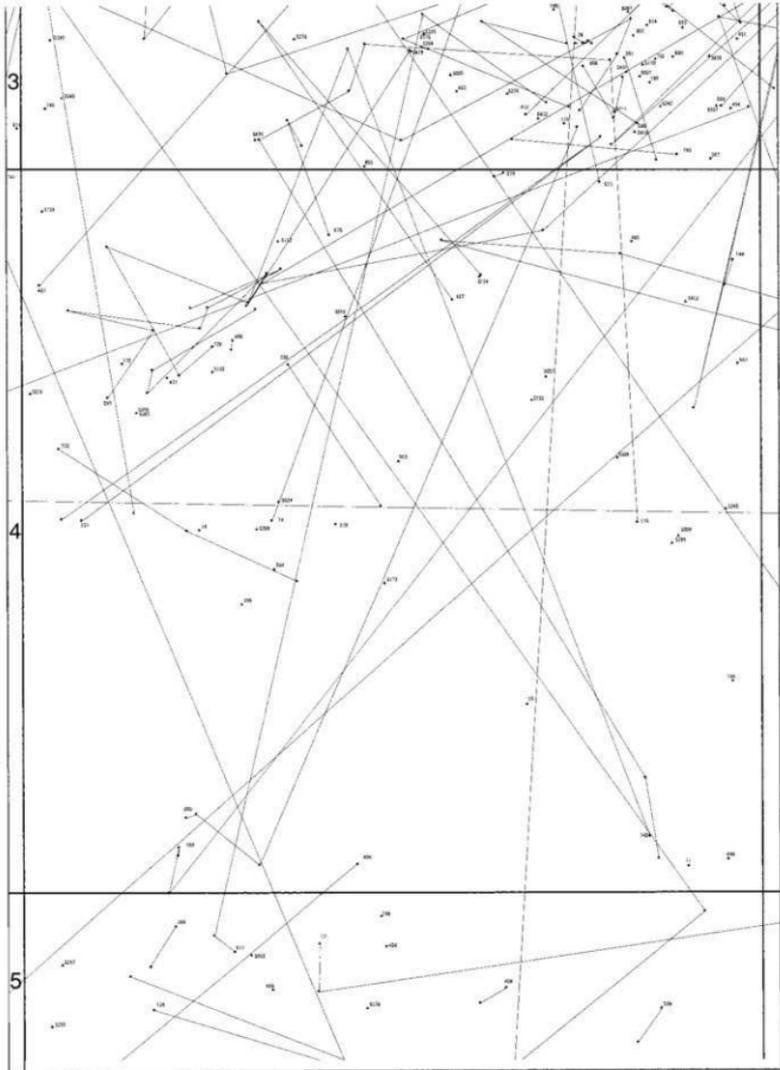
第102図 掲載遺物の出土状況図 (12)

H



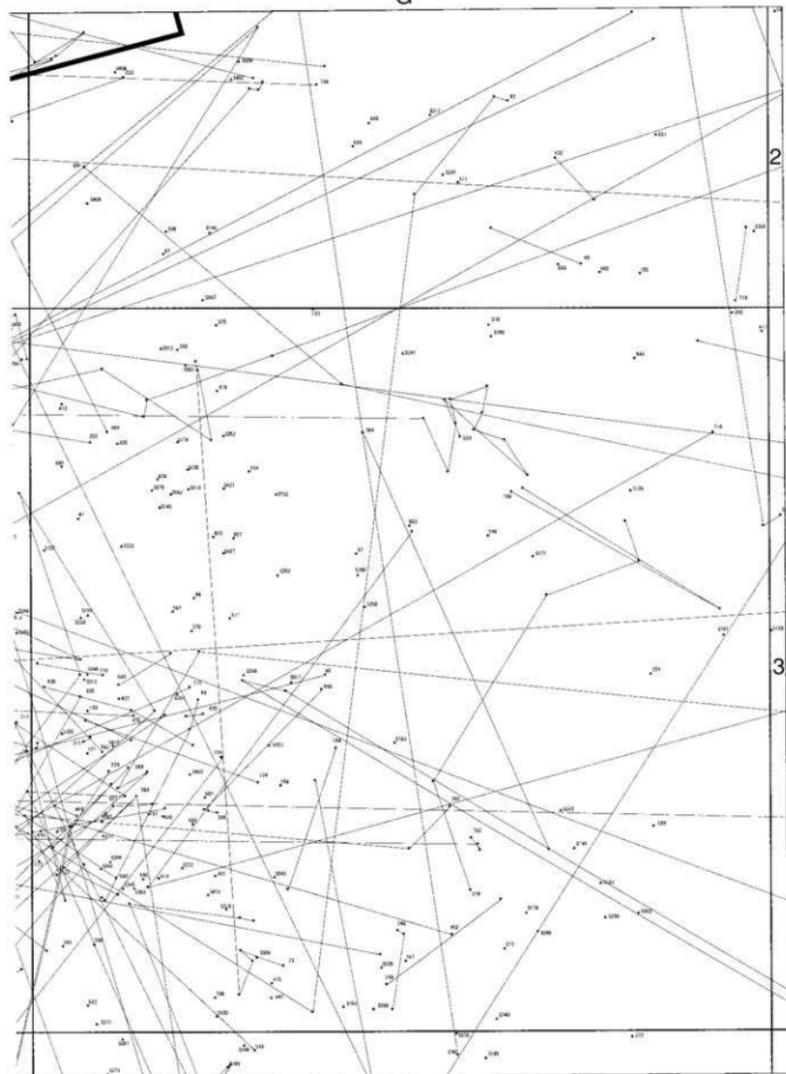
第103図 掲載遺物の出土状況図 (13)

H

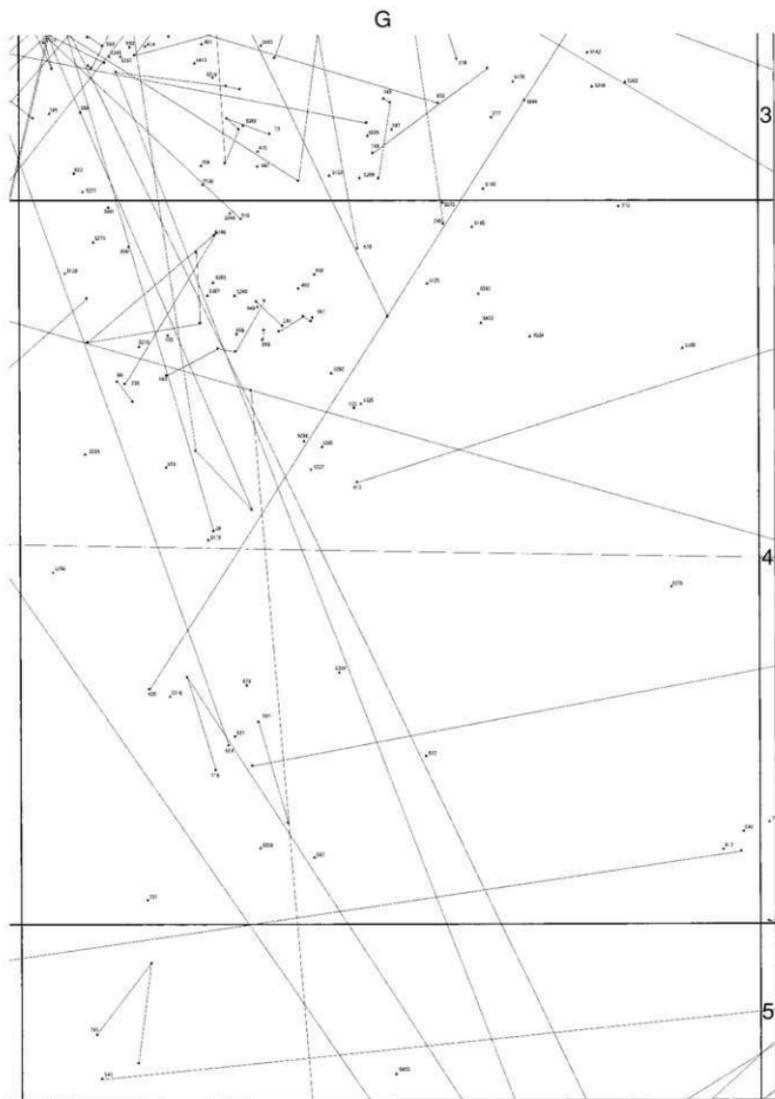


第104図 掲載遺物の出土状況図 (14)

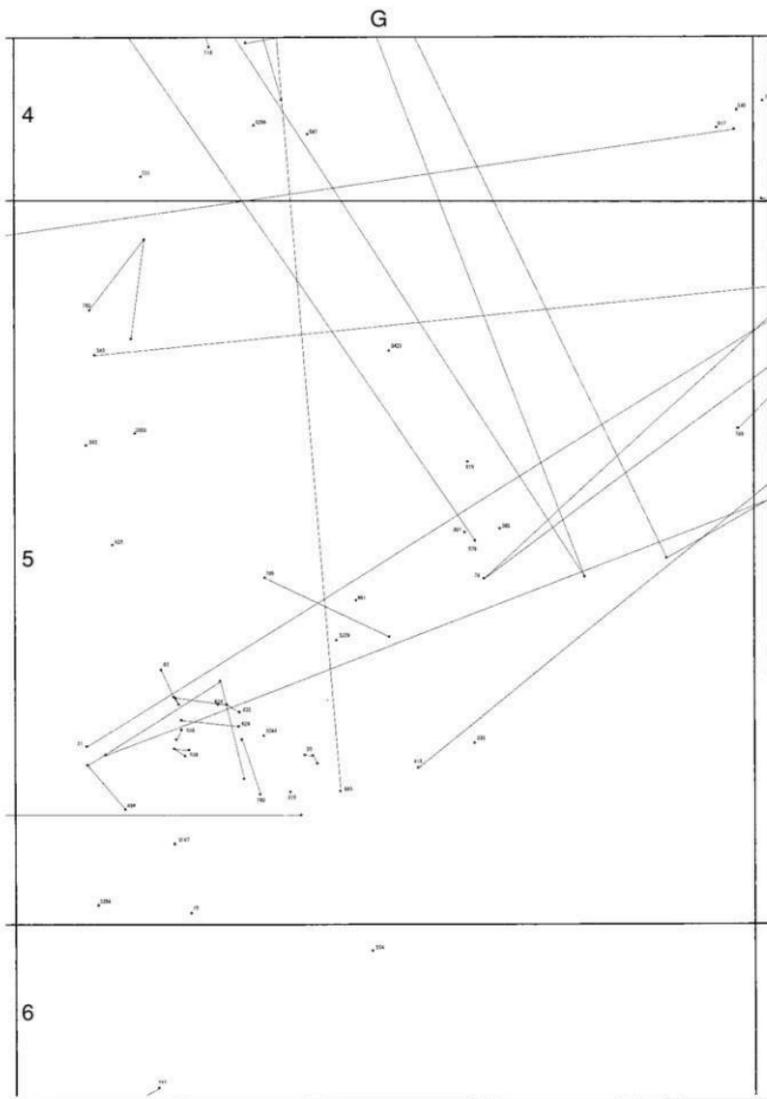
G



第105図 掲載遺物の出土状況図 (15)



第106図 掲載遺物の出土状況図 (16)



第107図 掲載遺物の出土状況図 (17)

は波状口縁を呈し、波頂部に小さな凹点が施される。22は、口縁部肥厚帯がやや寸詰まりの感がある。24・25は口縁部外面がわずかに内湾して立ち上がる。28・29は強く外傾する。

A 2類 (第111図30～第112図34)

口縁部が外傾し、胴部が張る。1類との違いは、口縁部が肥厚しない点である。27点が出土し5点を図化した。31～33は頸部に突起が付く。34は、外面のスと内面のコゲの付着ラインが揃う。

A 3類 (第113図35～第118図71)

口縁部が緩やかに外反し、胴部が膨らむ器形を呈する。1・2類との違いは、外面に貝殻条痕を残すものが多い点にある。173点が出土し37点を図化した。49は、口縁部がわずかに内湾し、胴部の膨らみがやや球状に近い。50は胴部の膨らみまでが長い。60は大型の土器である。4つの波頂部を有し、頂部付近が内側へ入り込む。66～71は胴部が緩やかに膨らむものである。66は口縁部にリボン状の突起が付く。

A 4類 (第119図72～第122図91)

口縁部が直行し胴部でわずかに屈曲する。73は胴部屈

曲付近に沈線状の施文が見られる。61点が出土し20点を図化した。77・78は口縁部がやや内傾する。

A 5類 (第123図92～第124図99)

口縁部が直行ないしわずかに内湾し胴部が張らない直線的なものである。30点が出土し8点を図化した。

A 6類 (第124図100～第127図114)

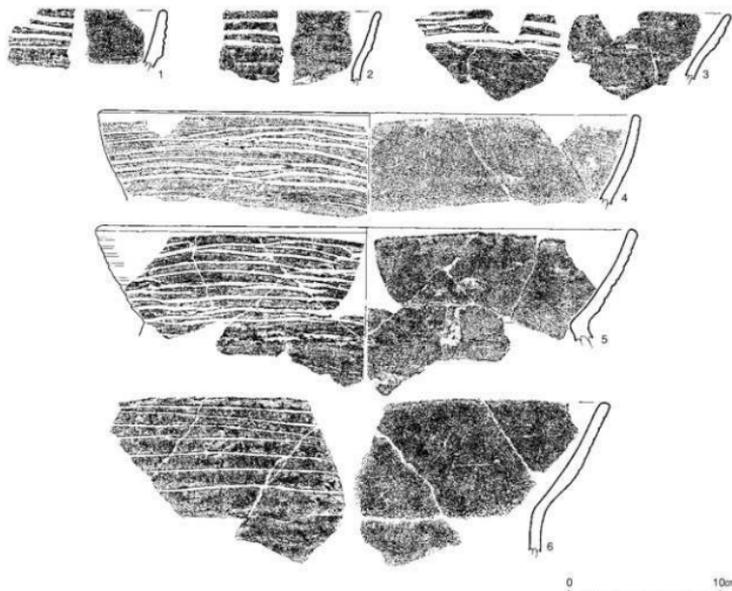
胴部が屈曲し、口径より屈曲部の胴部径のほうが大きいものである。39点が出土し15点を図化した。

104はわずかに波状口縁を呈する。108は胴部屈曲が強い。109は口縁部に突起が付く、その左右にはヒレ状突起が付く。

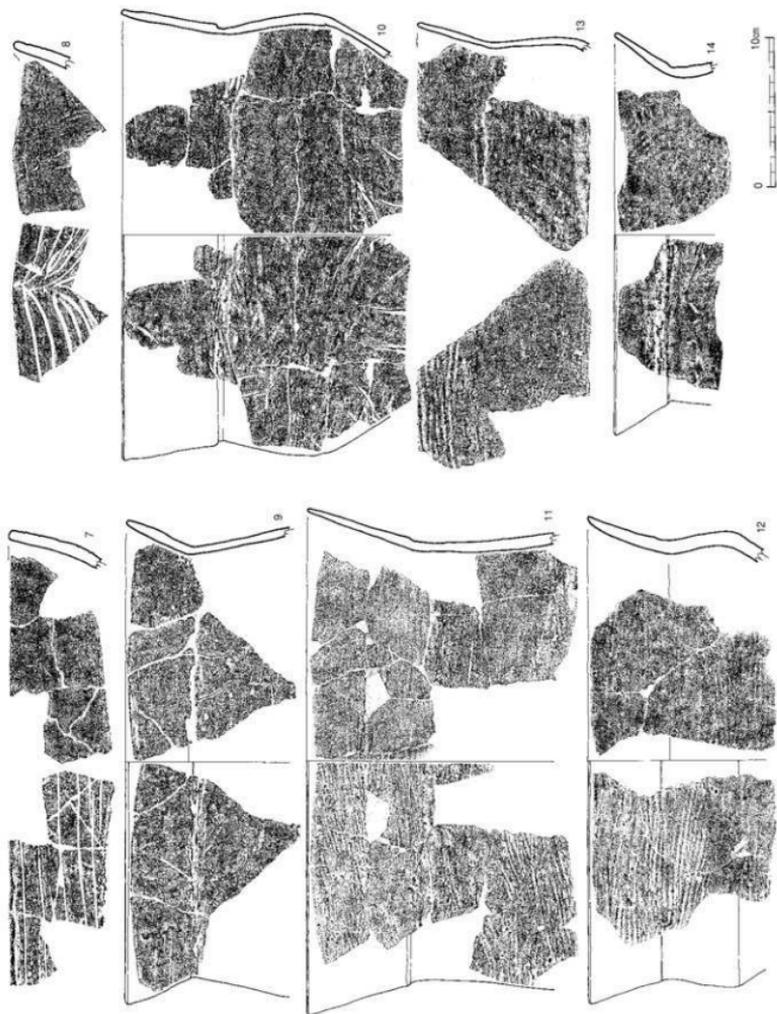
A 7類 (第127図115～第130図144)

口縁部が肥厚するものである。244点が出土し30点を図化した。

119は口縁部に突起が付く。また、口縁部内面には器面調整後、縦位に粘土を貼り付けている部分が確認できた。土器焼成前のヒビ割れを補修した痕跡かと思われる。125は突起が付くその左右にはヒレ状の突起が付く。125及び126・127は口縁部肥厚が長めである。



第108図 遺物実測図 (1) A1類土器①



第109図 遺物実測図(2) A1(墓土器②)